神戸市東灘区

# 本山遺跡発掘調査報告書

財團法人　古代學協會

昭和５９年

# 目　　次

はじめに…… 1

第1章　遺跡の位置と環境 …… 1

第1節　遺跡の位置…… 1

第2節　周辺の遺跡…… 4

第2章　発掘調査の経過 …… 5

第1節　発掘調査の経過 …… 5

第2節　層　　序 …… 7

第3節　中世井戸・土壙1…… 7

第4節　自然流路・不明土壙…… 13

第3章　縄文時代・弥生時代の遺物…… 16

第1節　縄文時代晩期の土器…… 16

第2節　弥生時代の土器 …… 18

第3節　石　　器 …… 46

第4節　その他の遺物 …… 52

第4章　自然科学的調査 …… 53

第1節　花粉分析からみた周辺の森林景観について …… 53

第2節　珪藻分析 …… 54

むすびにかえて …… 59

## 図版目次

図版第1　上：遺跡遠景　下：遺跡全景
図版第2　中世井戸全景
図版第3　上：土壙1全景　下：土壙2全景
図版第4　上：土壙3全景　下：土壙4全景
図版第5　自然流路全景
図版第6　自然流路埋土断面・1
図版第7　自然流路埋土断面・2
図版第8　土器出土状態・1
図版第9　土器出土状態・2
図版第10　上：壷出土状態
　　下：砥石・壷出土状態
図版第11　石器出土状態
図版第12　上：石斧の柄未製品？出土状態
　　下：板状木製品出土状態

## 挿図目次

第1図　遺跡の位置および周辺の遺跡 …… 2
第2図　遺跡周辺地形図 …… 5
第3図　グリット配置図 …… 6
第4図　層序実測図 …… 8
第5図　黒色砂質土上面遺構実測図 …… 10
第6図　中世井戸実測図 …… 11
第7図　中世井戸・土壙1出土遺物実測図 …… 12
第8図　自然流路・不明土壙実測図 …… 14
第9図　自然流路埋土層序図 …… 16
第10図　調査終了面地形実測図 …… 15
第11図　縄文時代晩期の土器実測図 …… 16
第12図　弥生時代第Ⅰ様式壷形土器実測図・1 …… 20
第13図　弥生時代第Ⅰ様式壷形土器実測図・2 …… 21
第14図　弥生時代第Ⅰ様式壷形土器実測図・3 …… 22
第15図　弥生時代第Ⅰ様式甕形土器実測図・1 …… 23
第16図　弥生時代第Ⅰ様式甕形土器実測図・2 …… 24
第17図　弥生時代第Ⅰ様式甕形土器実測図・3，鉢形土器実測図 …… 25
第18図　弥生時代第Ⅱ様式壷形土器実測図・1 …… 28
第19図　弥生時代第Ⅱ様式壷形土器実測図・2 …… 29
第20図　弥生時代第Ⅱ様式壷形土器実測図・3 …… 30
第21図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・1 …… 31
第22図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・2 …… 32
第23図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・3 …… 33
第24図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・4 …… 34
第25図　弥生時代第Ⅱ様式鉢形土器実測図 …… 35
第26図　弥生時代第Ⅲ様式壷形土器実測図 …… 37
第27図　弥生時代第Ⅲ・Ⅳ様式壷形土器・甕形土器・鉢形土器実測図 …… 38
第28図　黒色砂質土出土壷形土器実測図 …… 39
第29図　黒色砂質土出土甕形土器・鉢形土器実測図 …… 40
第30図　その他の弥生時代土器実測図 …… 41
第31図　磨製石斧・石包丁・敲石実測図 …… 50
第32図　磨石・投弾状石器・石皿実測図 …… 51
第33図　砥石実測図 …… 51
第34図　石鏃・楔形石器・削器実測図 …… 52
第35図　花粉分析・珪藻分析資料採取B地点模式図 …… 53

## 付表目次

第1表　周辺の縄文・弥生時代遺跡一覧表 …… 3
第2表　自然流路出土壷形土器口縁端面，内面文様組合せ一覧表 …… 42
第3表　自然流路出土壷形土器体部文様一覧表 …… 44
第4表　自然流路出土甕形土器口頸部施文比較表 …… 44
第5表　石器一覧表 …… 47
第6表　1プレパラート当りの出現珪藻表 …… 56
第7表　出現珪藻表 …… 57
第8表　珪藻分析表 …… 58

# 例　　言

1. 本書は，昭和58年に財団法人古代學協會・平安博物館が，株式会社興国の委託をうけて行った，神戸市東灘区本山中町4丁目57他のマンション建築工事に伴なう発掘調査の報告書である。
2. 遺跡名は，昨年同町内で行われた発掘調査地と区別するため本山遺跡とする。
3. 本書の編集は南が行った。
4. 各項目の執筆は下記のとおりである。

下條信行(平安博物館考古学第3研究室)
　はじめに，第3章第1節
南　博史(　　同　　考古学第2研究室)
　第2章，第3章第4節，むすびにかえて
緒方　泉(同志社大学大学院学生)
　第1章，第3章第2節
原　真一(　　同　　大学学生)
　第3章第3節

なお，第4章第1節は神戸市立教育研究所の前田保夫先生，第2節は神戸大学熊野茂先生，同大学院学生居平昌士氏に執筆をお願いした。

# はじめに

神戸市東灘区本山中町の国道２号線に面した地(同町４丁目57他)におけるマンション建設に先だち，昭和58年８月，神戸市教育委員会が試掘を行ったところ，２つの試掘溝のうち，№２試掘溝の黒灰色粘質土から畿内第Ⅲ様式の弥生式土器の検出をみ，同教育委員会は，開発地全域について調査が必要と認めた。

マンション建設の施主である株式会社興国は，これを受けて昭和58年９月10日に，平安博物館に発掘調査を依頼してきた。

同博物館調査部はこれに礎き，同月13日に下條が現地視察を行い，帰路神戸市教育委員会にたちより，出土遺物を実見し，その上で発掘調査を引き受けることとなった。

調査は10月６日～12月14日まで行われたが，統括を下條信行が行い，南博史が調査主任として，これにあたった。調査補助員としては，緒方泉(同志社大学大学院学生)，原真一，長谷川久洋，村山一弥(同志社大学学生)が参加し，援助を受けた。

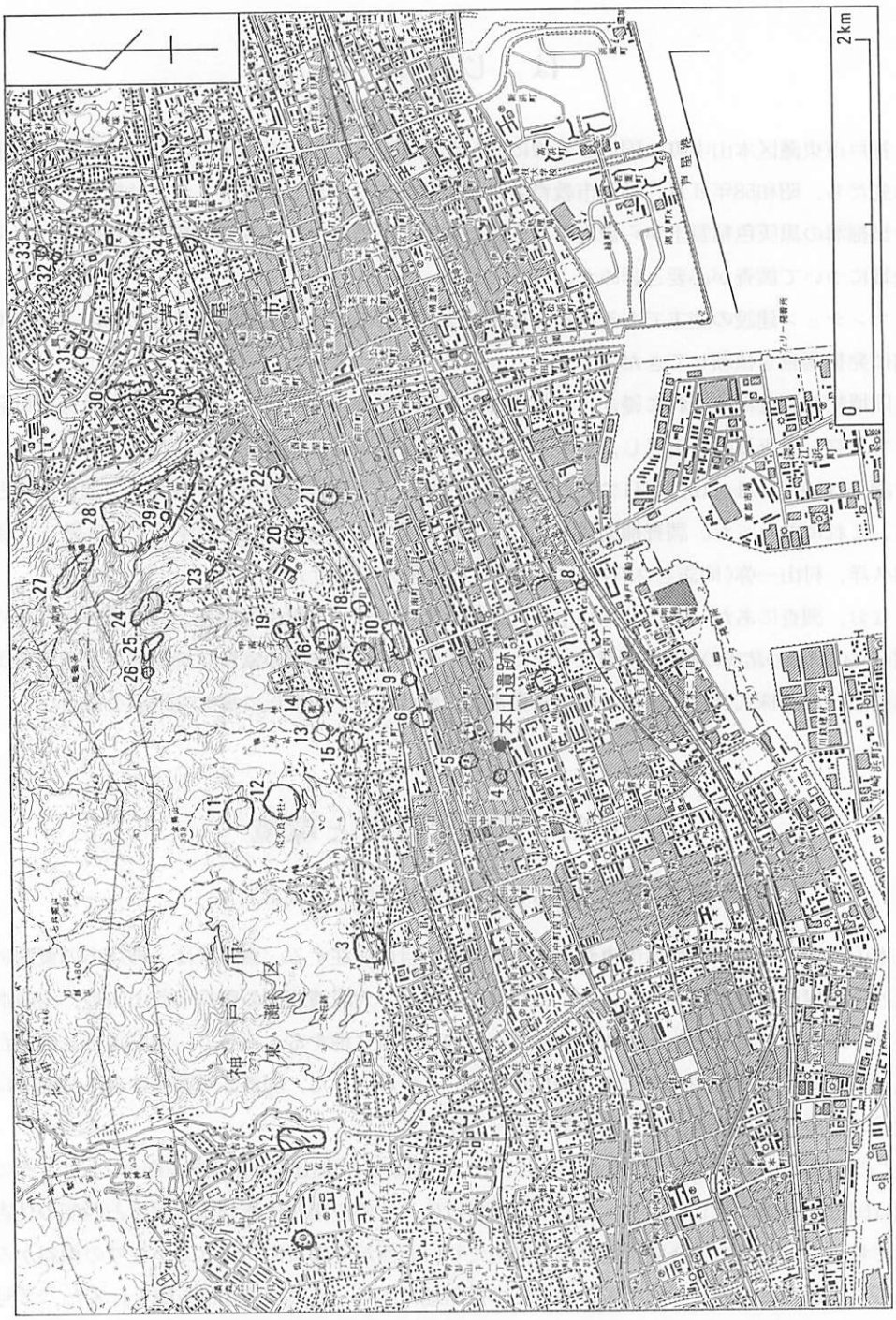
なお，調査にあたっては，神戸市教育委員会文化財課の奥田哲通係長，宮本郁雄氏はじめ，同市文化財課の諸氏の援助を受けた。また，施主の株式会社興国の富賀見統治部長，頼弘光氏，作業面からは株式会社習田組の細川永資常務，小河組の小河敏氏に種々の世話を得た。

# 第１章　遺跡の位置と環境

## 第１節　遺跡の位置（第１図，図版第１）

本山遺跡は，兵庫県神戸市東灘区本山中町四丁目に所在する。東灘区は，神戸市の東端にあたり，芦屋市と境を接っしている。また地形的には，大阪湾北側の東六甲前山山地，山麓洪積台地，海岸沖積平野という南北緩急に富んだ地形上に立地する。そして，海岸平野と山麓台地上には，閑静な住宅を中枢とした市街地が発達している。また，国道２号線をはさんだ南側は，近代のうめ立地を含み，準工業地帯となって栄えている。

この東灘区のほぼ中央に位置する本山中町は，国鉄摂津本山駅の南東約400mにあり，その南側は国道２号線に面している。そしてこの付近は，東側を南北に流れる芦屋川と西側の住吉川のどちらも天井川の複合扇状地の末端にあたり，北西から南東に向かってかなりの傾斜がみられる。本遺跡における今回の調査地もこの傾斜地にあり，海抜は約８mを測る。また，２号線をはさんだ南側約50mには，縄文海進によると思われる傾斜地形が認められ，弥生時代を含めて比較的海岸に近い立地であったことがわかる[1)]。




第1図　遺跡の位置および周辺の遺跡（●印が本山遺跡，番号は第1表に一致。）

第1表　周辺の縄文・弥生時代遺跡一覧表（番号は第1図に一致する。）

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 立地・標高(m) | 時期 | 遺物・遺構 | 註番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 渦森 | 神戸市東灘区住吉町渦森台一丁目 | | | 銅鐸 | 2 |
| 2 | 荒神山 | 同上 荒神山 | 山頂尾根 170～226 | 弥・4～5 | 土器，石器，住居址16基以上，土壙2 | 3 |
| 3 | 岡本梅林 | 同上 本山町 | 山腹 60 | | 土器，磨製石斧 | 4 |
| 4 | 本山中町 | 同上 本山中町 | 10 | 弥・2 | 土器，大溝 | 5 |
| 5 | 井戸田 | 同上 本山町小路 | 山麓 25 | 弥・1 | 土器，石斧，石匕 | 6 |
| 6 | 小路出口 | 同上 本山町井戸田 | 扇状地中央 25 | 弥・後期 | 土器，石鏃 | 7 |
| 7 | 本山南町 | 同上 本山南町 | | 弥・1 | 土器 | 8 |
| 8 | 深江 | 同上 本山町深江 | 扇状地端 2 | 弥・1 | 土器，蛤刃石斧 | 9 |
| 9 | 中野 | 同上 森北町 | | | 散布地 | 10 |
| 10 | 森西町 | 同上 森西町 | | 弥・中期 | 土器，石鏃，石錘 | 11 |
| 11 | 金鳥山 | 同上 本山町北畑 | 山腹 200 | 弥・4 | 土器，石器，竪穴状遺構3基 | 12 |
| 12 | 保久良神社 | 同上 本山町北畑 | 山腹 180 | 弥・3～5 | 土器，石器，銅戈 | 13 |
| 13 | 生駒 | 同上 本山北町 | | | 銅鐸 | 14 |
| 14 | 神戸女子薬大構内 | 同上 本山北町 | 山腹 95 | 弥・後期 | 土器 | 15 |
| 15 | 垣ノ内 | 同上 本山北町 | 山麓 145 | 弥・後期 | 土器 | 16 |
| 16 | 坂下山 | 同上 本山町森坂下 | 尾根端 80 | 弥・3～4 | 土器，石器 | 17 |
| 17 | 甲南回生病院前 | 同上 森北町 | 扇状地上端 25 | 弥・中～後期 | 土器，石器 | 18 |
| 18 | 稲荷神社 | 同上 森北町 | | | 散布地 | 19 |
| 19 | 森 | 同上 森北町 | | | 銅鐸 | 20 |
| 20 | 三条岡山 | 芦屋市 三条町 | 50～60 | 弥・後期 | 土器 | 21 |
| 21 | 西良手 | 同上 三条南町 | | 弥・3 | 太型蛤刃磨製石斧 | 22 |
| 22 | 芦屋廃寺跡 | 同上 西山町 | | 弥・後期 | 土器 | 23 |
| 23 | 三条丸山 | 同上 三条町 | | 弥・3 | 土器 | 24 |

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 立地・標高(m) | 時期 | 遺物・遺構 | 註番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 会下山 | 同上三条町 | 山頂尾根 80 | 弥・3～5 | 土器，石器，鉄器，住居址，祭祀址，土壙墓 | 25 |
| 25 | 森奥 | 神戸市東灘区 | 同上 260 | 弥・後期 | 土器 | 26 |
| 26 | 蛙岩 | 同上東灘区 | 同上 300 | 弥・後期 | 土器 | 27 |
| 27 | 城山 | 芦屋市芦屋町城山 | 同上 280 | 弥・中～後期 | 土器，柱穴址 | 28 |
| 28 | 城山南麓 | 同上芦屋町城山 | 城山南斜面一帯 | 弥・3～4 | 土器 | 29 |
| 29 | 山芦屋 | 同上山芦屋町 | | 弥・3～5 | 土器，石斧，石匕，石鏃 | 30 |
| 30 | 藤ケ谷 | 同上東芦屋町 | | | 土器，石鏃，磨製敲石，サヌカイト | 31 |
| 31 | 東芦屋 | 同上東芦屋町 | | | 散布地 | 32 |
| 32 | 朝日ケ丘 | 同上朝日ケ丘町 | | 縄・前期 | 爪形文土器，石鏃 | 33 |
| 33 | 岩平 | 同上岩園町 | 丘陵上 60～100 | | 土器，土錘，石鏃，フリント，サヌカイト | 34 |
| 34 | 岸造り | 同上大原町 | 扇状地上端 17 | 弥・中期 | 土器，石鏃 | 35 |
| 35 | 笠塚 | 同上山手町 | 山麓 105 | | 土器，石鏃 | 36 |

## 第2節　周辺の遺跡

（第1図，第1表）

さて，本遺跡周辺には，緩急変化に富んだ区域に比して，弥生時代を中心に多くの遺跡が分布する（第1図，第1表）。ただ，海抜10m以下の所で弥生時代の遺跡が発見されたことは珍しく，今後の調査に一つの視点をあたえるものであろう。

周辺の遺跡のうち，その状況が発掘調査などにより明確なものを2，3紹介してみる。

会下山遺跡（第1図24）

芦屋市三条町会下山の，標高約200mの狭い山頂尾根部にある高地性集落で，芦屋市教育委員会の発掘調査により，住居址，祭祀址，ソトクド址，物置址，倉庫址，柵址などの遺構が検出された。また遺物には，土器，石器，鉄器，青銅器，ガラス小玉などが多量に出土した。特に土器は，第Ⅲ様式から第Ⅴ様式にかけての豊富な器種があり，鉄器は出土例の少ない鉄ノミ，ヤリガンナ，キサゲ，鉄鏃，釣針，鉄斧などが出土している。また青銅器では，漢式三角鏃（長さ4.4cm）がみられる。

保久良神社遺跡（同12）

神戸市東灘区本山中町大字北畑の標高180m，保久良神社境内に位置し，樋口清之氏の報告によれば，『突瘤山頂に磐境がある』とされ，畿内第Ⅲ，Ⅳ様式の土器群と共に

銅戈が出土している。

金鳥山遺跡(同11)

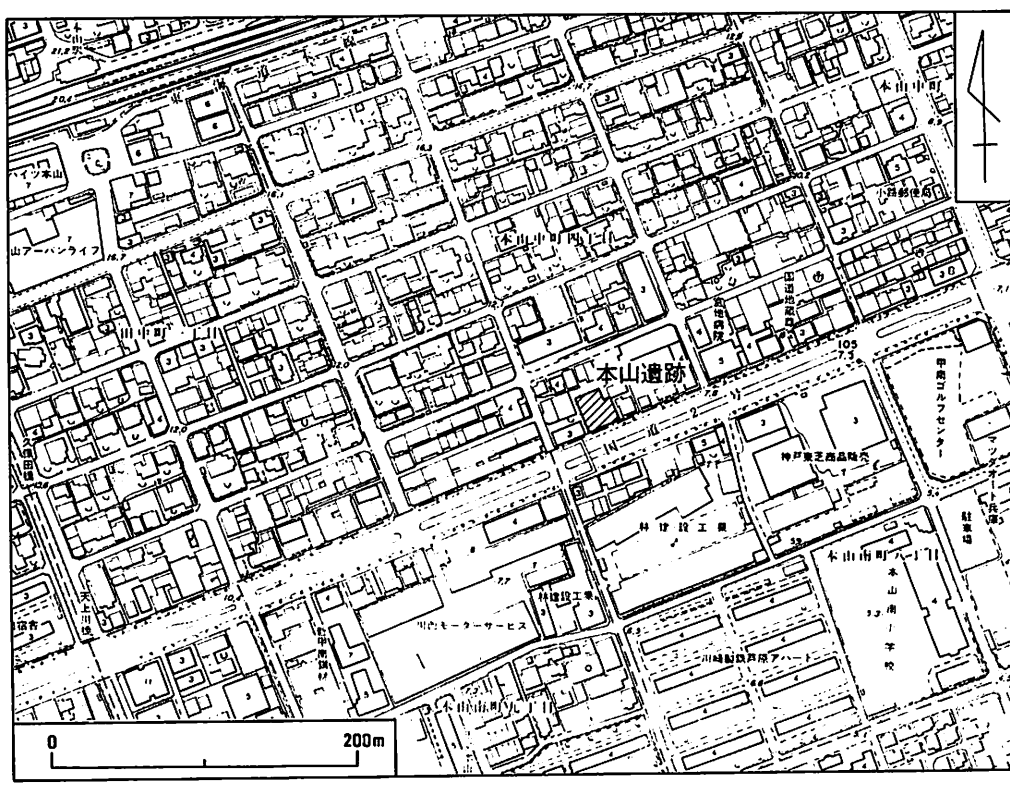
保久良神社遺跡の後背地で，標高200mの山腹に位置し，一帯に畿内第Ⅳ様式の土器が散布し，一部では，半堅穴状平坦面が検出されている。

# 第2章　発掘調査の経過

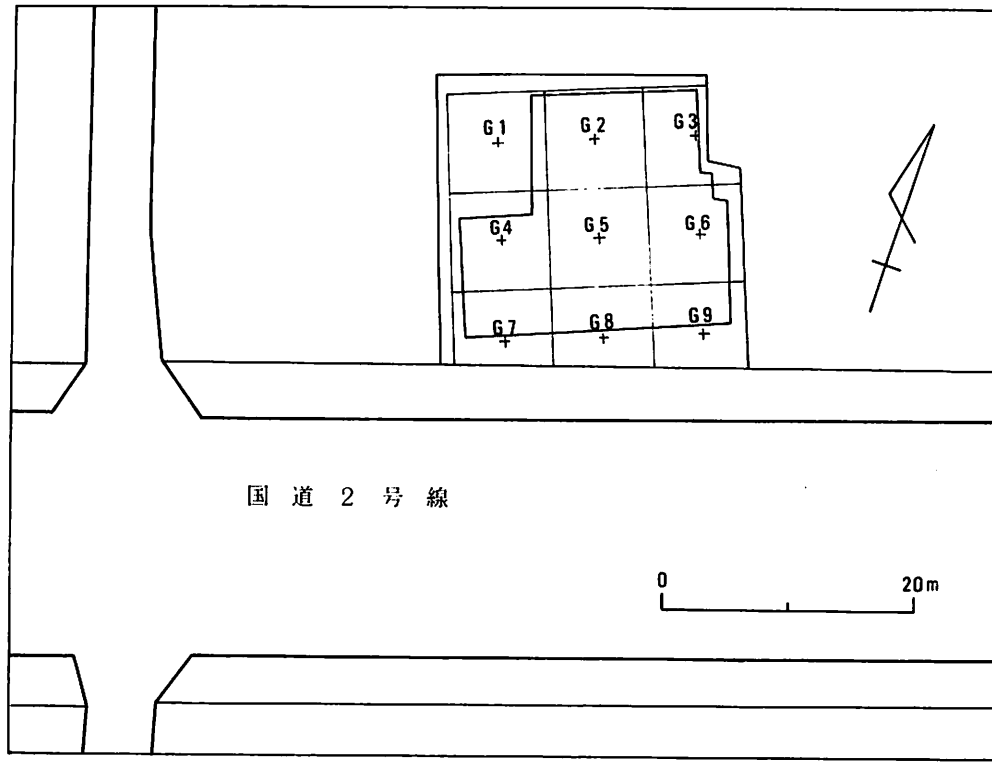
## 第1節　発掘調査の経過(第2・3図)

調査地は東西24m，南北23mを測り，その南側は国道2号線に面している。そして，その歩道面の高さは海抜8m(O.P.)であるのに対して，調査地北側の地表面は約9mを測り，南へゆるやかに傾斜している。

発掘調査は，建物取り壊し作業の関係から，調査範囲(マンション建築範囲)を前半区(G2a・b区，G3区，G6区，G9区)と後半区に分けて行った。グリッドは8m四方を基本とし，さらに1グリッドの中をa～dの4m四方の小区に分けた(第3図)。なお，調査面積は約380㎡である。




第2図　遺跡周辺地形図




第3図　グリット配置図（グリッドの南北ラインは，真北に対して約15°西へ傾いている。）

10月6日より前半区の調査に入る。まず，神戸市教育委員会の試掘調査の結果を参考に，盛土および床土を機械掘りによって除去した。この段階で，包含層が市教委№2トレンチ附近（G6c・G9a区），およびG1区，G2a・b区に認められたが，その他の部分では近世の瓦だめや建物基礎によって撹乱を受けており，包含層は検出できなかった。また，G1・2区の包含層は，試掘(№2トレンチ)で検出された溝状遺構と状況が近似しており，同様の溝状遺構の存在が明らかになった。

前半区の調査終了後，11月3日より後半区の調査に入る。前半区と同様に，盛土・庄土は機械掘りによって除去したが，建物の基礎や削平によって，黒色土(第1層)はほとんど撹乱を受けており，下層の黒色砂質土より手掘りを始めた。この黒色砂質土上面では，中世の土壙，井戸が検出された。

また，G1・2区およびG6・9区で検出されていた溝状遺構は，調査の結果同一のものとわかり，弥生時代前・中期を中心とする遺物を含む自然流路と判断された。さらに，流路内埋土の堆積状況や当時の環境復元を試みるために，神戸市立教育研究所の前田保夫先生によって花粉分析・珪藻分析等の調査を行った。そして，12月12日神戸市教育委員会の終了確認を受け，同14日すべての調査を終了した。

## 第2節　層　　序（第4図）

本遺跡の層序は，おおむね以下のとおりにわけられる。

表土層……盛土・床土

第1層……黒色土　中世を主とする遺物包含層

第2層……黒色砂質土　自然流路埋土最上層

第3層……黒色粘質土　自然流路埋土

3a・3b・3c・3d……小礫の多少で分けられるが，明瞭な違いは認められない。

3e……明黒灰色粘質土

第4層……砂層・黒色砂混り粘質土　自然流路埋土最下層

第5層……赤・黄色礫を含む黒色土　自然流路の基盤

第6層……灰褐色・灰色砂礫層　地山層

表土層下の第1層は，おもに中世の遺物を多少含むが，下層では弥生時代の土器細片も出土している。そして，第2層上面では中世の遺構が検出されている。また，第5層は，第1層および第3層に似る黒色土であるが，赤～黄色の風化礫を多量に含んでおり，自然流路の肩を形成している。遺物はまったく出土していない。

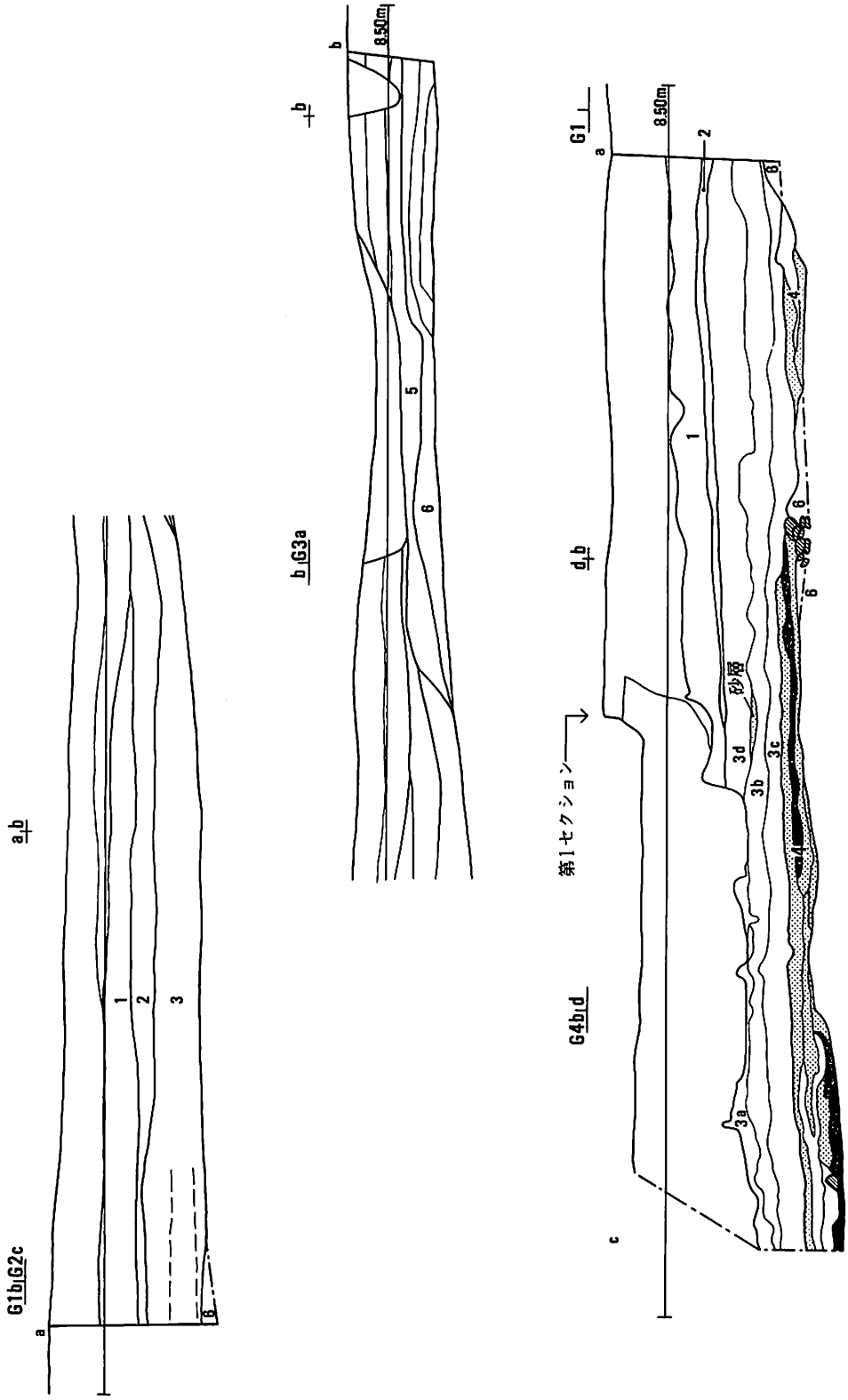
なお，自然流路埋土は第2・3・4層であるが，詳細は第4節で記すことにする。

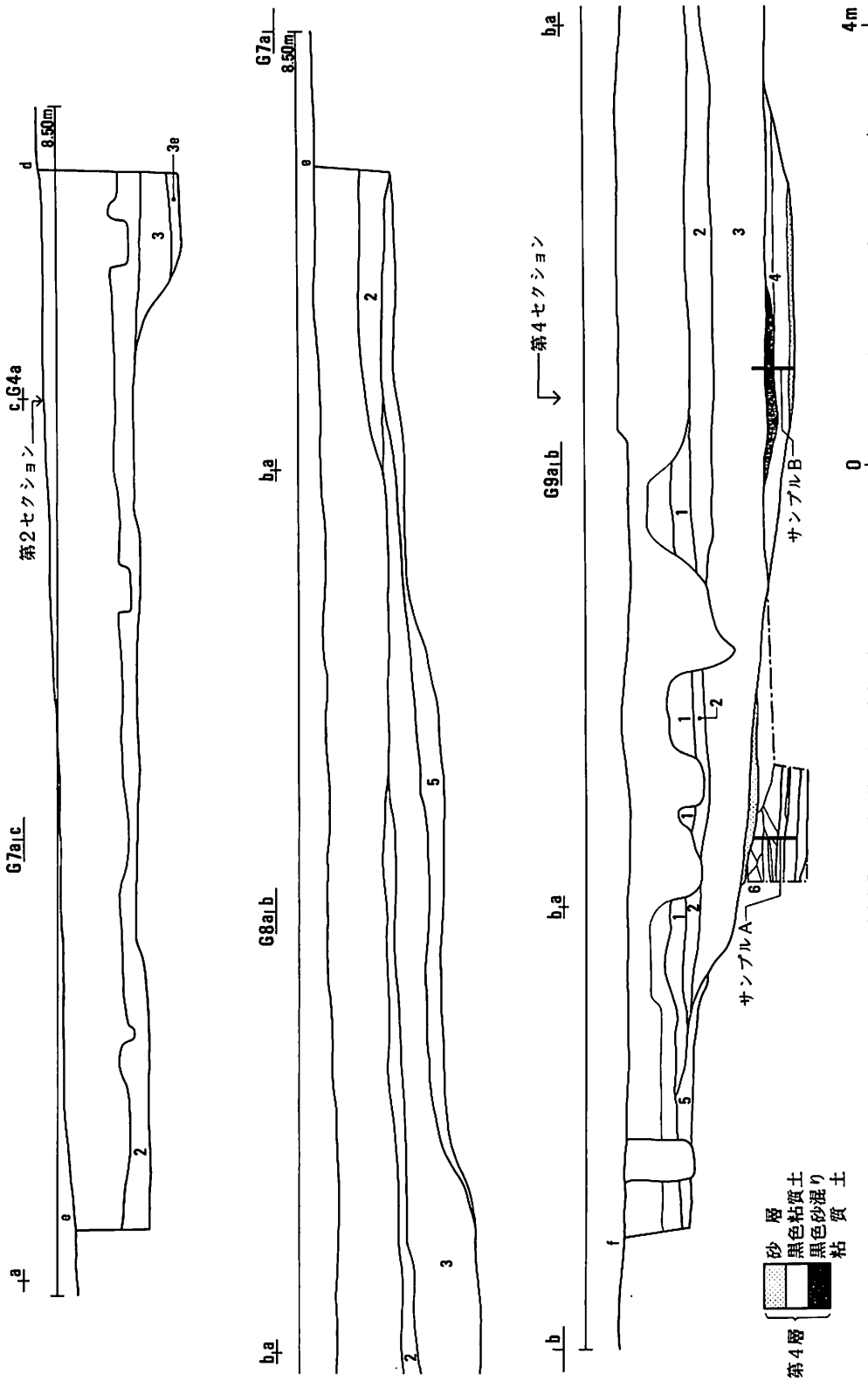
## 第3節　中世井戸・土壙1（第5～7図，図版第2・3上）

### 3－1　中世井戸

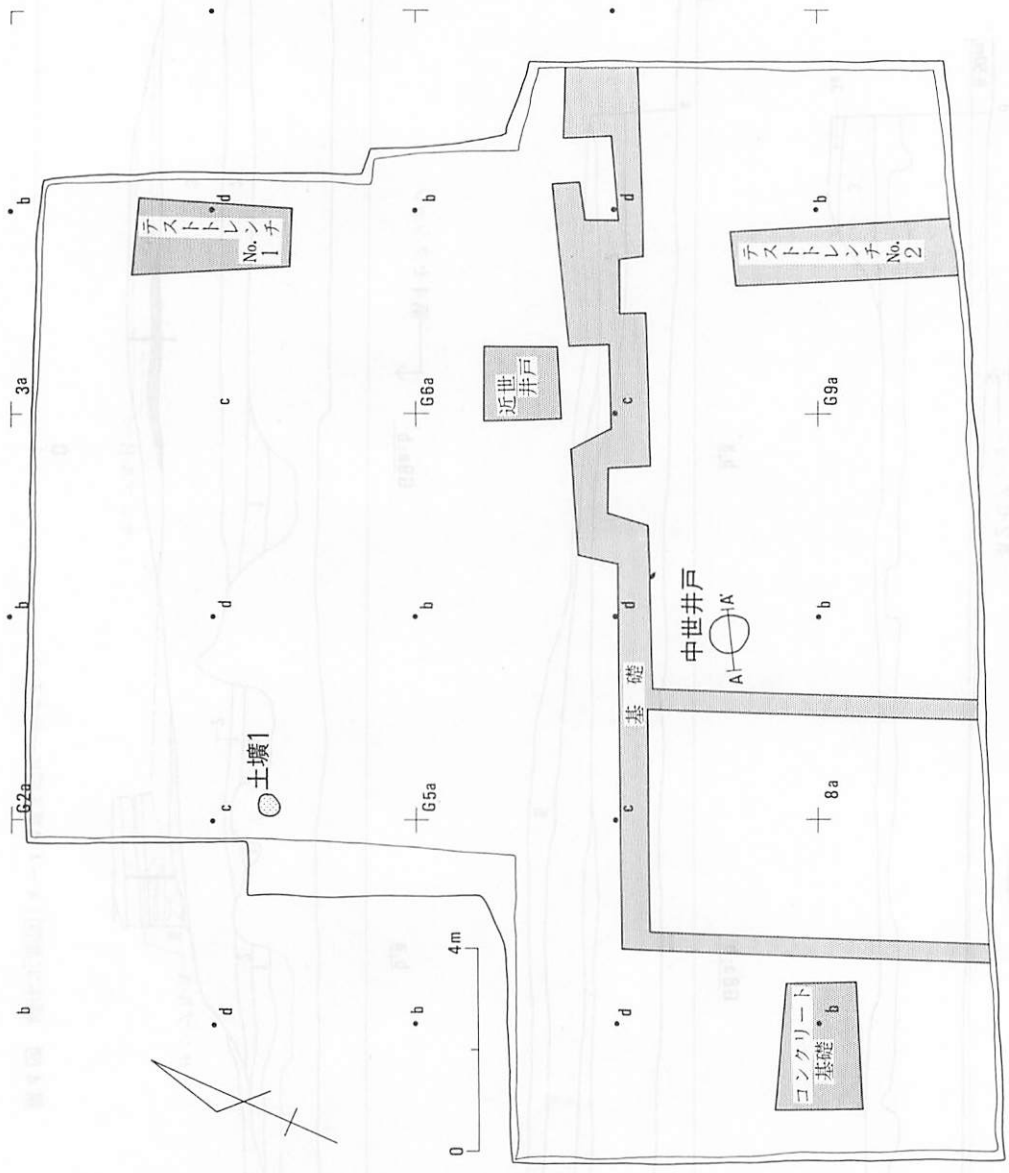
**1）遺　　構**

これは，G5C区黒色砂質土上面で検出された曲物井戸である。検出面の掘り方は，ほぼ円形を呈し，径約70cmを測る。底部は，黒色粘質土を掘り込み，深さは約33cmである。井筒に用いられている曲物は，上下2段が現存するが，上段の曲物は，径約55cmを測り，高さは後世の削平のため約10cmほどしか残存していない。下段の曲物は，径約45cm，高さは約25cmである。内面には，曲げやすくするための刃物目が幅0.5～1cmで縦，斜方向でほぼ全面に施されている。下段の曲物と掘り方の間には灰黒色粘質土があり，また，上段の曲物の内外には，径10～15cmの礫が置かれている。さらに，この付近は砂が顕著に認められた。以上のことから，構造的には，一般的な曲物井戸と全く変わらない[37]。しかし，底部が黒色粘質土でとまっており，下からの湧水は考えられない。また，下段周囲は灰黒色粘質土であるため，同様である。ただ上段の周囲に砂が認められたことは，比較的水を通しやすい，黒色砂質土よりの水を目的としていたのであろう。そして，上段の内外の石は曲物の安定を計るためとともに，水の浄化の作用をももっていたものと思われる[38]。


a
b
G1bG2c
a b
1
2
3
6
b
b
8.50m
b G3a
5
6
G1
a
8.50m
2
6
1
4
d b
6
6
砂層
第1セクション
3d
3c
3b
4
G4bd
3a
c




第４図　層序実測図（ａ～ｆは第８図に一致する。）

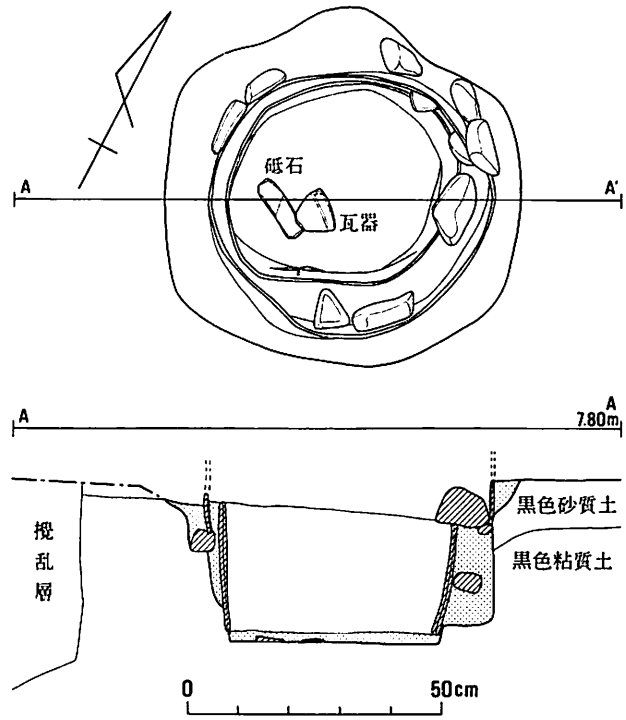



第5図　黒色砂質土上面遺構実測図

2）遺　物

井戸からは，土師皿，瓦器，ねり鉢などのほか，砥石（第7図21），土錘（20），梅などの種

子が出土した。第7図1は，小形の土師皿である。口縁部外面はヨコナデ，下半は未調整。内面はナデで整えている。9，11～13は瓦器埦である。9，11，12は高さ3～4cmでやや浅く，13は高さ5cm以上を測る。底部は断面三角形の高台をはりつけるが，調整は雑でかなりみだれている。また11の内面には，横方向の粗いへらナデの跡が残る。12は，井戸底部で検出された。14世紀に入るものであろう。15は，ねり鉢である。口縁内側と外側のナデによって端部が上方に尖がり気味になっている。焼成は良好。播磨地方の製作であろう。17・18は瓦質の土釜口縁部と底部である。




第6図　中世井戸実測図

これらの遺物から，この井戸は14世紀初めに埋没したものと思われる。

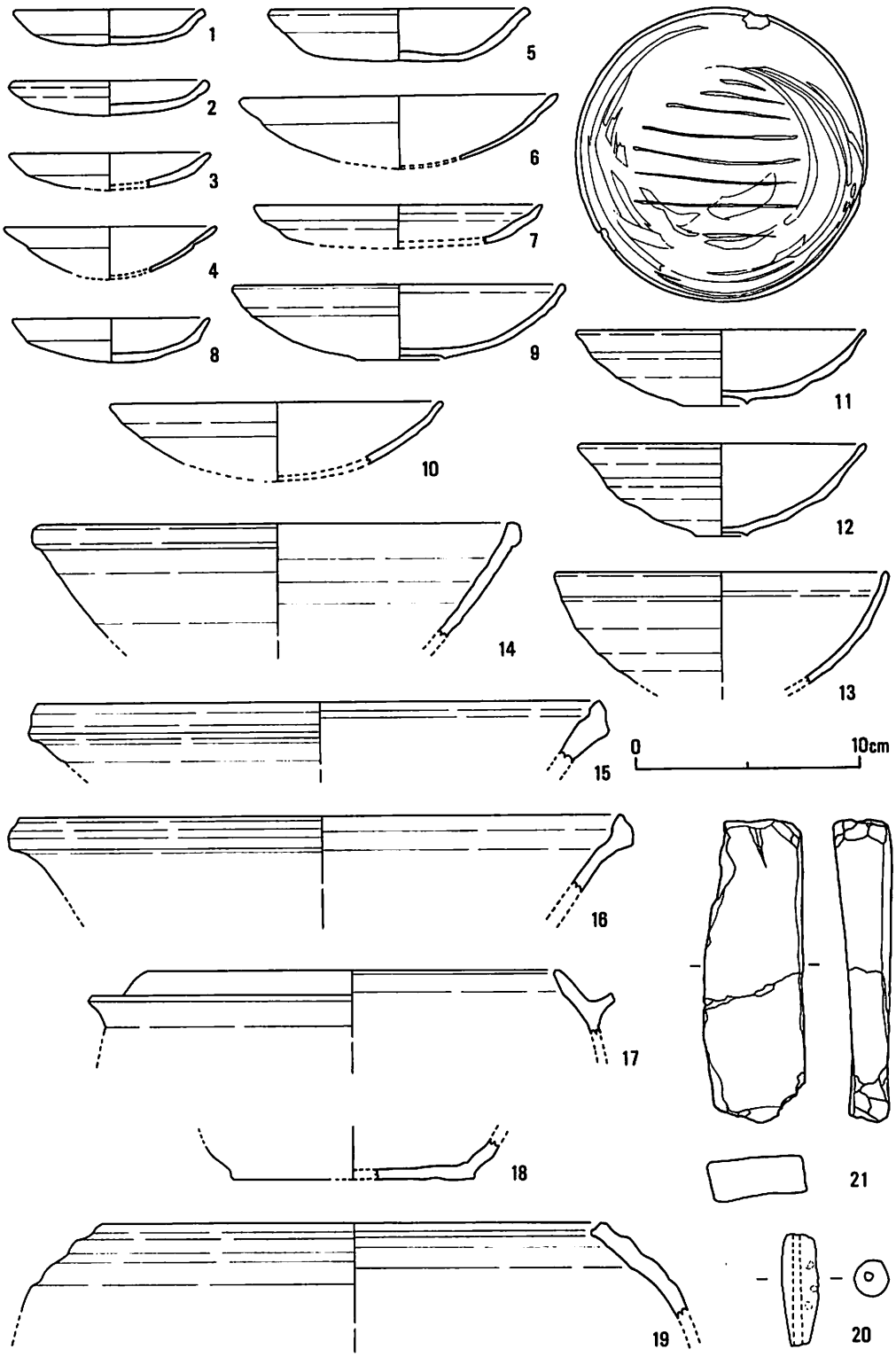
### 3－2　土　壙　1

#### 1）遺　　構

この土壙はG1d区に位置し，溝第1セクション調査時に検出された。遺構は黒色砂質土を掘り込んでいる。直径は約40cm，深さは約30cmを測る。

#### 2）遺　　物

土壙1からは，土師皿，瓦器埦，ねり鉢，瓦質土器などが出土した。土師皿には，第7図2～4の小形のものと，5～7の中形のものとがある。どちらも，口縁部外面に強いヨコナデを施すため，口縁部は斜め上方に反ったような形状を呈する。8，10は瓦器である。8は皿状を呈しており，調整は小形土師器と同じである。14，16はねり鉢である。14は口縁部内面のヨコナデが明瞭である。どちらも播磨地方の産であろう。19は瓦質の鉢であろうか，かなり口縁部が内傾する。外面のヨコナデが明瞭に残る。この他に，土釜などが出土している。これらの遺物よりこの土壙の時期は，井戸とほぼ同様の時期と考える。




第7図　中世井戸・土壙1出土遺物実測図

## 第4節　自然流路・不明土壙

（第8～10図，図版第3下～7）

### 4－1　自然流路

**1）遺　構**

調査地中央部にほぼ南北方向で位置する。もっとも広いところで幅約8mを測り，地山層，第5層を肩にしている。横断面をみると，肩の傾斜はゆるやかで，底部において幅1～1.2mの小溝が認められる。この部分には砂層の堆積が顕著であり，水が比較的よく流れていたものと思われる。流路は，調査地中央部あたりまではほぼ南下しているが，北側で西へ方向が変わっているようである(第4図a－cセクション図参照)。また，中央部から南は，やや方向を東へ転ずるようになり，調査地南側ではほぼ東南方向を指している。おそらくこのまま国道2号線を横切って南下していくものであろう[39]。また，調査地西側(G4a区)からは，東へ向かって別の流路が位置しているようだ(第4図d－eセクション3e)。流路上端の高さは，北側で約7m70cm，南側では約7m50cm。底部は，北側で約7m20cm，南側で約6m60cmを測る。

**2）埋　土**

この流路には約90cmの埋土があり，前述のようにいくつかに分層が可能であった。

埋土最上層は，黒色砂質土(第2層)で，流路内に厚さ10～20cmでほぼ一様にみられる。そして，ここからは弥生時代中期の土器が出土している。この下層は黒色粘質土(第3層)で，もっとも厚く堆積している。

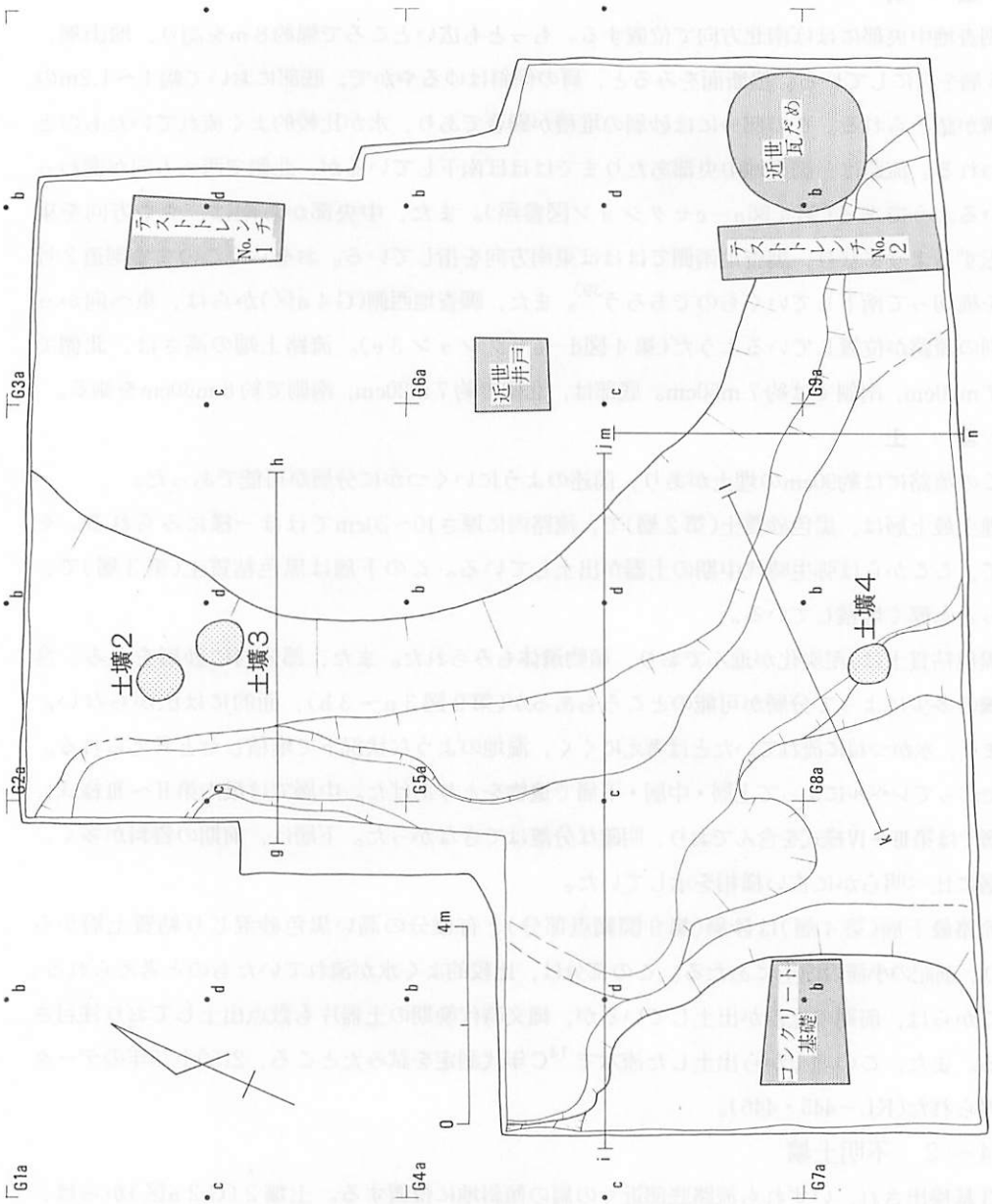
黒色粘質土は，泥炭化が進んでおり，植物遺体もみられた。また，部分的に砂層を含み，含有礫の多少によって分層が可能のところもあるが(第9図3a～3h)，面的には広がらない。つまり，水がつねに流れていたとは考えにくく，湿地のような状況下で堆積したと考えられる。したがってレベルによって上層・中層・下層で遺物をとりあげた。中層では畿内第Ⅱ～Ⅲ様式，上層では第Ⅲ～Ⅳ様式を含んでおり，明確な分離はできなかった。下層は，前期の資料が多く，上層に比べ明らかに古い様相を示していた。

流路最下層(第4層)は砂層(第9図網点部分)と有機分の高い黒色砂混じり粘質土層からなり，前記の小溝の埋土にあたる。この部分は，比較的よく水が流れていたものと考えられる。ここからは，前期の土器が出土しているが，縄文時代晩期の土器片も数点出土しており注目される。また，この埋土から出土した流木で$^{14}$C年代測定を試みたところ，2150±75年のデータが得られた(KL－445・446)。

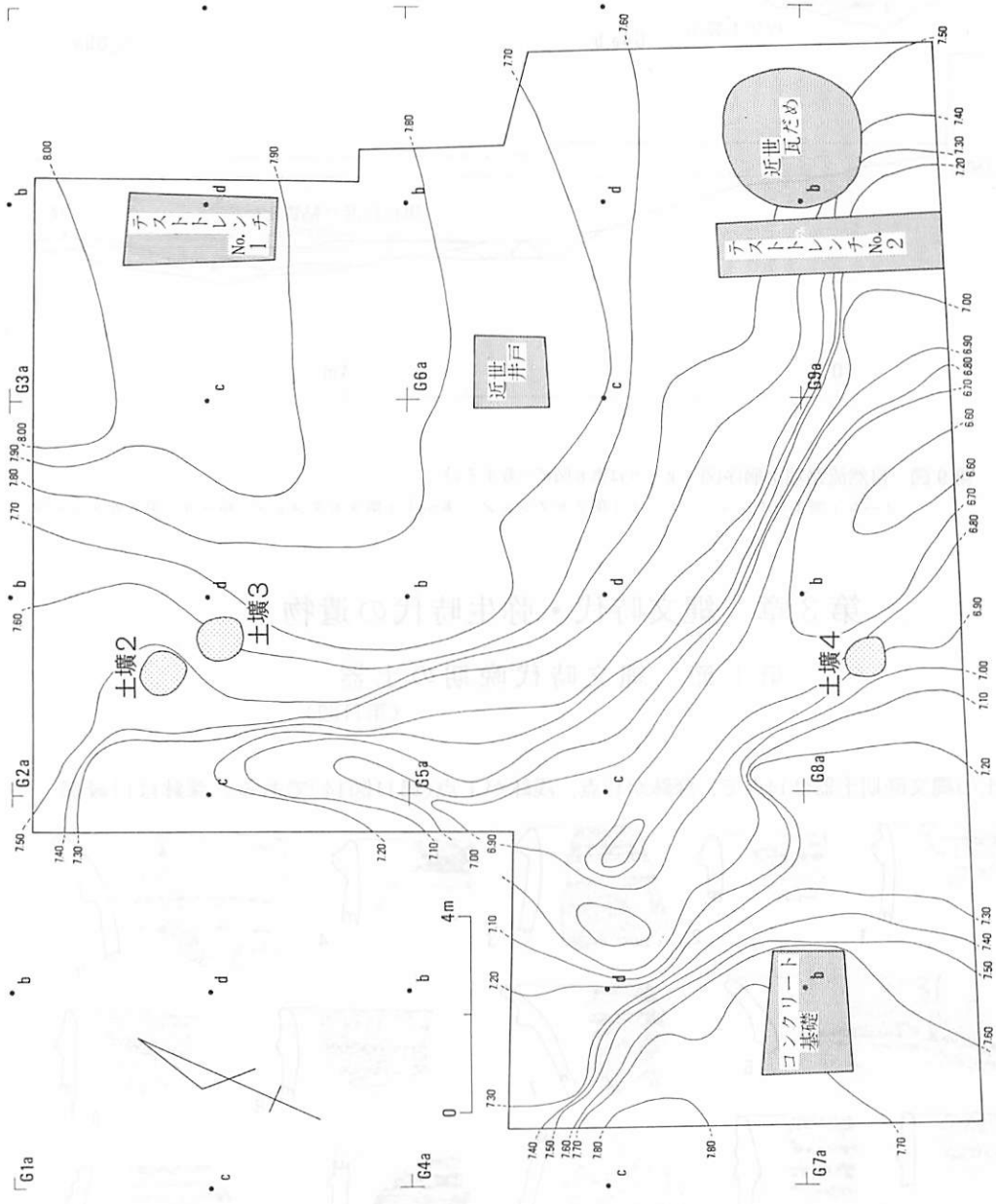
### 4－2　不明土壙

3基検出され，いずれも流路底部近くの肩の傾斜地に位置する。土壙2(G2a区)からは，長さ10～15cm位の円礫・角礫が出土したが，土壙3(G2c区)，土壙4(G7a区)を含めて，遺物はまったく出土しなかった。ただ，土壙4からは少量の炭化物を採取した。いずれも平面円形を呈し，直径は約100cm，深さは20cm前後を測る。埋土は黒色粘質土で，層位的，位

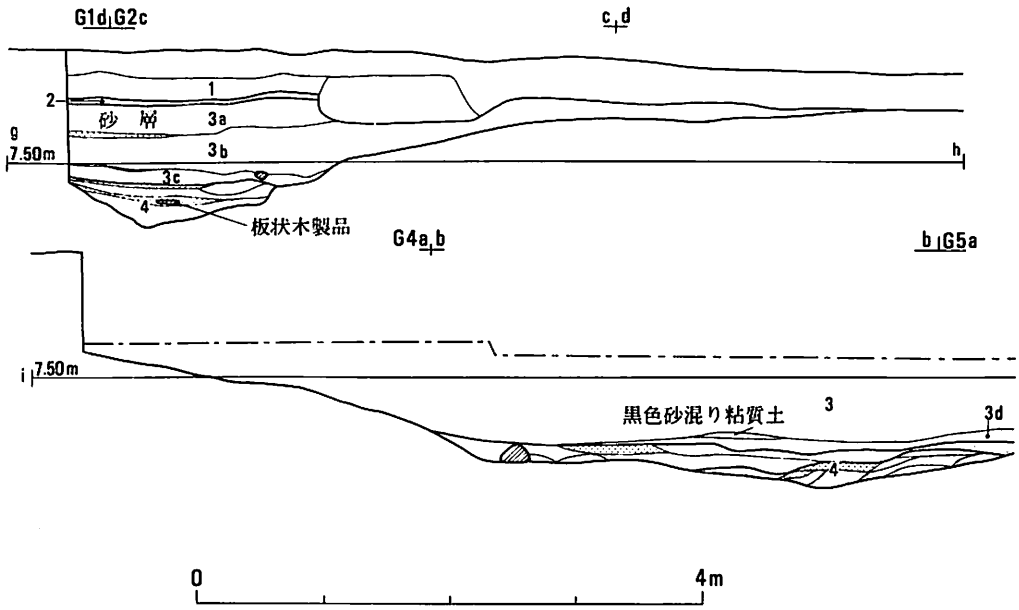
置的判断から，流路底部の小溝と黒色粘質土堆積の間の時期に位置するものと考えられる。




第8図　自然流路・不明土壙実測図（a～fは第4図，g～nは第9図に一致する。）




第10図　調査終了面地形実測図(等高線はｍを示す。)



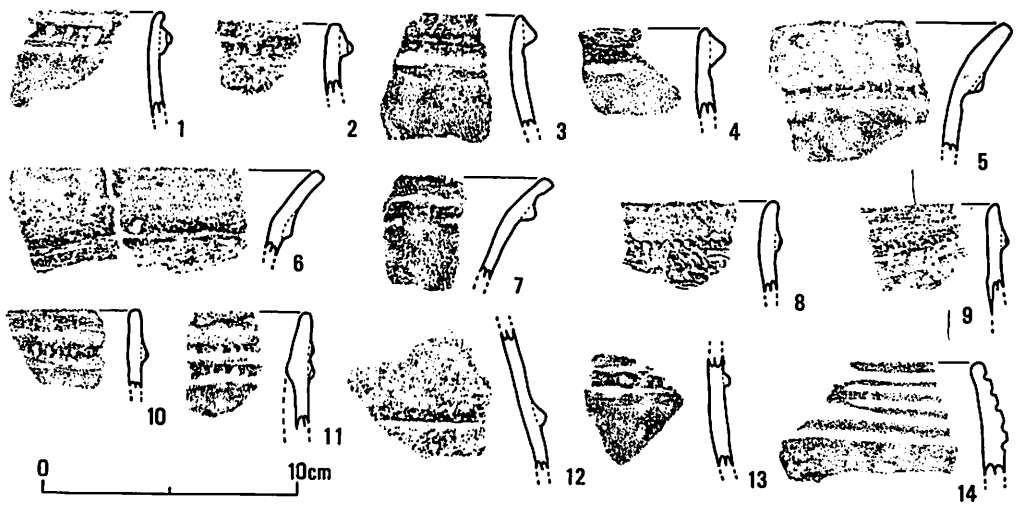

第9図　自然流路埋土層序図（g～nは第8図に一致する。）
g—h：第1セクション　i—j：第2セクション　k—l：第3セクション　m—n：第4セクション

# 第3章　縄文時代・弥生時代の遺物

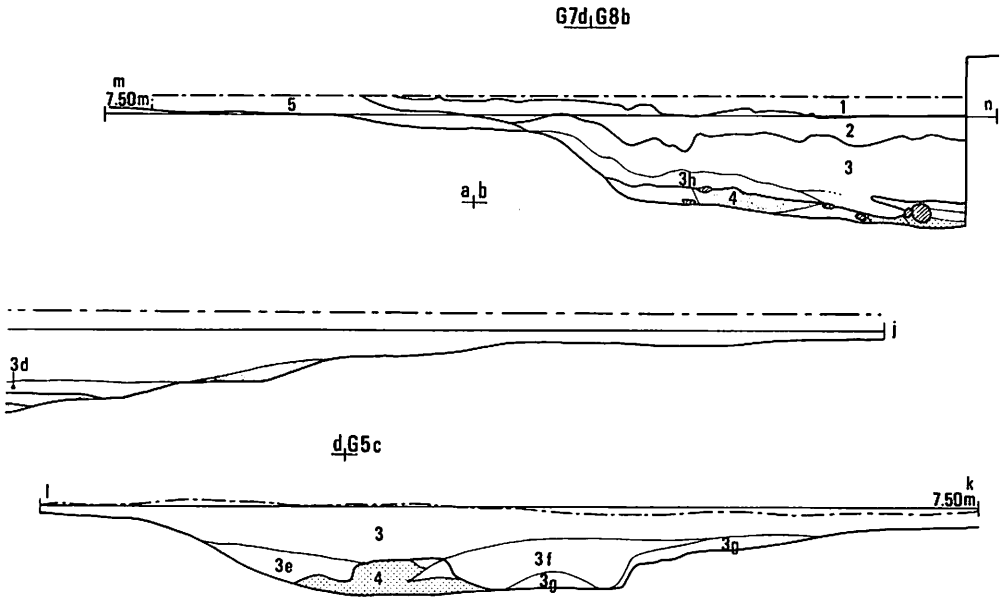
## 第1節　縄文時代晩期の土器

（第11図）

出土の縄文晩期土器は14点で，深鉢が13点，浅鉢が1点（第11図14）である。深鉢は口縁部




第11図　縄文時代晩期の土器実測図




片が11点で，肩部片が2点である。口縁部片には全て凸帯が付され，胴部片もわずかの出土数であるが，凸帯を有しているところをみると，この晩期土器は2条凸帯より成っていたものと推量できる。

深鉢は口縁の凸帯の位置と形状から3類に分けることができる。

1類は口縁部よりわずかに下ったところに(5mm程度)に高めの三角凸帯を貼付するものである(1)。口縁部はやや，外返気味で凸帯にはハート状の刻みが付されている。

2類は直立か僅かに外返する口縁の端部に接して，高めの三角形の凸帯を付するものである(2～4)。2には刻目があるが，ハート状に小さく入れられたものである。3・4には刻目はない。

3類は口縁部をやや下った位置(1～1.7cm)に低くて幅広の凸帯を付したものである(5～11)。凸帯は扁3角形で，頂点より上方に長く，下方に短い。刻目を付すもの(5，8～11)と無刻のものとがある(6，7)が刻目は浅くて，小さなものが多い。刻目の形態は多くはハート形であり(8～11)，5は唯一D字形をなすが，小形である点は全点に共通している。

口縁形態は大きく外返する例(5～7)と直立に近いものとがある(8～11)。

11は2条の凸帯よりなっている。

12・13は肩部片で，一条の凸帯が付されている。12は無刻で，13は不明。これらが，上述，1～3類のいずれに伴うかは判じ難い。

胎土は，各類を問うことなく，砂粒を多く含み，あらあらしい。表面の最終調整はナデによっ

ている。色調は淡褐色～黒褐色まで様々な色合いをなすが，茶褐色系統のものが多い。

1類は船橋式の特徴を示すもので，2類は長原式に相当するものである。3類もほぼそうした時期に考えてよかろう。

## 第2節　弥生時代の土器（第12～30図，第2～4表）

自然流路は，出土土器を最下層・下層・中層・上層・黒色砂質土層に分けて取り上げられた。最下層・下層は，前期の土器が主体をなし，中層以上は，中期の土器が主体をなす。但し上層と中層，中層と下層の土器が同一個体として接合されるなど，自然流路内での多少の混乱が認められた。本山遺跡においては，叩目文を基調にした後期の土器の出土をみない。

出土土器の器種には，壷形土器，甕形土器，鉢形土器，高杯形土器，蓋形土器，甑形土器があり，各層位とも，おおむね，壷形土器60%，甕形土器30%，鉢形土器9%の比率を占める。他の器種は極めて少量である。

以下，第Ⅰ様式から順に出土土器について触れることにする。しかし，第Ⅲ様式土器と第Ⅳ様式土器は，一括資料として取り出せえなかったため，第Ⅲ～Ⅳ様式土器として取り扱うことにする。

### 2－1　第Ⅰ様式(中)段階

壷形土器，甕形土器があり，文様は，削り出し突帯文を基調とする。

**広口壷A**

斜め上方に外反する口縁部，削り出し突帯第Ⅰ種，第Ⅱ種少条，多条を含む。

短く外反し，頸部に削り出し突帯第Ⅰ種をもつもの(第12図1)，短く外反し，頸部に削り出し突帯第Ⅱ種をもつもの(2～5，7，8，第13図3)，ゆるやかに外反し，口縁端部に一条のへら描沈線文をめぐらすもの(第13図5，6)，ゆるやかにひらく口縁部，口縁端部を丸く調整し，短い頸部に削り出し突帯第Ⅱ種少条をもつ生駒西麓産土器(1)がある。

体部では，球形の体部上腹部に削り出し突帯第Ⅱ種少条をもつもの(第12図6)，体部破片には，削り出し突帯第Ⅰ種，第Ⅱ種多条のもの(第14図1～3)がある。

**甕　A**

倒鐘形の体部で，如意形の口縁部。口縁端部に刻目，頸部にへら描沈線文を施すもの(第15図2，3，5，7，9，10)，口縁端部に刻目がなく，頸部にへら描沈線文を施すもの(1，4，6)がある。沈線文の条数は，少条(1～3条)である。

### 2－2　第Ⅰ様式(新)段階

壷形土器，甕形土器，鉢形土器がある。貼付突帯文が採用される。

**広口壷A**

斜上方に外反する口縁部，貼付突帯文は，1～3条で，突帯を貼付する前に沈線で下書きするもの(第14図15～20)が多い。また，貼付突帯文への刻目施文法には，布巻棒圧痕もある

(16, 19)。その他，大きく斜上方に広がる口縁部，長い頸部に8条のへら描沈線文をめぐらし，沈線文2～3条に対し，3条組の縦位の刻目を施すもの(第13図2)，大きく斜外方に広がる口縁部，短い頸部に5条のへら描沈線文をめぐらし，隔沈線文間に竹管文を施すもの(4)がある。

体部では，へら描沈線文6条を施した後，上端の沈線文より上側を，タテ方向の刷毛目やヨコ方向のへら削りによって，沈線文帯を浮び上らせ，突帯状にするもの(第14図4，5)，へら描沈線で流水文を描くもの(11, 12)，14条のへら描沈線文を施した後，それらに2条1組の縦位の刻目を千鳥配置に加えるもの(7)，その他，沈線文と三角刺突文(8)，沈線文と斜線文(10，第15図8)，斜線文と貼付突帯文(第14図9)，重弧文(13)，木葉文(14)を施すものもある。また，短く外反する口縁部，体部は扁球形の無文の小形壷形土器がある。調整は，タテ方向の細い刷毛目によっている(6)。

甕　A

倒鐘形の体部からゆるやかに外反する口縁部，口縁端部に刻目，頸部にへら描沈線文4条を施すもの(第16図3)。

甕　B

逆L字状口縁部，口縁部の成形手法には，立ち上ってきた頸部の上面又は側面に断面三角形の粘土紐をのせるもの(第16図1，2，4～6)がある。口縁端部には刻目，頸部にへら描沈線文1～7条を加える。播磨地方に多くの類例をみる。

甕　C

倒鐘形の体部で，ゆるやかに外反する口縁部，口縁端部に刻目，体部上半に刻目貼付突帯文を一条めぐらすもの(第16図7)。外面粗いタテ刷毛，口縁内外面ヨコナデ調整である。

甕　D

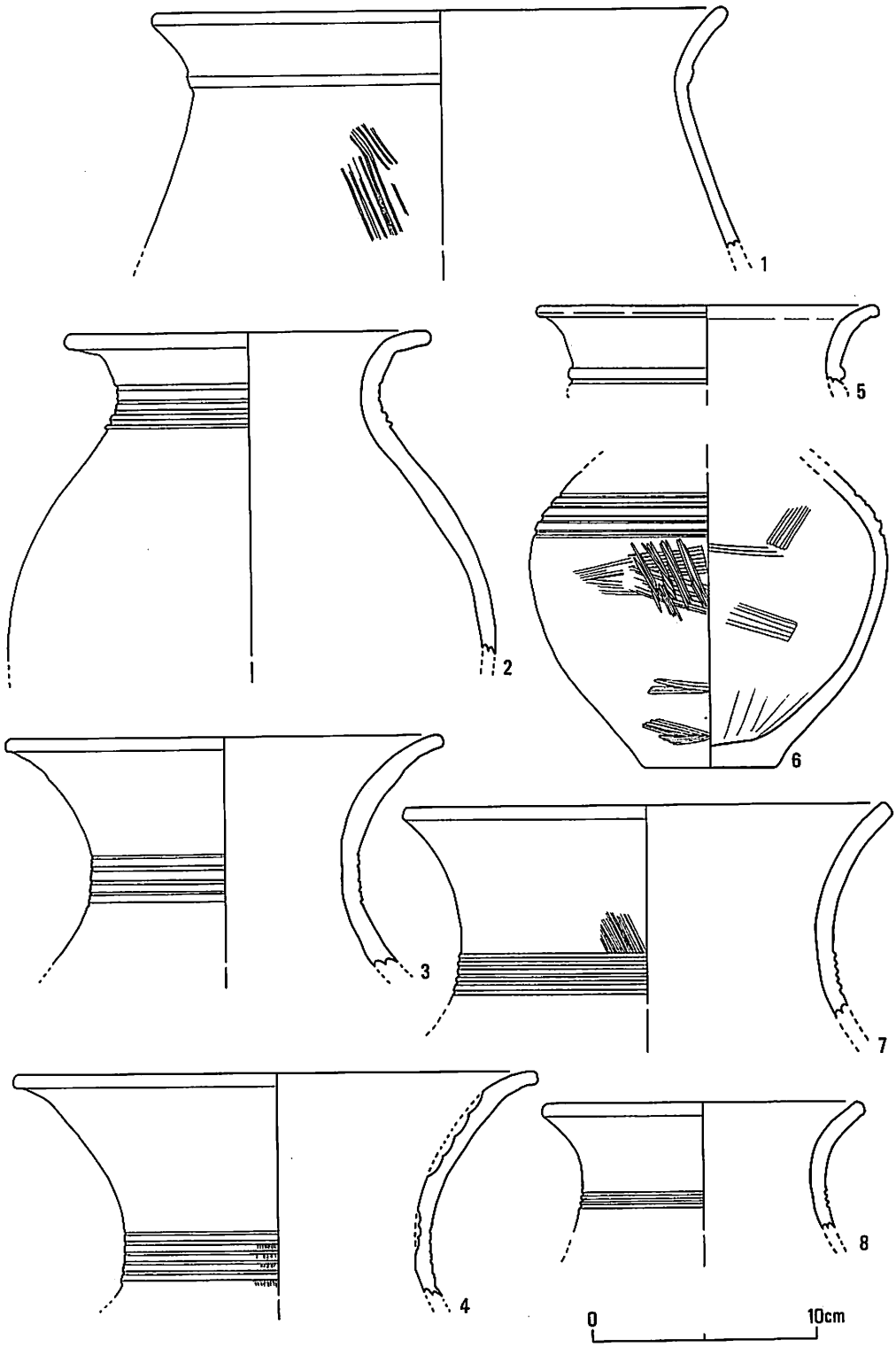
直口する口縁部，口縁端部に刻目，頸部に刻目貼付突帯文をめぐらし，へら描沈線文を施すもの(第17図2，3，5，6)。口縁部外面直下に2条のへら描沈線文を施し，頸部に刻目貼付突帯文をめぐらし，さらに，突帯文下に2本の粘土紐を垂下して貼付し，さらに斜線文状に2本の沈線を入れるもの(1)がある。

鉢　A

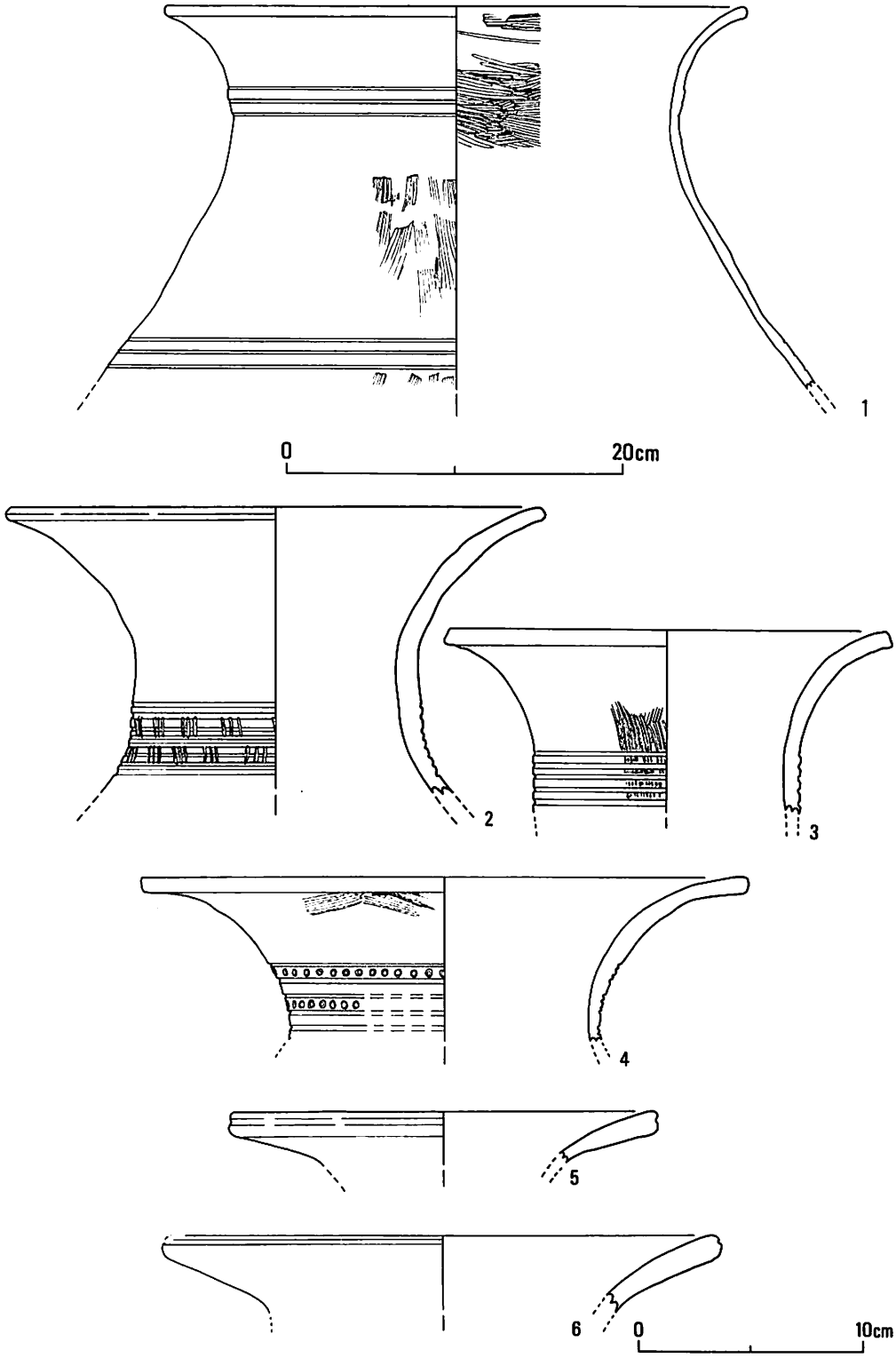
張りのない体部から短く屈曲する口縁部，口縁端部は丸く調整する。体部上半に扁平な横位の舌状把手を貼付することを基本にし，口縁端部に刻目を施すもの(第17図4，7)，把手上側にへら描沈線文2条をめぐらすもの(8)がある。

鉢　B

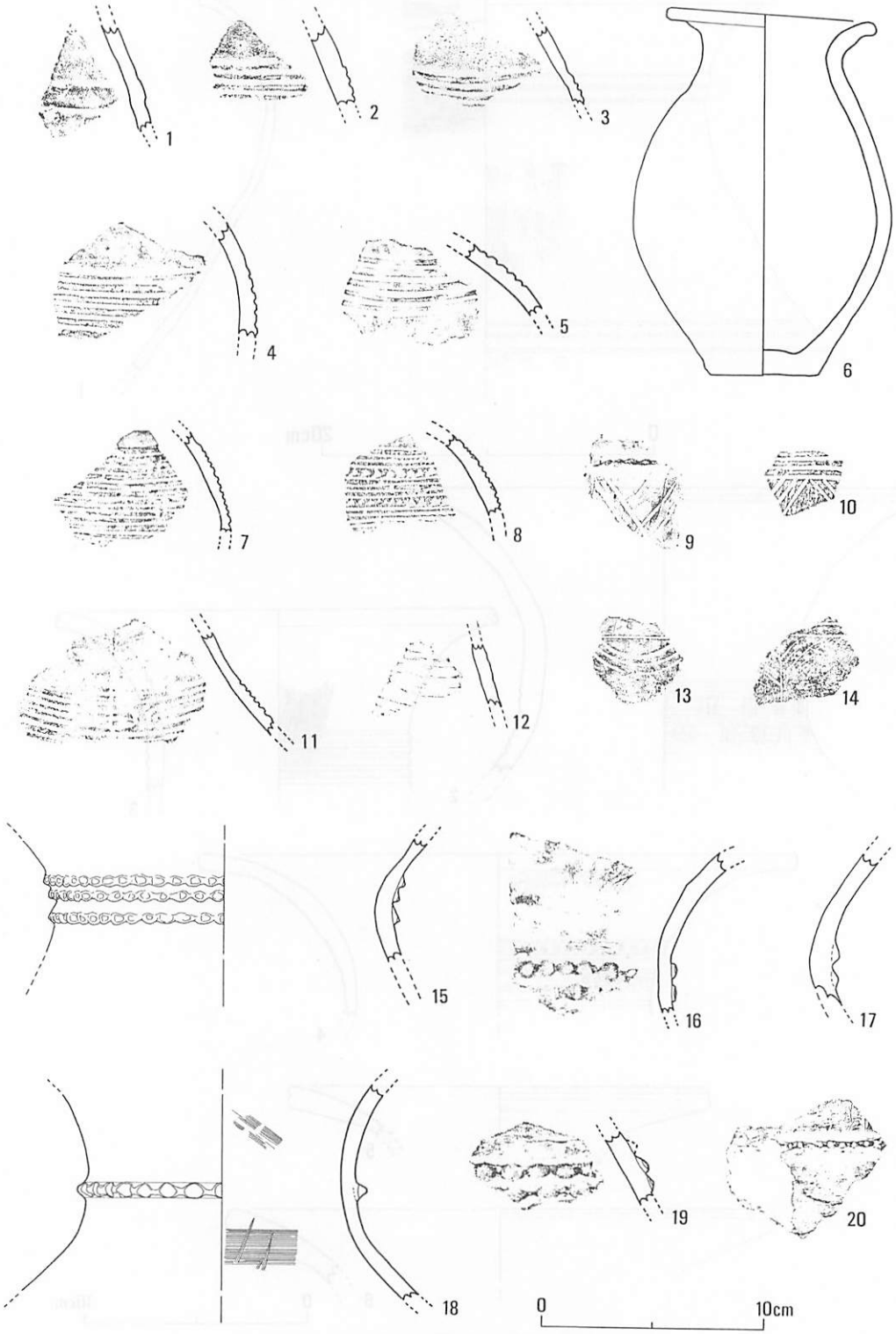
直口する口縁部，端部に1条のへら描沈線文をめぐらし，体部に4条以上のへら描沈線文を施すもの(第17図9)，体部上半に横位の舌状把手を貼付し，内外面とも丁寧なへら研磨をするもの(10)がある。



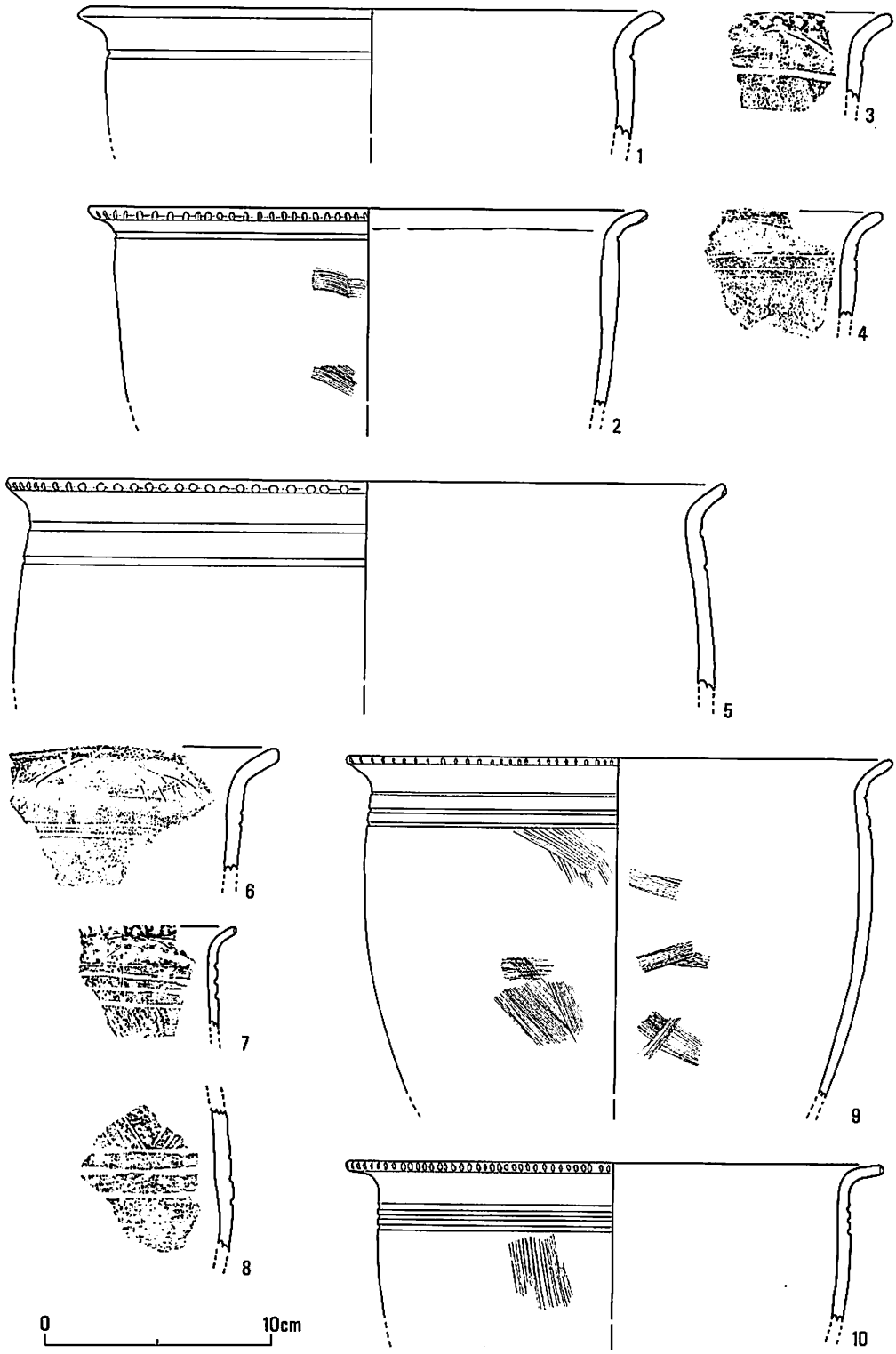

第12図　弥生時代第Ⅰ様式壺形土器実測図・1



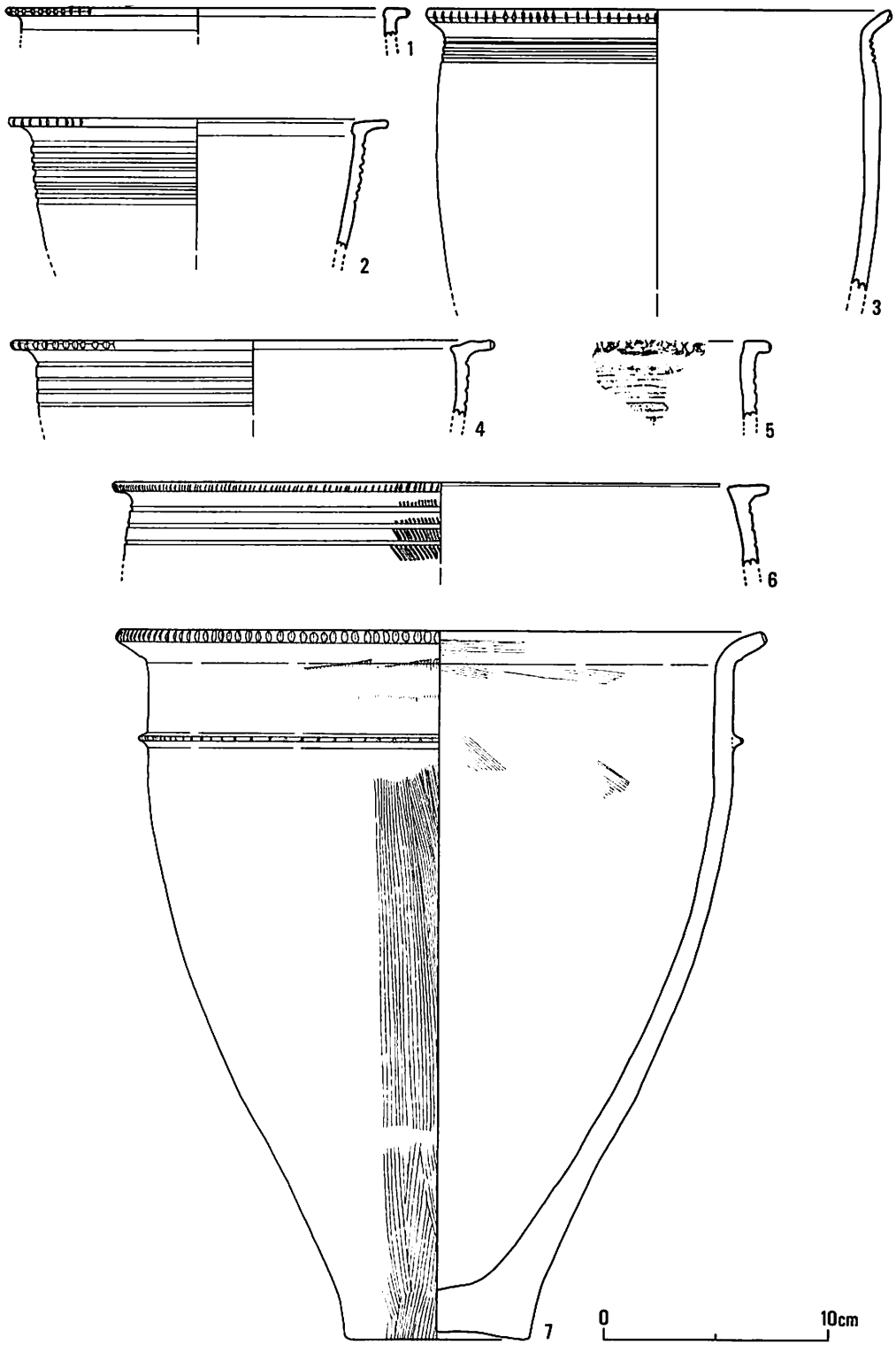

第13図　弥生時代第Ｉ様式壷形土器実測図・２



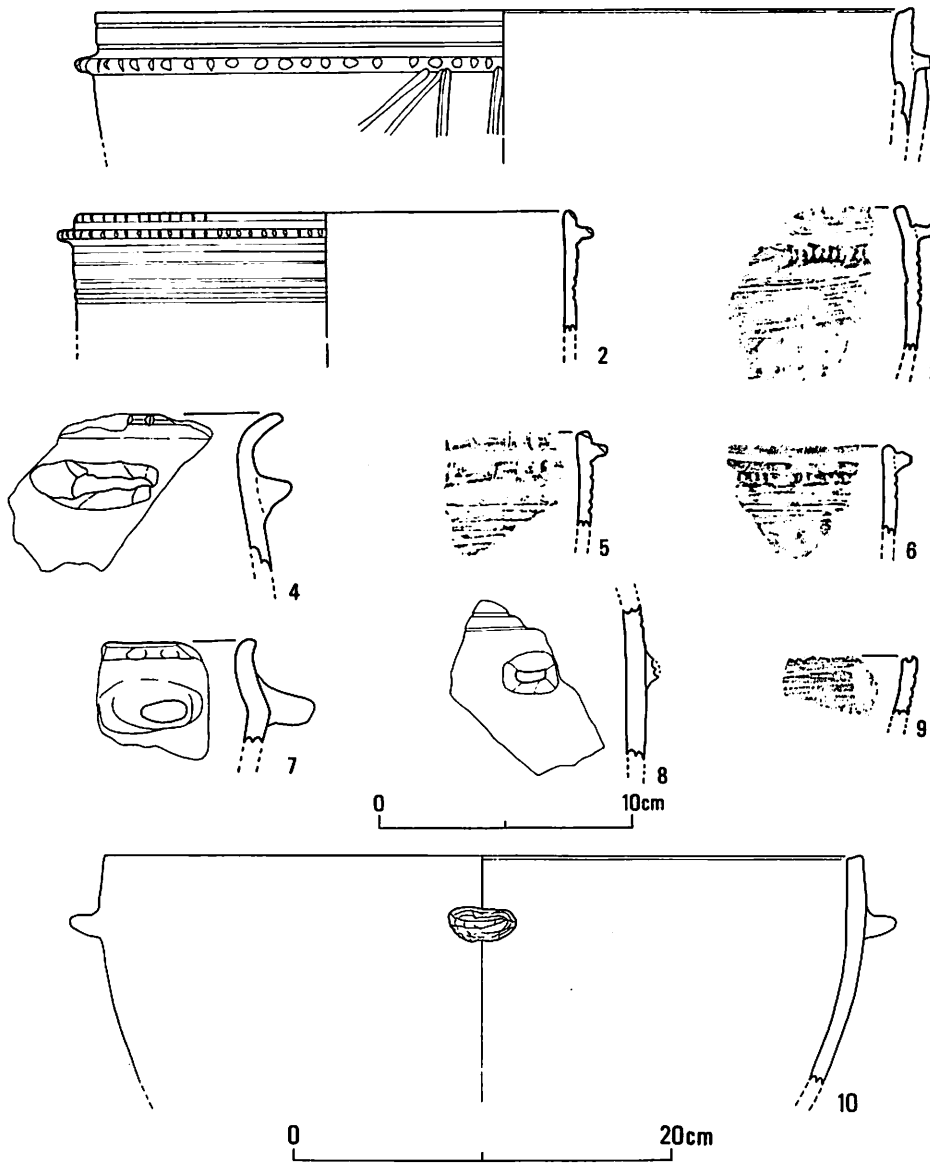

第14図　弥生時代第Ⅰ様式壺形土器実測図・3




第15図　弥生時代第Ｉ様式甕形土器実測図・１




第16図　弥生時代第Ⅰ様式甕形土器実測図・2




第17図　弥生時代第Ⅰ様式甕形土器実測図・３，鉢形土器実測図

**蓋形土器**

笠形を呈するもので，つまみ部は欠失するが，体部に木葉文を飾る（第30図１）。大略に施文法を説明しておく。まず，全体を十文字に四等分し，同心円文を２周めぐらす。ここに，内区，間区，外区の３区に，各４小区画，計12小区画が出来る。外区１小区画は，同心円文をさらに１周めぐらし，上下二層に分けられ，計８小区画が出来る。この１小区画は，縦位のへら描沈線文２条により三等分される。したがって，外区には，24小区画が完成される。間区１小区画も，さらに縦位のへら描沈線文で二等分され，８小区画になる。したがって，内区４小区

画と合わせ，全部で36小区画が出来上がる。各小区画内には，それぞれ無軸の木葉文が一葉ずつ描かれる。その他，2はつまみ部中央がやや凹み，外方に突出するもので，端部は丸く調整する。つまみ部には，木葉痕が残る。

### 2－3　第Ⅱ様式

壺形土器，甕形土器，鉢形土器，高杯形土器がある。櫛描文の出現をもって，第Ⅰ様式と区別される。施文は，平行直線文と波状文を主体にする。

**広口壺A**

ゆるやかに外反する口縁部，口縁端部は面をもつ。

端面が無文で，長い頸部に平行直線文を7帯施す生駒西麓産土器(第19図3)，端面に刻目，内面に平行直線文を施すもの(5)，端面に波状文を施し，頸部に千鳥配置の流水文を飾るもの(8)，端面に刻目と沈線，口縁内外面に貼付突帯をめぐらすもの(第20図5)がある。

**広口壺B**

ゆるやかに外反する口縁部，口縁端部は上下にやや拡張する。

端面下端に刻目を施すもの(第19図2，6，7)，端面上下端に刻目，中央に3条の沈線文をめぐらすもの(第20図4)がある。

**広口壺C**

ゆるやかに外反する口縁部，口縁端部は下方にやや拡張する。

端面上下端に刻目を施し，頸体部に平行直線文と波状文をめぐらすもの(第19図1)，端面下端に刻目を施すもの(4)がある。

**広口壺D**

ゆるやかに外反する口縁部，口縁端部を丸く調整する。

頸体部に平行直線文3帯を施すものがある。

その他，口縁部を欠失しているものの中には，頸部から体部にかけて，平行直線文と三角刺突文を飾るもの(第19図9)，平行直線文と波状文を施し，胴部が長胴で，肥厚な底部をもつもの(第18図1)と胴部が球体化するもの(第20図1，2)，平行直線文と扇形文を施すもの(第18図5)がある。体部では，平行直線文(第20図6)，平行直線文と竹管文(7)，波状文と竹管文(9)，平行直線文と刻目(10)，平行直線文と三角刺突文(11)，斜格子文(12)を施すものがある。

以上のような広口壺の施文法は，総じて，頸部と体部の明確な境界を設けることなく行われている。また，体部の器形は，球体化するものが目立つ。

**細頸壺**

体部から斜外方に真っすぐ立ち上がる口縁部，口縁端部は，平坦で，面上に平行直線文，外端部に刻目を施し，頸部に平行直線文をめぐらす(第18図4)。

**無頸壺**

張りをもつ体部から短く外反する口縁部をもつ。頸体部に平行直線文を施すもの(第18図

２），無文のもの（第20図３）があり，共に胴部は球体化している。

甕　A

倒鐘形の体部から，ゆるやかに外反する口縁部をもつ。

口径20～30cmの中型甕（第23図３，４，第24図１，２）が多く，20cm以下の小型甕（第23図２），30cm以上の大型甕（５）は少ない。調整は，不定方向の刷毛目によるものが多い。

甕　B

体径が口径をしのぎ，短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く調整する。内外面共不定方向の刷毛目調整による（第24図４）。

甕　C

西摂地方の土器である。３つのタイプがある。

①ゆるやかに外反する口縁部をもち，体部外面タテ方向，内面ヨコ方向の粗い刷毛目調整するもの（第22図３）。

②口縁部を巾広くヨコナデ調整し，タテ方向の刷毛目を消すもの（２）。

③口縁部をまきこみ，外面タテ方向に粗い刷毛目調整するもの（１，第23図１）。

甕　D

紀伊地方の土器である。

口径が体径をしのぐ張りの少ない体部にゆるやかに外反する口縁部，体部上半でなめらかな肩部をもつ。結晶片岩粒を含む。体部上半肩部上は，タテ方向の細い刷毛目，肩部下は，ヨコ方向のへら削り調整を行っている（第24図３）。

甕　E

播磨地方の土器である。体部に櫛描文を施する特徴を有する。

倒鐘形の体部から，ゆるやかに外反する口縁部をもつ。

口縁端部に刻目，体部に平行直線文を施すもの（第21図２，３，５），口縁端部に刻目，体部に平行直線文と波状文を施すもの（１），口縁端部に刻目がなく，体部に平行直線文を施すもの（４，６）がある。

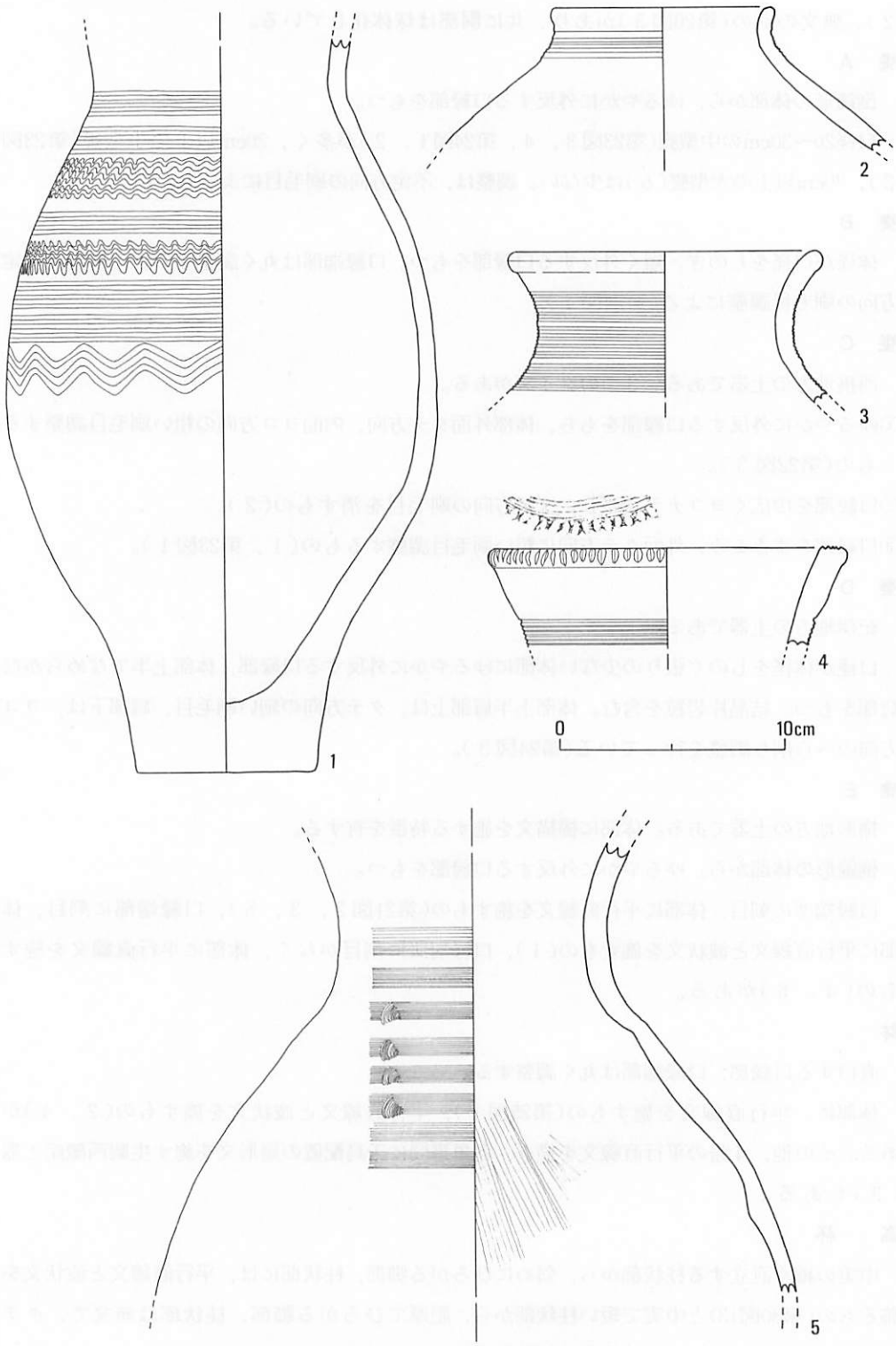
鉢

直口する口縁部，口縁端部は丸く調整する。

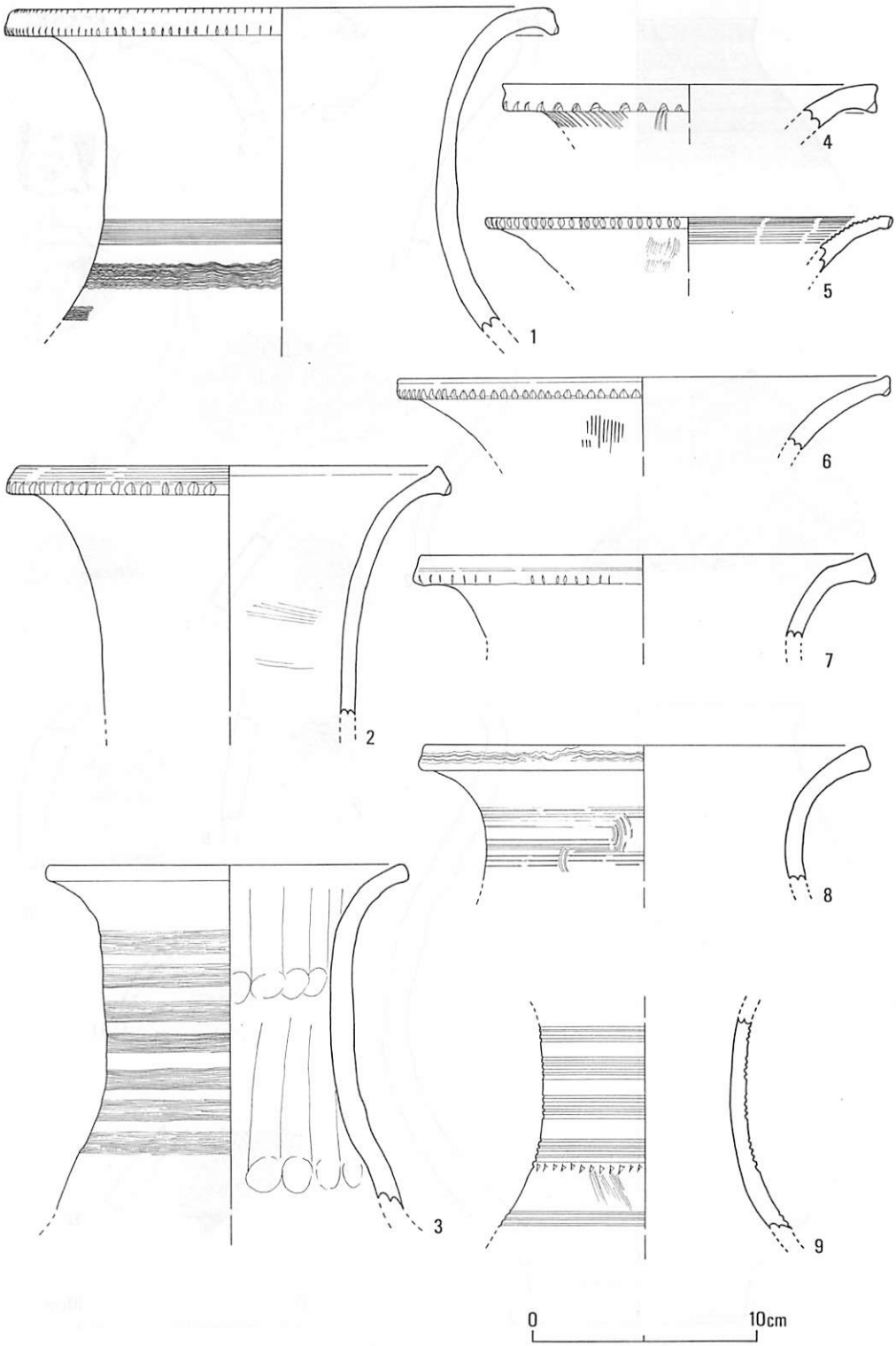
体部に，平行直線文を施すもの（第25図１），平行直線文と波状文を施すもの（２，４）がある。その他，４帯の平行直線文を描き，各単帯間に千鳥配置の扇形文を施す生駒西麓産土器（３）もある。

高　杯

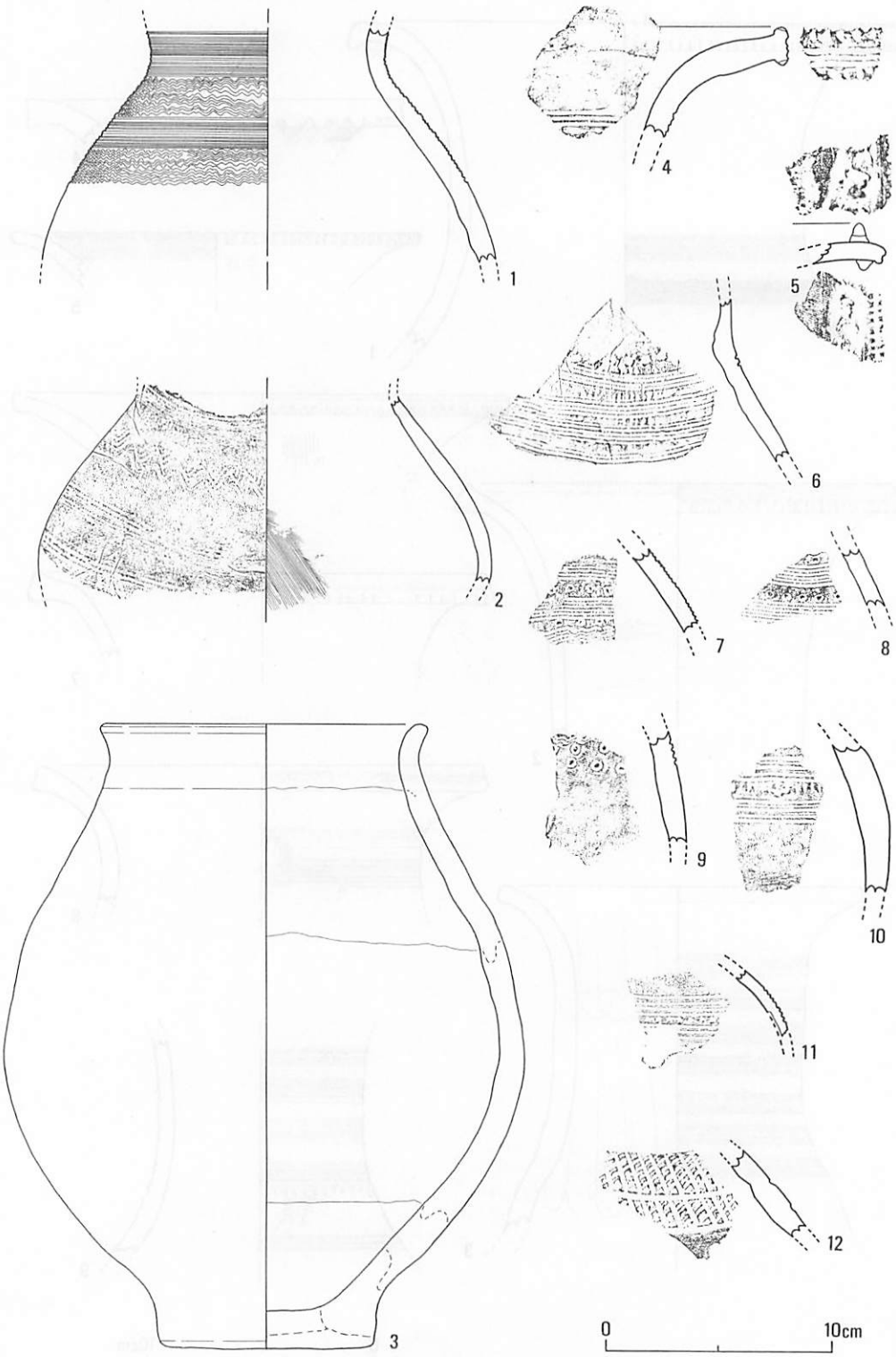
中実の細く直立する柱状部から，斜めにひろがる脚部，柱状部には，平行直線文と波状文を飾るもの（第30図13）と中実で短い柱状部から，肥厚でひろがる脚部，柱状部は無文で，タテ方向刷毛目調整の後，ナデ消すもの（16）がある。



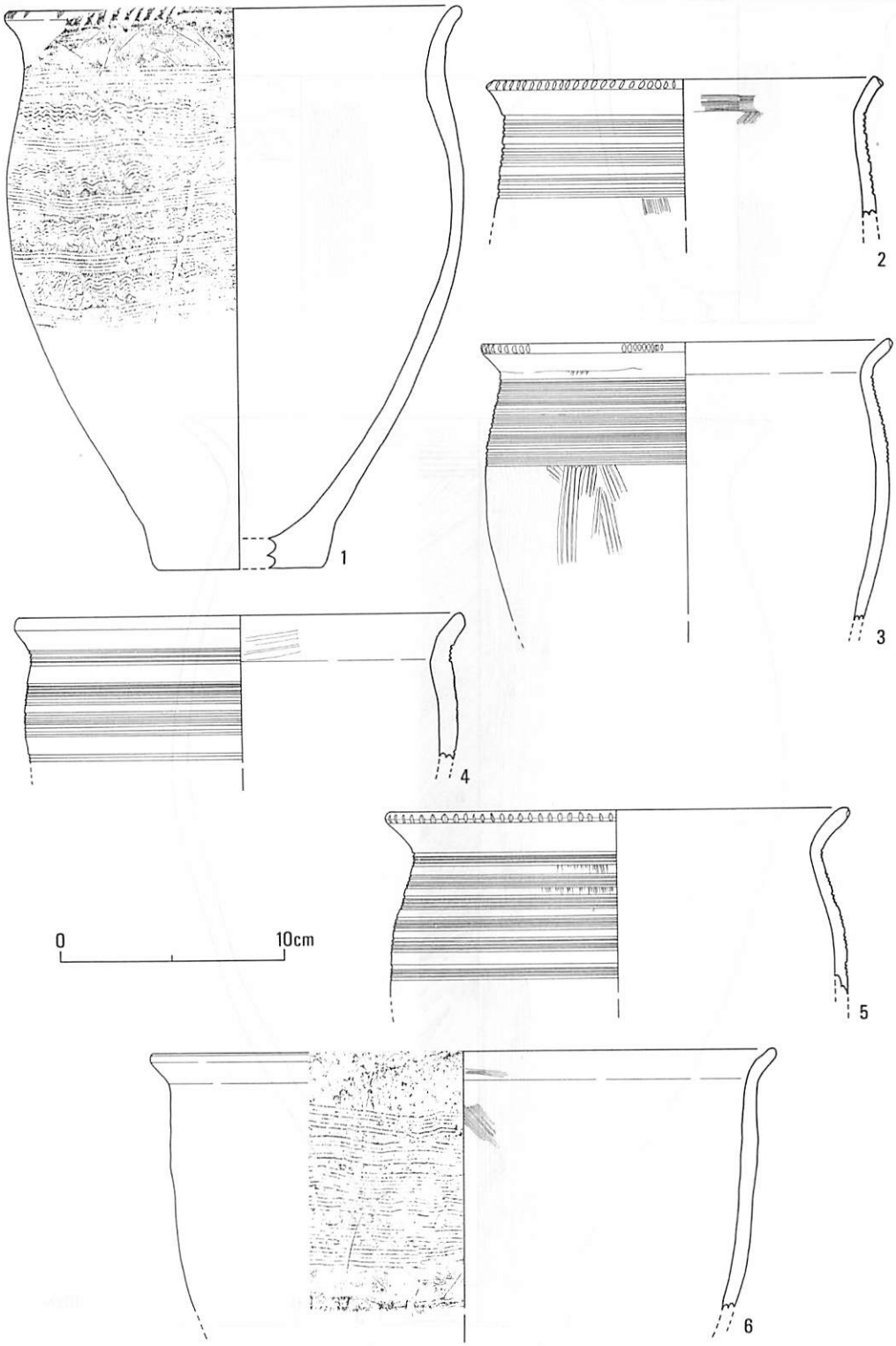

第18図　弥生時代第Ⅱ様式壺形土器実測図・1



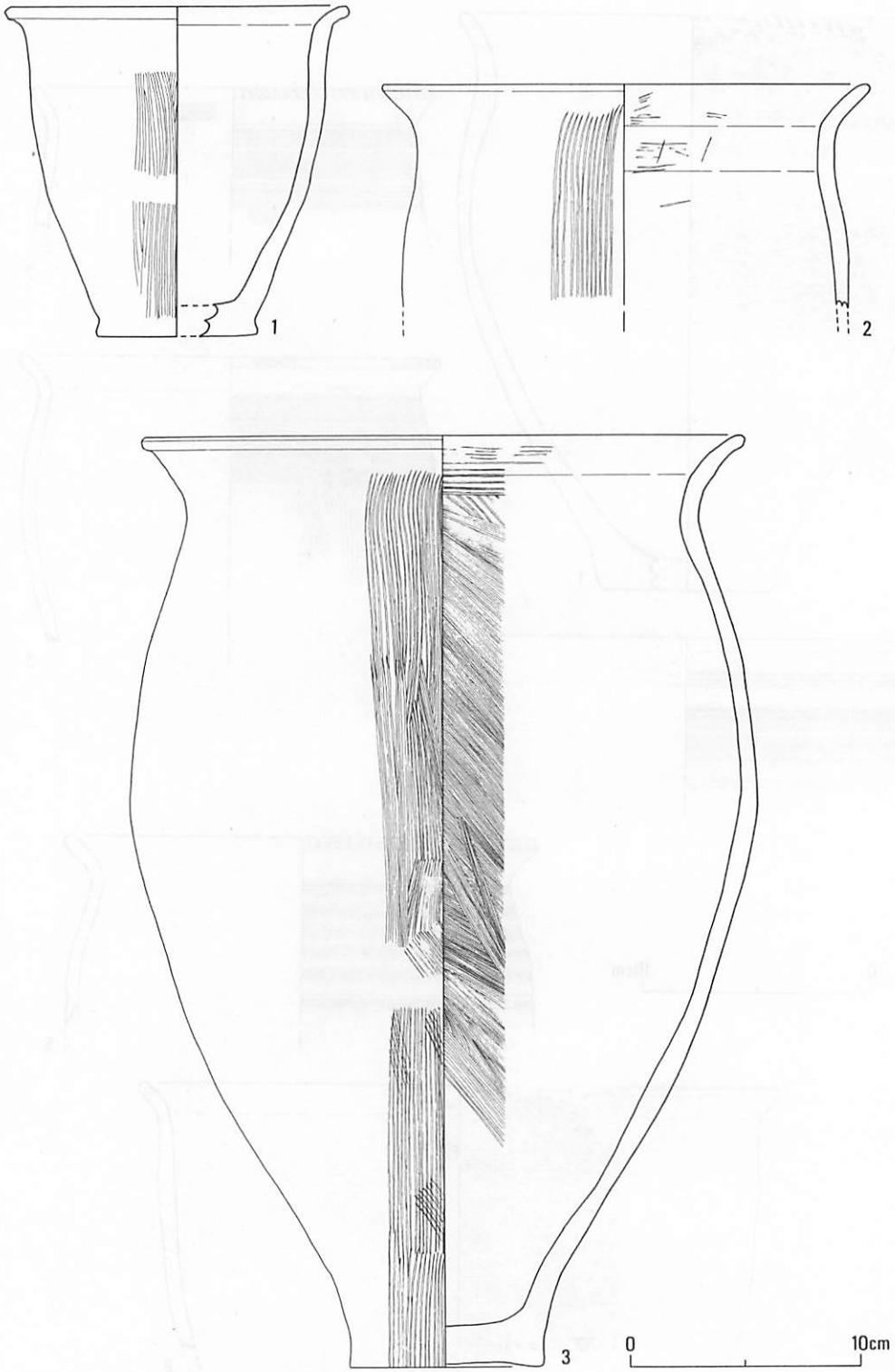

第19図　弥生時代第Ⅱ様式壺形土器実測図・２



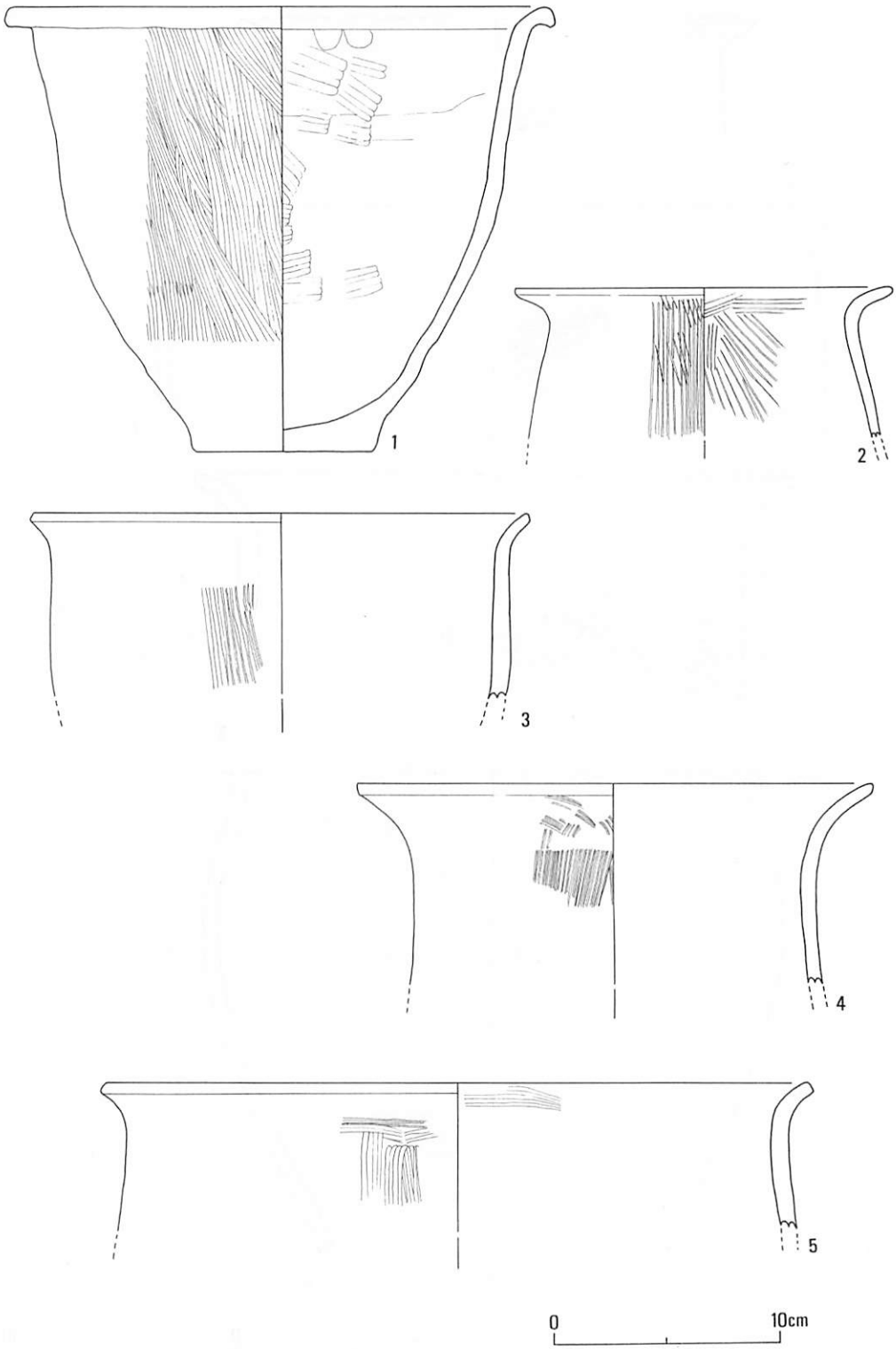

第20図　弥生時代第Ⅱ様式壺形土器実測図・３



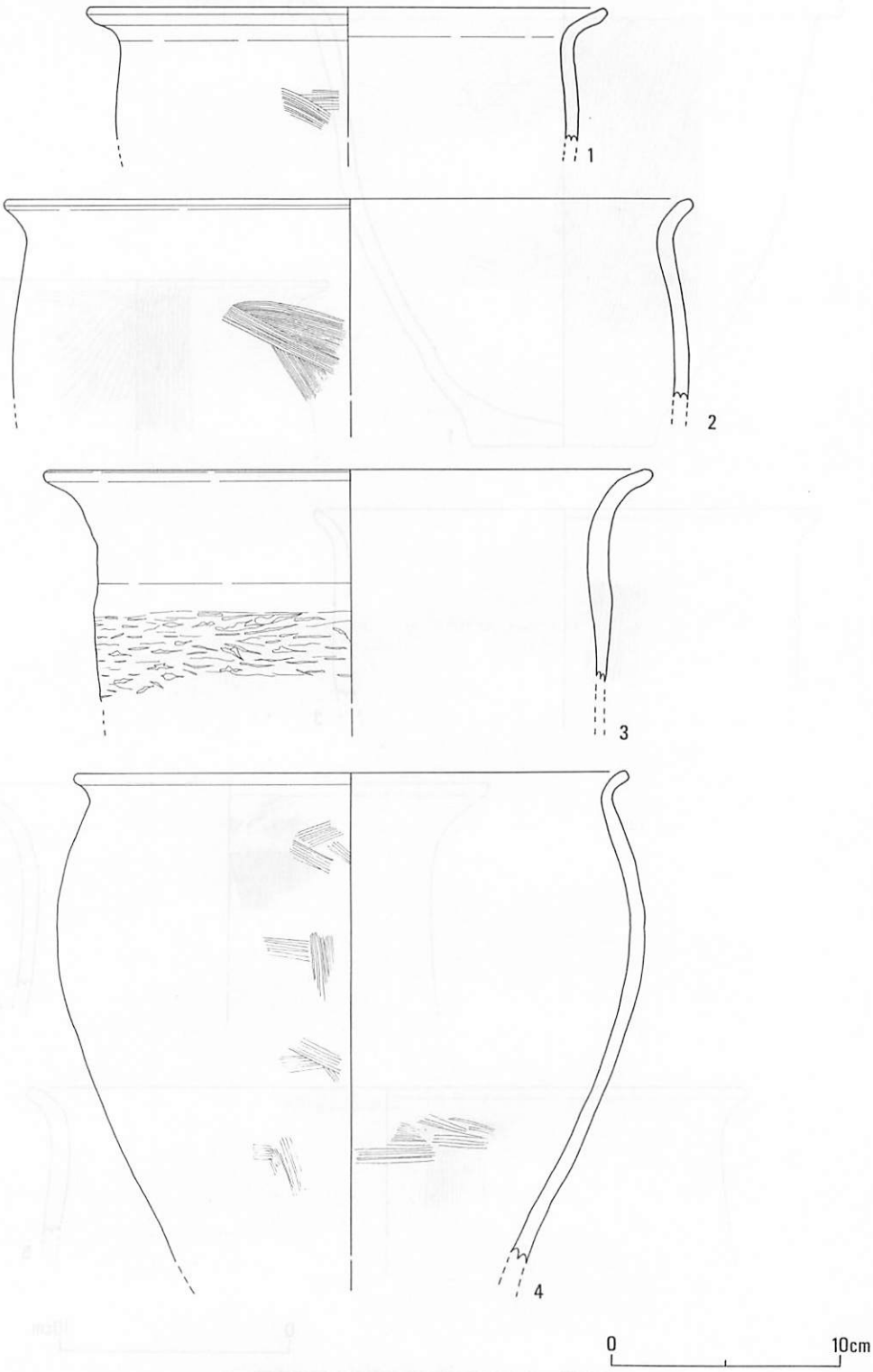

第21図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・１



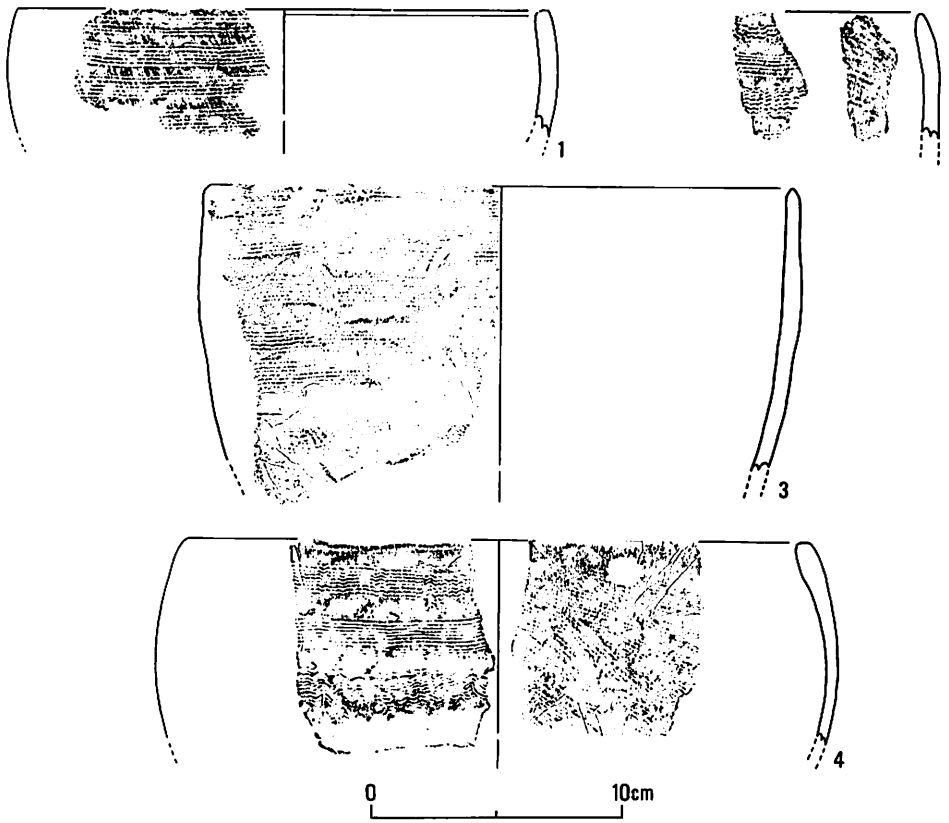

第22図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・2




第23図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・３




第24図　弥生時代第Ⅱ様式甕形土器実測図・4




第25図　弥生時代第Ⅱ様式鉢形土器実測図

## ２－４　第Ⅲ～Ⅳ様式

壷形土器，甕形土器，鉢形土器，高杯形土器，蓋形土器がある。

**広口壷$A_1$**

ゆるやかに外反する口縁部，口縁端部が下方に拡張する。口縁内面への施文が多様化する。

口縁端面の文様は，下端に刻目を施すもの(第26図１，２)が多く，その他，波状文(第28図４)，綾杉文(３，11)，刻目と波状文(第26図３)，刻目と三角刺突文(４)，斜格子(５)を施すものがある。

口縁内面の文様は，刻目貼付突帯文(６)，円形浮文と列点文(10)，列点文(第28図４)を施すものがある。

体部では，平行直線文，半截竹管による斜格子文，刻目を組合せ施文するもの(第26図８，９)，平行直線文上に大きな円形浮文を貼付するもの(７)，頸体部に複帯構成の平行直線文と扇形文を施すもの(第28図６)がある。また，口縁内面から外面へ，焼成前に穿孔した二個一組の小孔をもつもの(４)がある。

**広口壷$A_2$**

広口壷$A_1$よりも，さらに口縁端面を下方へ拡張させ，施文部を巾広くする。

口縁端面に凹線文と円形浮文と波状文を組合せ施文するもの(第27図1)，口縁端面に4条の凹線文をめぐらし，口縁内面に半円形文と簾状文を施すもの(4)がある。但し，凹線文は，A種の細い凹線文である。

**広口壺B**

口縁端部を上方に拡張するもの。口縁端上端に刻目，端面に凹線文，さらに頸体部に平行直線文と波状文を施すもの(第27図2)，口縁端面を内方へやや強く傾け，端面下端に浅い刻目を施すもの(第28図2)がある。

**広口壺C**

口縁端面をやや上下方に拡張する。

口縁端面の文様は，凹線文(第27図3)，斜格子文(第28図5)，凹線文と円形浮文(8)，凹線文と波状文(9)，綾杉文(10)，波状文と円形浮文(12)がある。口縁内面の文様は，列点文(第27図3，第28図8)，波状文と円形浮文(9，12)，波状文(10)がある。

**広口壺D**

筒状の太い頸部に，上方でやや外反する口縁部，口縁端部はやや内方へ拡張する。

口縁端部に刻目を施し，頸部には4条の断面三角形の刻目貼付突帯をめぐらす。突帯上には，縦位に2本1組の粘土紐を貼付する。さらに，突帯下方に平行直線文と波状文を施文するもの(第27図5)，頸部に断面三角形の突帯を一条めぐらすもの(第28図7)がある。

**長頸壺**

ほぼ直線的に内傾しながら立ち上がる口縁部。口縁部が，注口のように浅く抉り取られ，長い頸部に平行直線文を施すもの(第30図12)，口縁部が欠失するものの，長い頸部をもち，頸部下端に断面三角形の突帯をめぐらし，頸部内面に，縦位の絞り目が入るもの(14)がある。

**短頸壺**

短く外反する口縁部。口縁端部は上下に拡張し，端面に3条の凹線文を施す。さらに3個1組の円形浮文を貼付する(第28図1)。

**甕　$A_1$**

「く」の字状に屈曲する口縁部で，口縁端部は面をもち，上方にややつまみ上げる。施文はみられず，外面タテ方向の刷毛目，口縁内外面ヨコナデ調整をする(第27図11～13)。

**甕　$A_2$**

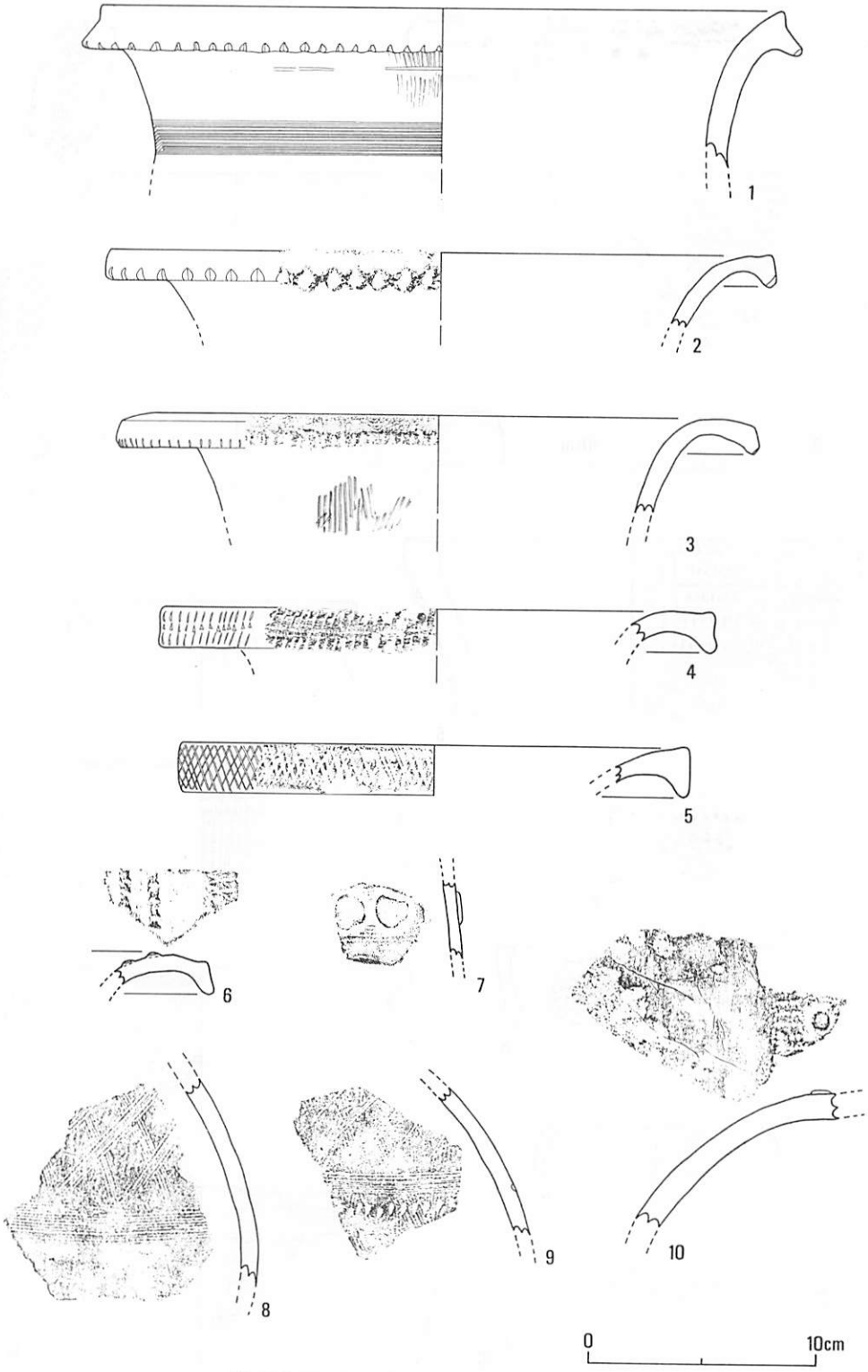
「く」の字状に屈曲する口縁部。口縁端部はヨコナデ手法でわずかに立ち上がらせている。器壁は薄い。(第29図1～3)。

**鉢　A**

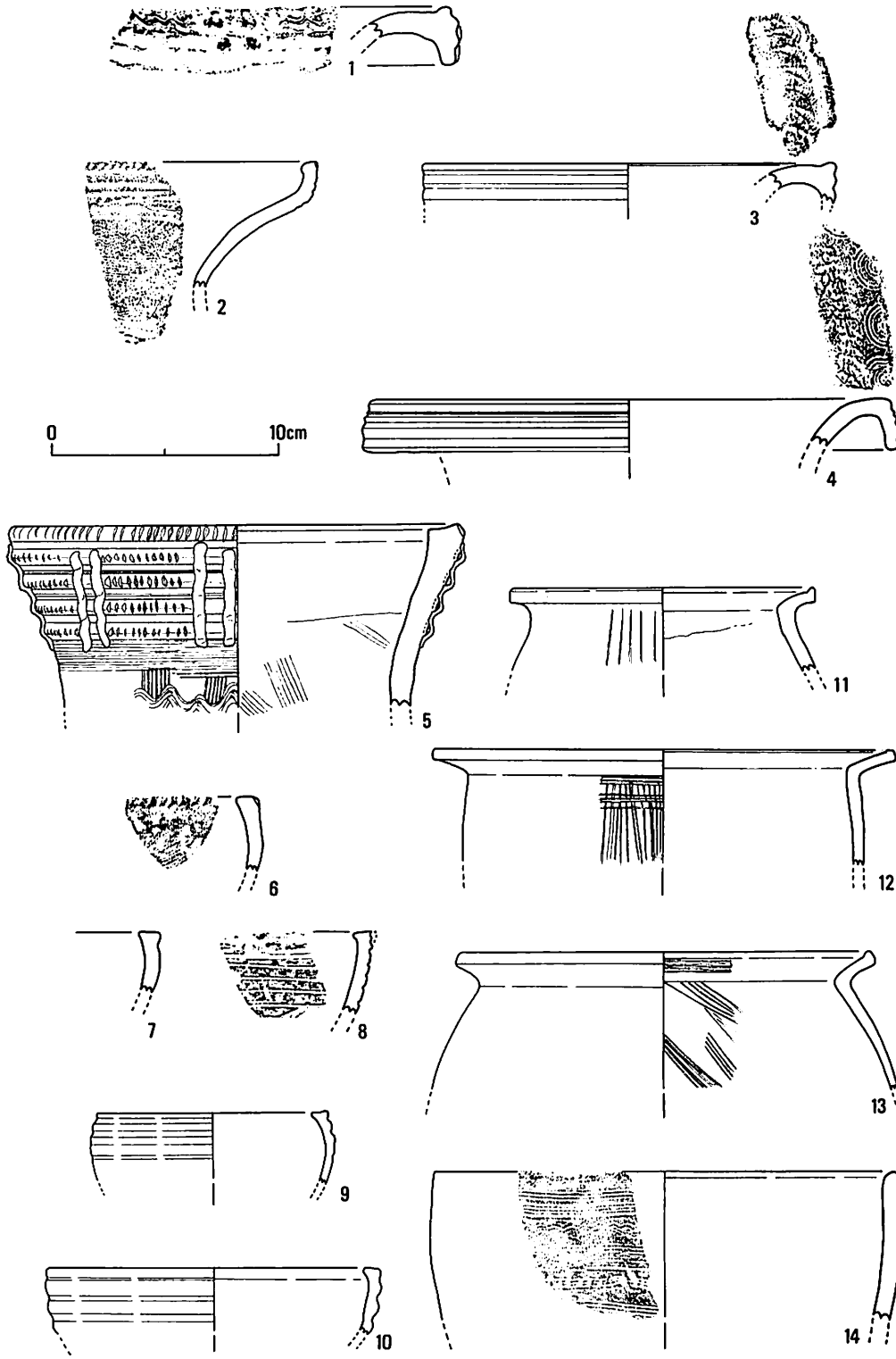
直口する口縁部で，口縁端部を丸く調整する。体部の文様は，平行直線文，波状文，簾状文を組合せ施文する(第27図14)。

**鉢　B**

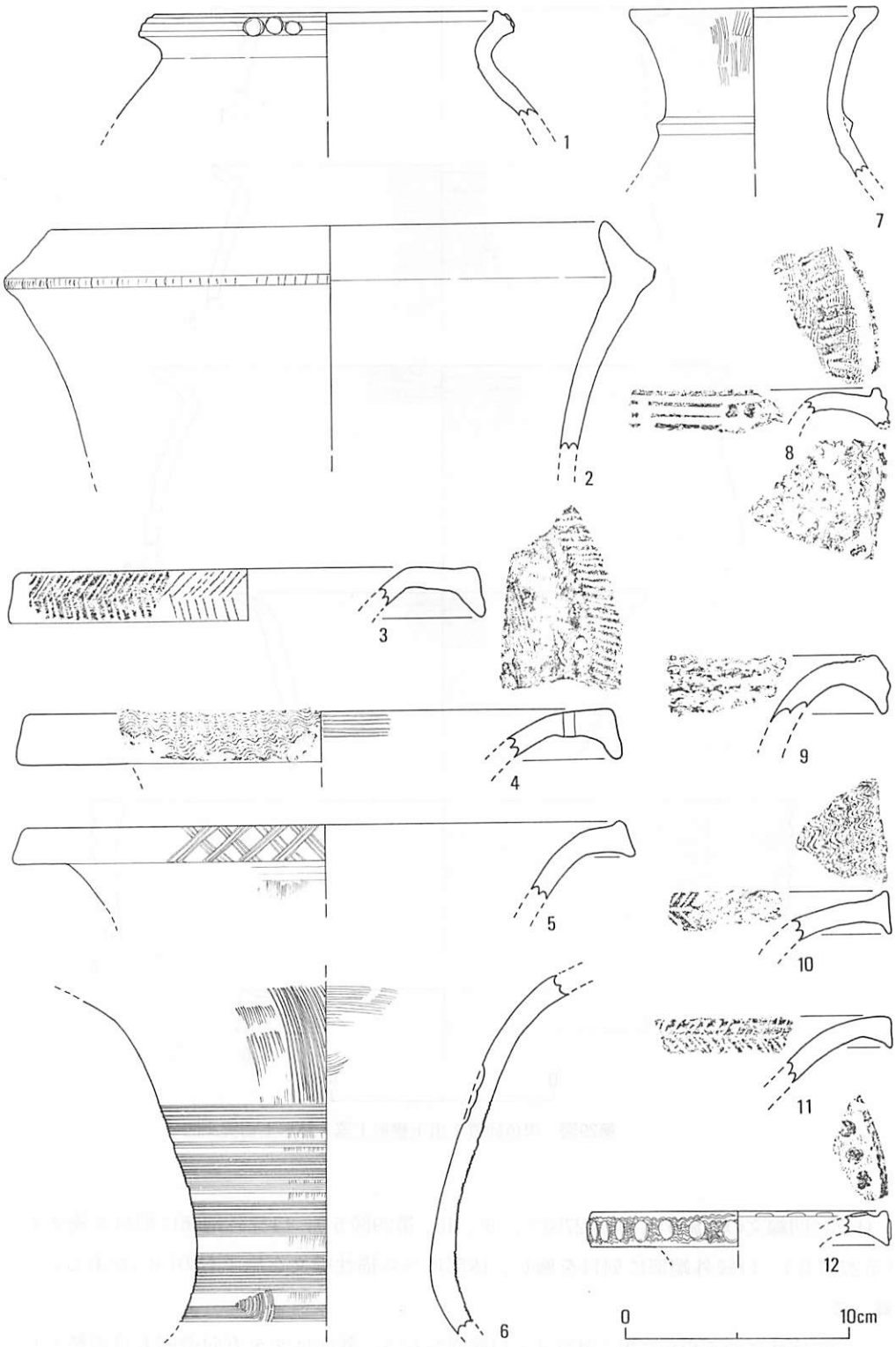
内彎気味に立ち上がり，口縁端部上面は，やや平坦に内方へ拡張する。



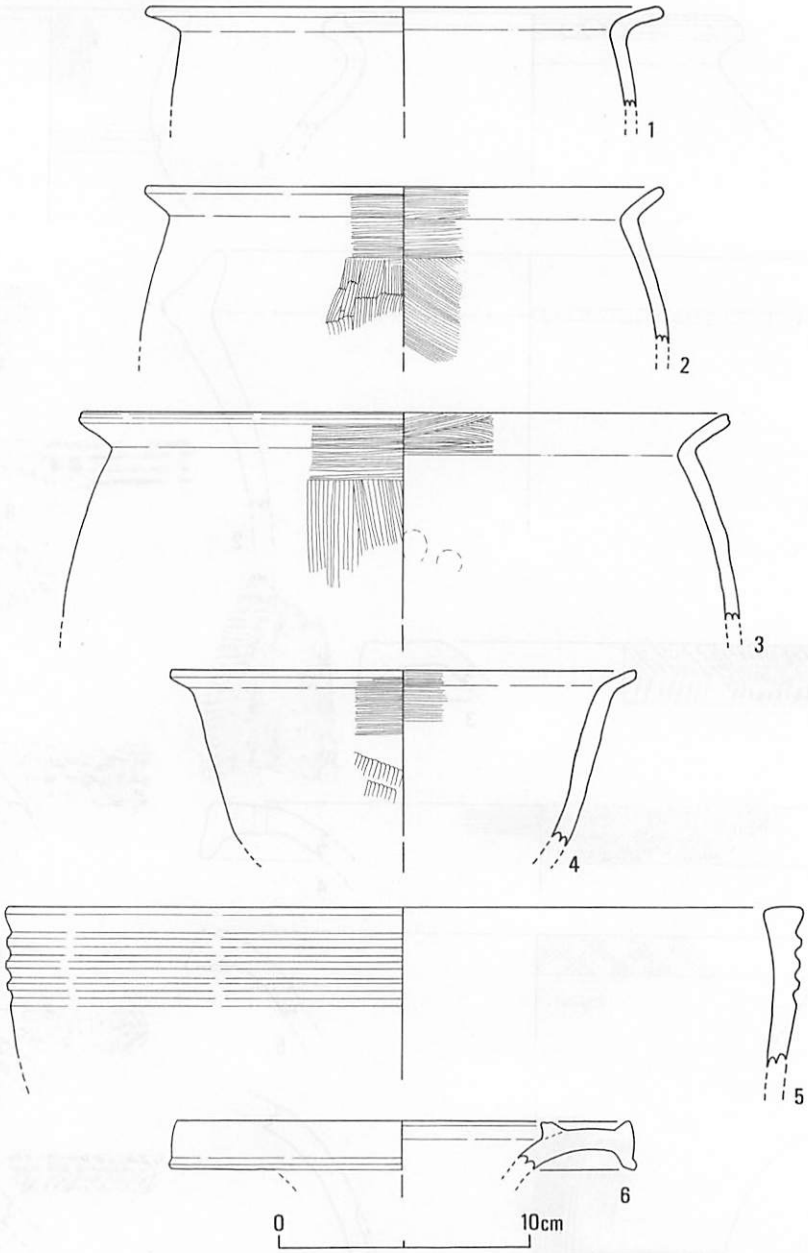

第26図　弥生時代第Ⅲ様式壺形土器実測図




第27図　弥生時代第Ⅲ・Ⅳ様式壷形土器・甕形土器・鉢形土器実測図




第28図　黒色砂質土出土壷形土器実測図

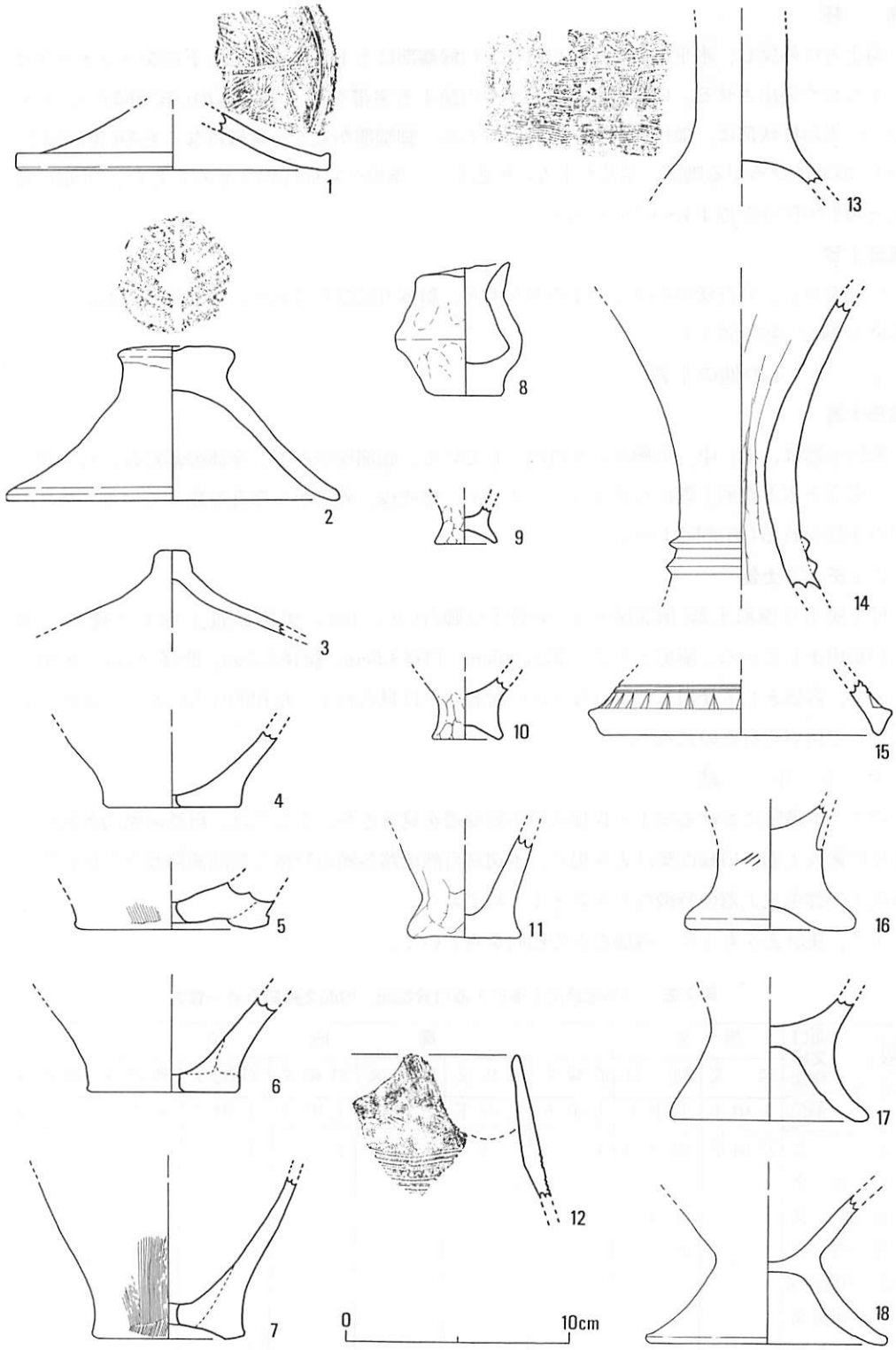



第29図　黒色砂質土出土甕形土器・鉢形土器実測図

体部に凹線文のみ施すもの(第27図７，９，10，第29図５)，口縁外端部に刻目を施すもの(第27図６)，口縁外端部に刻目を施し，体部にへら描沈線文を施すもの(８)がある。

鉢　C

「く」の字状にゆるやかに短く外反する口縁部をもつ。外面はタテ方向の刷毛目調整をした後，口縁内外面をヨコナデしている(第29図４)。




第30図　その他の弥生時代土器実測図

**高　杯**

斜上方に外反し，水平にひろがる口縁部。口縁端部は上下方に拡張し，下端をヨコナデ手法によりやや突出させる。口縁内面には，やや内傾する突帯をめぐらすもの(第29図6)，その他，中実の柱状部に，弧状にひろがる脚部をもち，脚端部が丸く，素縁になるもの(第30図17，18)，斜めにひろがる脚部，端部を上方に拡張し，二条のへら描沈線文をめぐらし，下端に縦長三角形の抉りを施すもの(15)がある。

**蓋形土器**

笠形を呈し，乳首状の小さなつまみ部をもち，斜外方にひらくもの，第Ⅱ様式のものより，器壁が薄い(第30図3)。

## 2―5　その他の土器

**甑形土器**

甑形土器は，上，中，下層から5点出土している。底部片のみで，全体の器形はとらえ難いが，壷形土器と甕形土器になるようだ。すべて，焼成後，外側から穿孔を施している。ススの付着が見られる(第30図4～7)。

**ミニュチュア土器**

最下層より壷形土器(第30図8)，中層より脚台(9，10)，黒色砂質土層より甕形土器(11)が出土している。壷形土器は，器高5.9cm，口径4.5cm，腹径5.7cm，底径3cmの粗製のもので，容器として使用したようなススの付着などは見られず，祭祀的なものか，玩具的なものとして用いられたのだろう。

## 2―6　小　結

以上，本遺跡における第Ⅰ～Ⅳ様式の土器変遷を見てきた。ここでは，自然流路内各層別文様及び搬入土器の口縁部集計表を掲げ，本遺跡自然流路各層の特徴と自然流路及び黒色砂質土層出土の弥生式土器の特徴などを若干まとめておく。

まず，集計表をもとに，各層ごとの傾向をみていく。

**第2表　自然流路出土壷形土器口縁端面，内面文様組合せ一覧表**

| 口縁内面文様＼口縁端面文様 | 無文 | | | 櫛描文 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 無文 | | | 刻目 | | | 直線文 | | | 波状文 | | | 扇形文 | | | 斜線文 | | | 斜格子文 | | | 列点文 | | | 簾状文 | | |
| 層位 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 |
| 無文 | 70 | 54 | 35 | 16 | 3 | 4 | 1 | | | 6 | 1 | | 1 | | | 2 | | | 1 | | | | | | 1 | | |
| 波状文 | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 扇形文 | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 列点文 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 扇＋円形浮文 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 扇＋列点文 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 刻目突帯 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | |

壷形土器口縁部の文様(第２表)について触れると，最下層，下層では 口縁端面，内面とも無文のものが76%と大半を占め，その他，端面に刻目や沈線文を施すもの(第13図５，第20図４，５)が８%を占める。中層では，口縁端面に刻目(第18図４，第19図１，４～６)，波状文(第19図８)，沈線文などを施すものもあるが，最下層，下層と同様に盛んでない。上層では，口縁端面，内面とも無文のものが61%と減少する一方，口縁端面に刻目(第19図２・７，第26図１～３)，刻目と三角刺突文(第26図４)，斜格子文(５，第28図５)，凹線文(第27図３，４)，凹線文と波状文と円形浮文(１)，凹線文と刻目(２)を施すものがあり，内面では，刻目貼付突帯(第26図６)，円形浮文と列点文(10)，列点文(第27図３)，半円形文と簾状文(４)など，内面への施文は多様化する。

本遺跡において，口縁端面，内面への施文は，最下層，下層，中層において，あまり盛行しないが，上層に至ると施文法が多様化し，特に凹線文の採用が注目される。さらに，他遺跡と比べると，施文率が極めて低いことも検討に価するだろう。

また，壷形土器体部の文様(第３表)においても，上層に至るに従い，文様が多様化するようだ。しかし，畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に盛行する簾状文はほとんどなく，直線文と波状文が大半を占めている。

最後に，甕形土器口頸部の文様について触れてみると(第４表)，

①沈線文の条数が１～４条に集中し，91%を占める。

②逆Ｌ字状の口縁部をもつものは，中層から出土する量が多く，73%を占める。

③口縁形態が如意形のものが，98%を占める。

④上層に至ると，口縁端部に刻目のないものが，主体をなすようになる。

次に他地域土器の搬入率をみることにする。

胎土から，産地が確認できる生駒西麓産，紀伊産土器の搬入率を口縁部の集計からみれば，生駒西麓産土器は，最下，下層0.7%，中層0.7%，上層0.1%であり，紀伊産土器は，最下，下層０%，中層１%，上層1.1%であった。このことから，本遺跡における，生駒西麓と紀伊

| 櫛描文 | | | | 刻目突帯文 | 凹線文 | 沈線文 | 沈＋刻 | 鋸歯文 | 三角刺突文＋刻 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 綾杉文 | 直＋刻 | 波＋刻 | 列＋刻 | | | | | | |
| 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 | 上 中 下 |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | 1 3 4 | 3 1 | | 1 |
| | | | | | | | | 1 | |
| | | | | | 1 | | | | |
| | | | | | 1 | | | | |
| | | | | | | 1 | | | |

第3表　自然流路出土壺形土器体部文様一覧表

| | 直線文 | | | | | | | | | | | | | | 波状文 | | | 突帯文 | | | | | 刻目突帯文 | | 流水文 | 扇形文 | 同心円弧文 | 斜格子文 | 斜線文 | 竹管文 | 三角刺突文 | 半截竹管文 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 直線文 | 波状文 | 流水文 | 扇形文 | 同心円弧文 | 斜格子文 | 斜線文 | 列点文 | 竹管文 | 三角刺突文 | 円形浮文 | 波＋流文 | 波＋斜格 | 波＋竹 | 波＋円 | 波状文 | 扇形文 | 斜格＋沈線 | 突帯文 | 斜格子文 | 斜線文 | 竹管文 | 三角刺突文 | 刻目突帯文 | 竹管文 | | | | | | | | |
| 上 | 184 | 64 | | 1 | | 1 | 1 | | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | | 1 | 15 | | | 6 | | | 1 | 1 | 16 | 1 | 4 | 4 | | 1 | | | | 2 |
| 中 | 141 | 20 | 21 | 11 | 2 | | | 1 | 1 | 4 | | | | 1 | | 8 | 1 | 1 | 13 | | | | | 21 | | 1 | | 1 | 1 | 2 | 2 | 1 |
| 下・最下 | 27 | 15 | 1 | | | | | | | 1 | | 1 | | | | 3 | | | 9 | 1 | 2 | | | 11 | | 1 | | | | | | | |

第4表　自然流路出土甕形土器口頸部施文比較表

| 沈線文条数 ＼ 口縁形態 | 如意形 | | | | | | 逆L字形 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 刻目あり | | | 刻目なし | | | 刻目あり | | |
| 屈位 | 上 | 中 | 下・最下 | 上 | 中 | 下・最下 | 上 | 中 | 下・最下 |
| 無 | 30 | 26 | 21 | 143 | 90 | 48 | | | |
| 1 | 1 | 1 | 4 | | | 1 | | | |
| 1＋α | 4 | 4 | 4 | | 1 | | | 1 | |
| 2 | | 4 | 10 | | 3 | 1 | | 1 | |
| 2＋α | 1 | 8 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | |
| 3 | 1 | 4 | 6 | | 1 | 3 | | | 1 |
| 3＋α | | 3 | 2 | | | | | | |
| 4 | | 3 | 6 | | | 1 | | 1 | |
| 4＋α | 1 | | | | | | | 2 | |
| 5 | | 1 | | | | | | | |
| 5＋α | | | 1 | | | | | 1 | |
| 6 | | | | | | | | | |
| 6＋α | | | | | | | | | |
| 7 | | | 2 | | | | | | |
| 7＋α | | | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | | | |
| 8＋α | | | | | | | | | |
| 9 | | | | | | | | | |
| 9＋α | | 1 | | | | | | | |
| 10 | | | | | | | | | |
| 10＋α | | | | | | | | | |
| 11 | | | | | | | | | |
| 11＋α | | | | | | | | | |
| 12 | | | | | | | | | |
| 12＋α | | | | | | | | | 1 |

地方との交流を考えると，前・中期の時期には，生駒西麓と，中期以降には，紀伊地方とより密な交流を行っていたことが窺い知れる。

また，生駒西麓産の土器は，削り出し突帯第Ⅱ種少条をもつ大型壷形土器(第13図１)，長い頸部に７帯の平行直線文を施文する壷形土器(第19図３)，流水文を施す直口鉢(第25図３)，貼付突帯文，へら描沈線文など，器種も豊富で，施文も多様である。ところが，紀伊産土器では，施文はなく，甕形土器に限られるようである。

以上の集計を含めた上で，本山遺跡の自然流路と黒色砂質土層の時期などについて考えてみる。各層は，一部に混乱を生じていたものの，大略，堆積状況から層位的に土器の分類ができると思われる。以下，諸特徴を列挙してみると，

①最下層，下層出土土器の施文は，段のみで構成される第Ⅰ様式(古)段階のものや櫛描文が出現する第Ⅱ様式のものは存在せず，削り出し突帯第Ⅰ種，第Ⅱ種，貼付突帯文のみで構成されるため，第Ⅰ様式(中)段階から(新)段階に属するだろう。

②中層出土土器の施文は，櫛描文が主体を成す。壷形土器は，櫛描平行直線文，波状文を主体に，三角刺突文や竹管文を付加する。甕形土器は，口縁端部に刻目，体部に櫛描文を施す播磨系土器，大和型土群，紀伊型土器を含む。しかし，逆Ｌ字状の口縁部をもつものが中層に集中することから，時期としては，第Ⅰ様式(新)段階から第Ⅱ様式に入るだろう。

③上層出土土器は，器形において，壷形土器口縁部端面が拡張することや甕形土器口縁端部を上方につまみ上げることなど，第Ⅲ様式土器の諸特徴をもつものが主体である。ところが，文様では櫛描文と凹線文が混在しているため，第Ⅲ様式と第Ⅳ様式との明確な分離が不可能である。また，第Ⅲ様式において，畿内地方で盛行する簾状文はほとんどみられない。したがって，上層は，一応第Ⅲ～Ⅳ様式に属すると考えておく。

④黒色砂質土層は，層位のところで述べているように，それ以下の自然流路がその機能を果たさなくなった後に堆積したものである。このことは，出土土器からみても，判断できる。つまり，黒色砂質土層出土土器では，第Ⅰ様式，第Ⅱ様式の混入がないことや櫛描文が残るものの凹線文の占める比率が増していることから判断できる。但し，凹線文Ａ種のみで，Ｂ種はみられない。この層においても，櫛描文と凹線文が明確に分離できないものの，上層より時期が下がる第Ⅲ～Ⅳ様式と思われる。

⑤土器の色調は，褐色系を主体とする，いわゆる山の土器である。

⑥器面調整は，刷毛目を主体とし，へら削りは少数である。口縁内外面はヨコナデを用いる。

以上の６点が指摘できよう。

本遺跡周辺において，中期以降の高地性集落など丘陵，山地性遺跡は，多く調査されているが，前期～中期にかけての低地性遺跡は断片的な資料しかなかったため，本遺跡の資料は，その空白を埋める貴重なものとなるだろう。

## 第３節　石　　器（第31～34図，第５表，図版第10下・11）

### ３－１　石器組成と出土状態(第５表)

本遺跡では，石器類のほとんど全てが流路の埋土である黒色砂質土及び黒色粘質土から出土しており，両者にはある程度の時期差が考えられるが，黒色砂質土出土のものが少く，その分布や石器の特徴等に明確な差が認められないので，ここでは一括して扱う事にする。

石器総数は，破片も入れると96点を数え，その内訳は，太型蛤刃石斧４点，石包丁８点，敲石14点，磨石16点，投弾状石器３点，石皿３点，砥石２点，石鏃１点，楔形石器１点，削器１点，サヌカイトの剥片・砕片・石核35点，チャートの砕片８点となっており，他に用途不明の石や，玻璃質安山岩等の搬入石材が若干認められる。

石器に使用されている石材は，器種により明確な使い分けがなされており，詳細については各器種の項で述べる事にする。

出土状態は，層位については先に述べた通りであるが，平担的な分布はＧ２ｃ・Ｇ４ｄ・Ｇ５ｃ・Ｇ８ｂに集中する傾向をみせるが，器種による分布の偏りは認められない。

今回の調果では，明確な人為的な遺構は検出されず，石器類も流路の埋土中という特殊な状況で堆積したものであり，更に，打製石器の製品が３点と異常に少く，量的にも質的にも，本遺跡の石器組成が特定の生業形態の全てを反映しているとは考えられない。しかしながら，石器類はさほどローリングを受けておらず，剥片・砕片・石核等もある程度出土している事から，近くに石器生産を伴う生活の場が存在していた事は容易に推測される。

### ３－２　太型蛤刃石斧(第31図１・10～13)

今回出土した磨製石斧８点は，全て太型蛤刃石斧であるが，この内４点には敲打痕のある凹みが観察され，敲石に再利用されている(10～13)。従って，表面に前記の凹みが認められないものを太型蛤刃石斧として数えた。この凹みを持たないものの内３点は胴部破片であり，形態がわかるものは１点だけである(１)。１は刃部を欠損しており，表面は研磨がゆきとどき，側面にゆるい稜を形成している。10は刃部形状がわかる唯一の例であり，両面からの研磨により外彎する刃を持つ。13は断面形がほぼ円形を呈し，基部にも円形の平坦面を持っており，他の例と若干形態に差がみられる。石材は，砂岩・斑栃岩の他に，粘板岩・輝緑岩・玲岩も使用している。

### ３－３　石包丁（第31図２～９）

完形品は１点(２)のみであるが，残り７点中６点は形態分類が可能である。形態には個体差があるものの，大きく３類に分けられ，半月形内彎刃(２)，半月形外彎刃(３～６)，半月形直線刃(７，８)がみられる。いずれも丁寧に研磨されており，刃部は両刃のもの(４，５，８)と片刃のもの(２，３，６)がある。背面はいくつかの研磨面で構成されるもの(３～５，７)と，丸く仕上げられているもの(２，６，８)に分けられる。また，紐孔を留める

第5表　石器一覧表〔単位はmm，g，（　）は現存値を示す。〕

| 石器番号 | 地区 | 層位 | 遺存状態 | 石材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 太型蛤刃石斧 | | | | | | | | | |
| 15 | G2c | 第3層上 | 4/5 欠 | 粘板岩 | (73.5) | (52) | (13.5) | (185) | |
| 16 | G4b | 第3層下 | 4/5 欠 | 不明 | (84) | (55) | (15) | (171) | |
| 17 | G2c | 第3層 | 3/5 欠 | 斑糀岩 | (64) | (46) | (51.5) | (261) | |
| 18 | G4d | 第2層 | 1/5 欠 | 輝緑岩 | (123) | 69.5 | (48) | (662) | 第31図1 |
| 石包丁 | | | | | | | | | |
| 01 | G8b | 第3層中 | 3/5 欠 | 泥片岩 | (64) | (58) | 6 | (40) | 同 5 |
| 02 | G2a | 第3層上 | 完形 | 緑泥片岩 | 165 | 42.5 | 7 | 81 | 同 2 |
| 03 | H8b | 第3層上 | 4/5 欠 | 泥片岩 | (52) | (43) | (5.5) | (9) | 同 7 |
| 04 | G8b | 第3層中 | 3/5 欠 | 泥片岩 | (65.5) | (57) | 9 | (29) | 同 6 |
| 05 | G2a | 第2層 | 2/5 欠 | 半花崗岩 | (111) | 54.5 | 14.5 | (101) | 同 8 |
| 06 | G2c | 第3層上 | 3/5 欠 | 泥片岩 | (65) | (49) | 7.5 | (22) | 同 4 |
| 07 | G2c | 第3層中 | 3/5 欠 | 緑泥片岩 | (58) | 57 | 7.5 | (39) | 同 3 |
| 08 | G4d | 第2層 | 4/5 欠 | 粘板岩 | (35.5) | (34) | (5) | (8) | 同 9 |
| 敲石 | | | | | | | | | |
| 11 | G5c | 第3層 | 1/2 欠 | 砂岩 | (110) | (67.5) | (52.5) | (549) | 同 10 |
| 12 | G2 | 第3層上 | 3/5 欠 | 斑糀岩 | (62) | (65) | (44) | (297) | 同 13 |
| 13 | G2a | 第2層 | 3/5 欠 | 砂岩 | (86) | (61) | (51) | (378) | 同 11 |
| 14 | G1.2 | 第3層上 | 3/5 欠 | 玢岩 | (61) | (70) | (51) | (383) | 同 12 |
| 41 | G5c | 第3層下 | 完形 | 砂岩 | 53 | 48 | 25 | 71 | 同 15 |
| 52 | G5c | 第3層上 | 完形 | 半花崗岩 | 75 | 64 | 34 | 231 | |
| 53 | G2c | 第3層上 | 完形 | 半花崗岩 | 79 | 38 | 27 | 104 | |
| 55 | G5a | 第3層上 | 完形 | 花崗岩 | 87 | 60.5 | 47.5 | 344 | |
| 56 | G2c | 第3層 | 完形 | 花崗岩 | 66 | 48 | 45 | 179 | |
| 60 | G2 | 第3層中 | 完形 | 半花崗岩 | 70 | 46.5 | 45.5 | 197 | 同 17 |
| 62 | G5c | 第2層 | 完形 | 半花崗岩 | 54 | 52 | 52.5 | 180 | 同 16 |
| 66 | G5c | 第3層上 | 完形 | 花崗岩 | 69.5 | 45 | 42 | 170 | |
| 67 | 不明 | | 完形 | 砂岩 | 107.5 | 55.5 | 26 | 210 | |
| 101 | G2C | 第1層 | 完形 | 斑糀岩 | 102 | 85 | 54 | 769 | 同 14 |
| 磨石 | | | | | | | | | |
| 31 | G8b | 第3層上 | 1/2 欠 | 斑糀岩 | 80 | 65 | (32.5) | (232) | |
| 32 | G2c | 第3層 | 4/5 欠 | 斑糀岩 | (97.5) | (45) | (29.5) | (170) | |
| 33 | G4.5 | 第3層下 | 1/2 欠 | 花崗岩 | 103 | (52.5) | 54.5 | (422) | 第32図2 |
| 34 | G1.2 | 第3層中 | 破片 | 砂岩 | (50) | (32.5) | (9.5) | (17) | |
| 35 | G1.2 | 第3層下 | 完形 | 斑糀岩 | 91 | 74.5 | 39 | 411 | 同 4 |
| 37 | G8a | 第3層 | 完形 | 砂岩 | 110 | 90 | 48 | 609 | 同 1 |
| 38 | G2c | 第3層上 | 完形 | 砂岩 | 75 | 62 | 46 | 261 | 同 3 |
| 39 | G2c | 第3層上 | 1/5 欠 | 砂岩 | 68 | 32 | 19 | 50 | |

| 石器番号 | 地　区 | 層　位 | 遺存状態 | 石　材 | 長　さ | 幅 | 厚　さ | 重　さ | 挿図番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | G2a | 第2層 | 完　形 | 角閃花崗岩 | 95 | 79 | 40.5 | 459 | |
| 42 | 不　明 | | 完　形 | 花崗岩 | 78.5 | 62.5 | 50.5 | 310 | |
| 43 | 不　明 | | 完　形 | 半花崗岩 | 77.5 | 65 | 45 | 282 | |
| 44 | 不　明 | | ⅙　欠 | 花崗岩 | (102 ) | (77.5) | 49 | (463) | |
| 58 | G5c | 第3層中 | 完　形 | 花崗岩 | 63.5 | 39.5 | 39.5 | 145 | 同　6 |
| 61 | G1.2 | 第3層中 | 完　形 | 半花崗岩 | 86.5 | 43.5 | 29 | 136 | 同　7 |
| 63 | G5c | 第2層 | 完　形 | 花崗岩 | 75 | 54 | 47 | 240 | 同　5 |
| 81 | G5d | 第2層 | 完　形 | 花崗岩 | 68 | 55 | 43 | 196 | |
| 投弾状石器 | | | | | | | | | |
| 82 | G2 | 第3層 | 完　形 | 花崗岩 | 58 | 49 | 44 | 170 | |
| 83 | G8b | 第3層中 | 完　形 | 花崗岩 | 65 | 53.5 | 42 | 190 | |
| 84 | G5c | 第3層 | 完　形 | 花崗岩 | 65 | 61.5 | 58 | 339 | 同　8 |
| 石　皿 | | | | | | | | | |
| 91 | G2a | 第3層上 | ⅔　欠 | 砂　岩 | (97.5) | (103 ) | 40 | (678) | 同　9 |
| 92 | G8b | 第3層下 | 完　形 | 花崗岩 | | 105 | 77 | 1400 | |
| 93 | G5a | 第3層 | 破　片 | 安山岩 | | | | ( 90) | |
| 砥　石 | | | | | | | | | |
| 111 | G8b | 第3層中 | 完　形 | 砂　岩 | 305 | 72 | 61 | 1508 | 第33図1 |
| 112 | | 表　採 | ⅙　欠 | 砂　岩 | (81.2) | 46.9 | (23.4) | ( 62) | 同　2 |
| 石　鏃 | | | | | | | | | |
| 241 | G8b | 第3層中 | 基部末端欠 | サヌカイト | 25.5 | (16.0) | 3.5 | ( 1) | 第34図1 |
| 楔形石器 | | | | | | | | | |
| 251 | G5d | 第2層 | ⅙　欠 | サヌカイト | ( 31 ) | 28 | 5 | ( 5) | 同　2 |
| 削　器 | | | | | | | | | |
| 261 | G2C | 第2層 | ½　欠 | サヌカイト | (34.4) | (32.2) | 8.6 | ( 8) | 同　3 |

もの(2～6，9)は，全て両側より穿孔されており，いずれにも紐擦れ痕は観察されない。石材は，ほとんどが泥片岩，緑泥片岩等の軽い石材を用いている。8は形態的には他と同様の分類の範中に包括されるものであるが，石材に半花崗岩という重い石材を用い，ぶ厚く仕上げられ，恐らく紐孔も持たないであろうと考えられる事から，他の石包丁とは若干使用目的等の点で性格を異にするものと理解される。

### 3－4　敲　　石　(第31図10～17)

円礫や磨製石斧欠損品の一面あるいは二面以上にわたって敲打痕のある凹みを持ち，且つ，磨耗痕がみられないものを敲石とした。磨製石斧の欠損品を再利用したものも含めると，14点全て敲石としては完形品である。敲打痕のある凹みの所在部位により分類が可能であり，表裏両面と周縁部に敲打痕のある凹みを有するもの(10, 14)，片面にのみ凹みを有するもの(15)，素材礫の周縁部一ケ所に凹みを有するもの(11)，素材礫の周縁部二ケ所以上に凹みを有するも

の(12, 13, 16, 17)がみられる。11は表面の凹みが明瞭ではなく，石斧の基端に敲打痕を残すものであり，この種の敲打痕は他遺跡出土の完形品にも観察される事から，一概には敲石とは断言出来ない。15は小形の偏平な円礫の片面に広範囲に敲打痕がみられるものであるが，凹みは形成されず全体にアバタ状を呈する。17には二面に磨耗痕が観察されるが，敲打痕の範囲が広く磨耗痕を潰す形で認められる為，磨石との併用ではなく，磨石を再利用したものと考えられる。石材は，砂岩・半花崗岩・花崗岩が多く用いられているが，玲岩・斑栃岩も若干認められる。

### 3 — 5　磨　石（第32図1～7）

主に偏平な円礫の一面あるいは二面以上にわたり，広い範囲に磨耗痕を残すものを磨石とした。16点中，完形品は10点であり，形態のわかるもの13点について，素材礫の形態及び磨耗痕の数と敲打痕の有無より分類すると，偏平な円礫の一面にのみ磨耗痕が認められるもの(1～4)と，長円形の円礫の一面に磨耗痕を有し周縁部に敲打痕が認められるもの(5)，長円形の円礫の二面に磨耗痕を有し周縁部に敲打痕が認められるもの(6，7)に分けられる。7は磨耗痕が顕著でなく，端部の敲打痕が非常に明瞭である事から，敲石としての機能が優先していたとも考えられる。この様に，敲打痕の所在によっては，明確に磨石と敲石を区別出来ない場合も生じて来るわけであるが，完形品の重量の違いに注目してみれば，敲石が平均重量245.5g(磨製石斧再利用のものを除く)を測るのに対し，磨石は304.9gであり，明確に磨石の方が重い傾向を指摘出来る。この事は，磨石の石材にも敲石同様，砂岩・半花崗岩・花崗岩・斑　岩が多用されている事実も考え合わせると，礫の選択に当っては，磨石の場合，より大きく重いものを志向した事を示していると言えよう。

### 3 — 6　投弾状石器（第32図8）

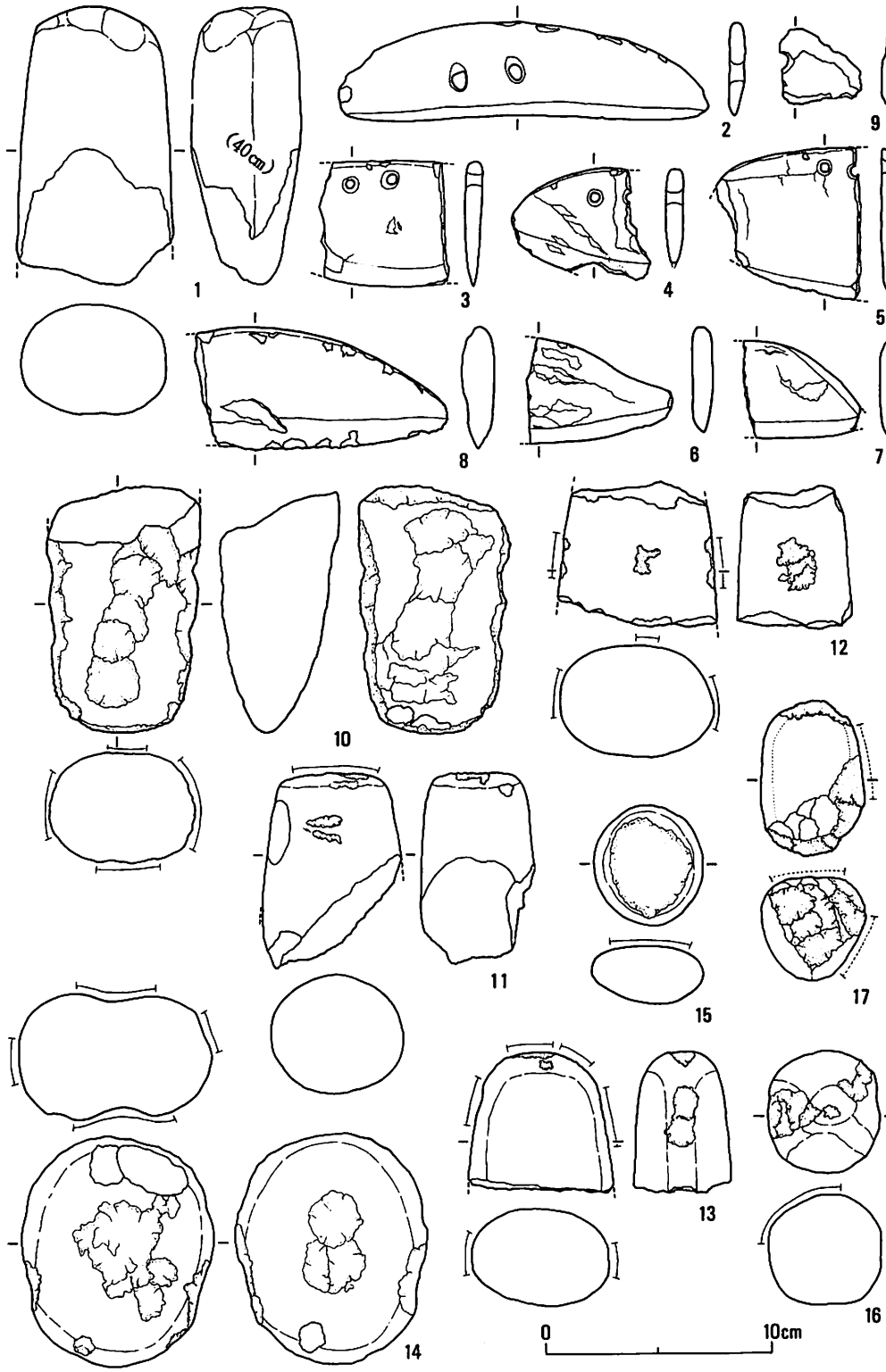
花崗岩の円礫で，特に長さ・幅・厚さの値が近接しより球形に近く，比較的持つのに手ごろなものを投弾状石器と分類した。この種の礫には，若干敲打痕が認められるものがあるが，一般にはほとんど人為的な加工痕や使用痕はみられず，使用を目的として選択された礫であるとは断言出来ないが，その形態的特徴から使用の可能性のある礫として注目しておきたい。

### 3 — 7　石　皿（第32図9）

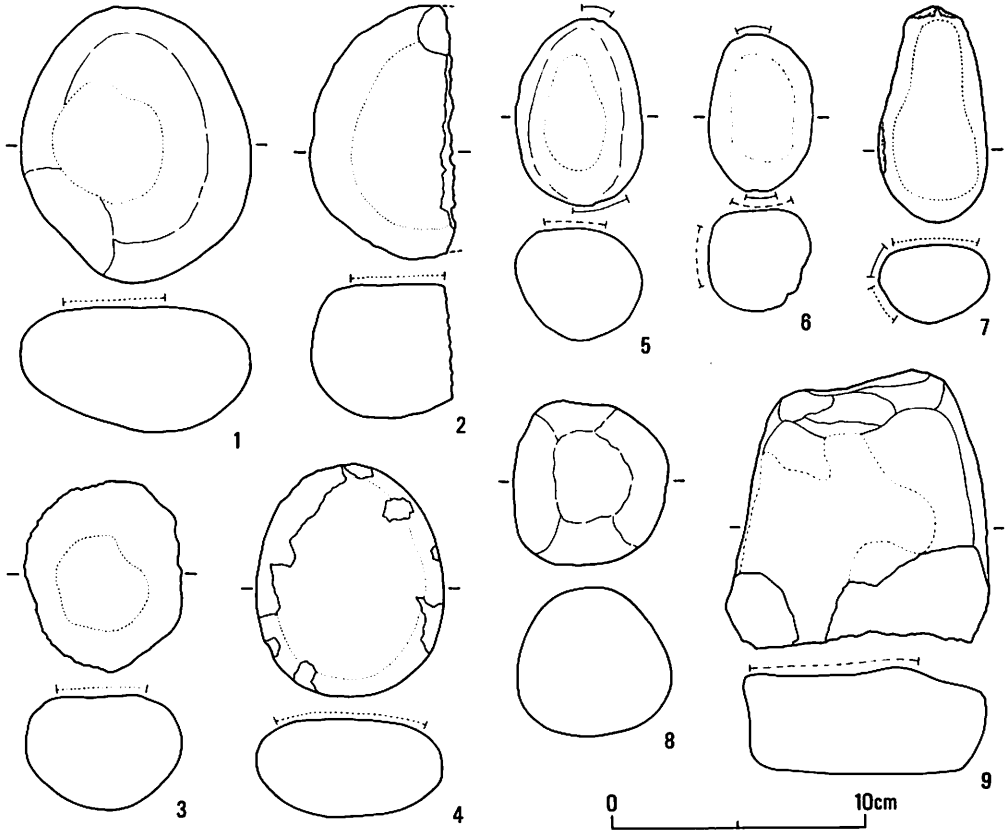
板状の礫の片面に一定の方向性を示さない磨耗痕のあるゆるい凹みを打つものを石皿とした。9は特に凹みが明瞭なもので，磨耗痕が周縁部にまで及んでいる為，中央付近の磨耗痕の無い部位がやや突出した形状を呈する。石材は，砂岩・花崗岩・安山岩と多様であり，対象物による使い分けも考えられる。

### 3 — 8　砥　石（第33図1，2）

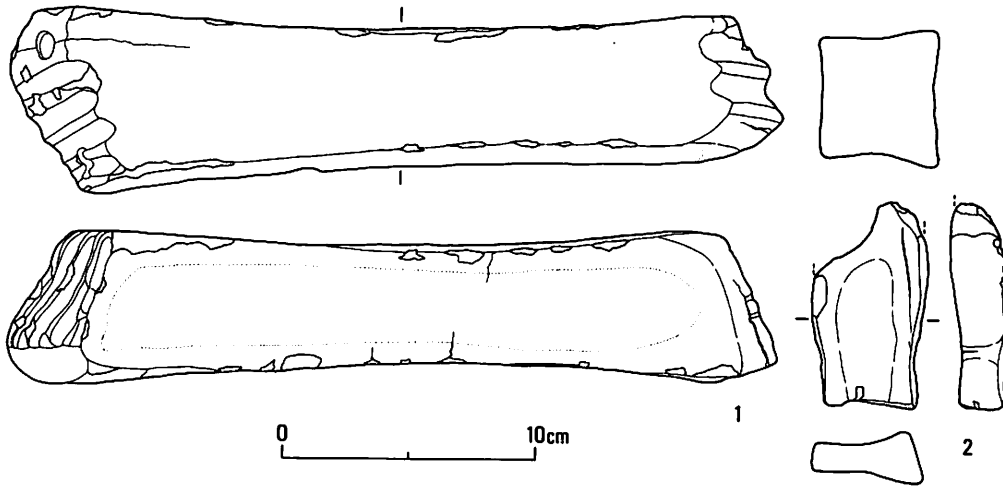
礫の一面以上に一定の方向性を持つ磨耗痕のあるものを砥石と分類した。1は非常に大形のもので，四面に磨耗痕が認められ，各面とも中央がやや凹み若干彎曲した様相を呈する。また，両端には数条の溝状の磨耗痕が観察され，これを切る形でやや深い円形の穴があけられている。2は比較的小形のもので，上下両面及び一側面に磨耗痕がみられ，一面は中央がやや凹むが，



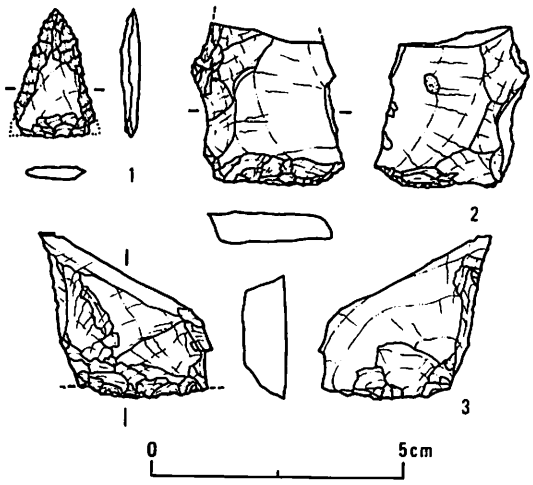

第31図　磨製石斧・石包丁・敲石実測図（使用痕は磨痕を点線，敲打痕を実線で示す。）




第32図　磨石・投弾状石器・石皿実測図




第33図　砥石実測図




第34図　石鏃・楔形石器・削器実測図

他の二面は平坦である。石材は，2点とも砂岩を用いている。

3－9　石　鏃(第34図1)

本遺跡よりは，この1点の出土をみたのみである。基部両端を欠損するが，平基無茎式で二等辺三角形状を呈する。調整は，両面とも先端部には入念に行われ，基部に近くなるほど周縁部のみに浅い調整が施され，中央部には素材剥片の面を留める。

3－10　楔形石器(第34図2)

表裏両面に素材剥片の剥離面を広く留める薄手のもので，面的な整形加工が一端から両面に行われており，その後左右両端は折り取られている。刃部の調整は，一端は欠損している為不明であるが，もう一端は，剥片の周縁部から表裏両面に向けてほぼ同角度でなされ，エッジの部分は多数の階段状剥離が観察される。

3－11　削　器(第34図3)

刃部破片であるが，その技術的特徴は理解出来る。剥片素材で，片面には素材剥片の主要剥離面を留めている。刃部の調整は，まず主要剥離面の打瘤を面的な剥離で除去し，これを打面として，背面側に急斜度(60度)の調整を施しほぼ直刃に仕上げている。

## 第4節　その他の遺物　(図版第12)

自然流路からは，土器・石器の他に木製品，骨・種子等の自然遺物が出土した。自然遺物については，同定作業中のため後日報告したい。木製品は，明らかに人工品と思われるものが1点あるだけで，大半は流木である。ただ炭化しているものも多い。

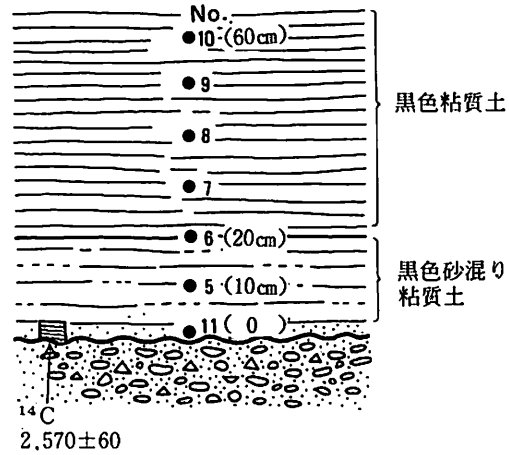
図版第12下は，自然流路最下部(第9図第1セクション図参照)より出土したものである。板状になっており，長さは47.5cmを測る。幅は約13cm，厚さ2～3cmの長方形を呈している。両端はやや焼けており，意識的に切断しているようにも思える。なお，両面には明瞭に加工痕が残り，一端には4ケの小穴が穿たれている。同図版上は，石斧の柄状を呈しているものである。柄の長さは48cm，頭部は長さ33cm，幅・厚さは7cmを測る。加工痕は不明瞭であるが，石斧の柄の未製品であろうか。

# 第4章　自然科学的調査

## 第1節　花粉分析からみた周辺の森林景観について

（第4・35図）

花粉分析は，発掘地南壁中(第4図e－fセクション)の黒色砂混り粘土および黒色粘質土層7試料について行った。地山の花崗岩質角礫(ペブル大)を不整合におおう黒色砂混り粘土層の $^{14}$C年代は，2.570±60y.B.P.(KL－450)と測定されている。このB地点基底の層準を0(No.11)とし，上位へ10cm間隔で試料を採集し，分析作業をすすめた(第35図)。




第35図　花粉分析・珪藻分析資料採取B地点模式図

花粉分析の試料は二酸化カリウム5％溶液でアルカリ可溶物を溶脱したのち，塩化亜鉛の飽和溶液中で濃集し，無水酢酸と硫酸の混合液で処理してプレパラートを作製，検鏡した。

花粉胞子化石の産出は，最下部の0cmの層準以外は決して豊富とはいえないが，黒色粘質土堆積当時の森林景観を推定しうる情報は得られた。もっとも花粉化石が豊富に検出された0cmの試料に基づいて，遺跡周辺の森林植生を推定すると次のようである。

木本花粉のみの出現率5％以上産出する樹木を，一応遺跡周辺に自生したものと仮定してみると，針葉樹ではモミ 15.0％，マツ属10.6％，スギ属5.0％，コウヤマキ属12.2％，イヌマキ属6.1％で，広葉樹ではシイ属8.9％，コナラ亜属6.1％，アカガシ亜属18.3％である。

このほか，5％以下の出現率であるが検出されたものとしては，針葉樹ではツガ属，広葉樹ではヤマモモ属，オニグルミ属，サワグルミ属，ヤナギ属，ハシバミ属，ブナ属，エノキームク属，ケヤキ属，トチ属，トネリコ属，アカメガシワ属，カエデ属，サルスベリ属，ノグルミ属，クマシデ属であった。

上記の5％以上の出現率をもつ木本に共通することは，何れも花粉生産量の多い風媒花である点であり，花粉生産量が少い虫媒花粉をもつ木本は，今回の場合，5％以下を含めてもシイ属，アカメガシワ属，サルスベリ属など少数である。

このような点を考慮して当時の森林景観を推定すると，モミ・コウヤマキ，アカマツ・アカガシ亜属・シイなどが混生する中間温帯林ないし照葉樹林の上限帯が考えられる。それぞれの樹種に関しては，花粉粒の形態のみでは決定できないが，前述の森林帯を構成する樹種を参考

に検討すれば，次のような樹種が自生していたと云える。

モミ属は，モミ(*Abies firma*)，マツ属は二葉松であり，アカマツ(*Pinus densiflora*)，であろうが，海岸に近い位置にあるので，クロマツ(*Pinus thunbergii*)，が混生していた可能性もある。コウヤマキ属はコウヤマキ(*Sciadopitys verticillata*)，スギ属はスギ(*Cryptomeria japonica*)，マキ属はイヌマキ(*Podocarpus macrophllus*)，シイ属はシイ(*Castanopsis cuspidata*)，コナラ亜属はコナラ(*Quercus serrata*)，クヌギ(*Q. acutissima*)，アベマキ(*Q. variabilis*)，などが考えられる。アカガシ亜属は，アカガシ(*Cyclobalanopsis acuta*)，シラカシ(*C. myrsinaefolia*)，アラカシ(*C. glauca*)，イチイガシ(*C. gilva*)，ツクバネガシ(*C. sessilifolia*)，ウラジロガシ(*C. salicina*)，等であろう。

現在の本山町付近の自然植生は破壊されて，わずかに特定の場所にのみ認められるが，それらを手がかりに推定されている潜在自然植生は，神戸市植生図によると，アラカシ—ヒメユズリハ群落と，シイ—カナメモチ群集，カクレミノ群集との境界付近に本遺跡は位置している。

すでに述べたように本遺跡の木本花粉は，モミ，コウヤマキ，アカガシ亜属等を中核とする樹種構成であり，このような高木類は現在の六甲山地では，海抜400～600mの摩耶山付近に，いわゆるモミ帯：中間温帯林として生育が確認されている。このように見ると当時は森林帯が約400m低下していたと考えられるが，しかし，モミも，コウヤマキもその垂直分布の下限は近畿地方においては，海抜50mぐらいあることを考慮すると，当時の森林帯をさほど大きく低下していたと考えなくてもよい。

現在に近い状態か，あるいは100～200m程度，森林帯が低下していたとする推定が可能である。$^{14}$C年代の示すこの時期は，大阪湾岸地方のとくに大阪・河内平野では，人間の生産活動期に入り，原植生は破壊され，二次林であるアカマツ—コナラ林が形成されていたとする花粉分析学的報告が多い。しかし，本遺跡ではマツ属もコナラ亜属の出現傾向もそのような状態は考えられず，本格的な生産活動は始まっていなかったと推定される。ただ，現在に比べて，わずかに低温化していた気候小悪化期であったかも知れない。

## 第2節　珪藻分析（第4・35図，第6～8表）

珪藻は，淡水，汽水，海水のすべての水域に生息する単細胞藻類で，塩分濃度，栄養性pH，止水・流水などの環境要因に対し，種特異的分布を示す。その被殻は，硅酸質でできており，細胞の死後，堆積物中でも分解されず，珪藻遺骸として保存される。したがって，堆積物中の遺骸の種構成を分析することによって，当時の古環境が推定できる。

このような珪藻分析による古環境の解析研究は，最近では，関谷・熊野(1982, 1983)のオホーツク海沿岸における研究やKasima (1983)の銚子・御前崎における研究などがある。

今回，筆者は，本山遺跡の古環境研究の一環として，珪藻分析を行ったので，その結果をここに報告する。

## 2—1　試料と処理方法

### 1）試　料

分析に用いた試料は，本山遺跡の2地点より採取された8試料，Sample A（No.1，No.2，No.3，No.4）とSample B（No.11，No.6，No.7，No.9〔それぞれ下層よりの順〕）である。

### 2）処 理 方 法

試料を約1gとり，約8％の過酸化水素水を加えて加熱し，バブリングした後，塩酸原液を加え，有機物を分解する。それを遠心分離により，5回以上水洗した。その試料を，プレウラックスで封入し，プレパラートとした。同定は，顕微鏡写真によって行った。

## 2—2　結果および考察

### 1）Sample Aについて

4試料とも，珪藻は，全く出現しなかった。処理に原因があるかどうかを調べるため，処理前の試料を水でうすめ検鏡したが，やはり珪藻は出現しなかった(第6表)。

この原因については，他の分析結果と比較検討して考えなければならない。

珪藻が出現しない場合としては，

1.もとは生息していた。

a.　流水や降水により洗われた。

b.　強アルカリ環境となり溶解した。

c.　その他

2.もとから生息できない環境であった。

例えば，熱帯地方などでは，水中に含まれる栄養塩量が少ないため，珪藻は少ない。などが考えられる。

### 2）Sample Bについて

4試料とも，珪藻は出現するが，きわめて少く(No.11：24個，No.6：25個，No.7：53個，No.9：21個／1プレパラート当り)，また，分解が著しい(第6表)。

珪藻が出現しなかったり，数が少なかったりすることは，カナダのオンタリオ湖の湖底コアサンプル(DUTHIE & SREENIVASA 1971)や淡路・志知川沖田南遺跡の露頭サンプル(熊野ら，1982)でも報告されている。

その原因については，前述の1・2，など多く考えられるが，これは，他の分析結果等を総合して判断されるべきであろう。

このSample Bについては，多くのプレパラートを作り，それぞれ被殻数が合計50個になるまで計数した。

まず，出現種を，HUSTEDT(1930, 1959, 1961－66)，PATRICK & REIMER(1966, 1975)などに従い，その生態学的特徴により，淡水棲種・汽水棲種・海水棲種に分類した。その結果，4試料の出現種は，100％淡水棲種であった。

そこで，LOWE(1974)などに従い，止水・流水性と*pH*について分類した(第7表)。

第6表　1プレパラート当りの出現珪藻表

| Taxa of diatoms | Sampling points | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | Sample A | Sample B | | | |
| | No.1 ～ No.4 | No.11 | No.6 | No.7 | No.9 |
| *Achnanthes lanceolata Bréb.* | 出現なし | | 2 | | |
| *Bacillaria paradoxa var. tumidula Grun.* | | | | | 1 |
| *Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cl.* | | | | 4 | 5 |
| *Eunotia diodon Ehr.* | | | 2 | | |
| *Eu. pectinalis var. ventralis (Ehr.) Hust.* | | 1 | | | |
| *Eu. praerupta var. bidens Grun.* | | 3 | | | |
| *Eu. sp. 1.* | | 6 | 1 | | |
| *Gomphonema angustatum (Kütz.) Rabh.* | | | | 5 | 3 |
| *G. angustatum var. undulata Grun.* | | | 3 | | |
| *G. sp. 1.* | | | | | 1 |
| *Hantzschia amphioxys fo. capitata O. Müll.* | | | 2 | 14 | 1 |
| *Navicula dicephala (Ehr.) W. Sm.* | | | 3 | 6 | |
| *N. viridula kütz.* | | | | 1 | |
| *Pinnularia borealis Ehr.* | | 2 | 4 | 13 | 3 |
| *P. leptosoma Grun.* | | | 3 | | |
| *P. mesolepta (Ehr.) W. Sm.* | | | | | 1 |
| *P. microstauron (Ehr.) Cl.* | | 2 | 2 | 3 | 1 |
| *P. microstauron fo. diminuta Grun.* | | 1 | | 1 | |
| *P. viridis var. minor Cl.* | | | 1 | 1 | |
| *P. sp. 1.* | | 3 | | | |
| *P. sp. 2.* | | 3 | | | |
| *P. sp. 3.* | | | | | 2 |
| *Stauroneis phoenicenteron Ehr.* | | 2 | 2 | 3 | 2 |
| *Surirella linearis W. Sm.* | | | 1 | | |
| *Synedra ulna (Nitzsch.) Ehr.* | | 1 | 1 | | 1 |
| total | | 24 | 25 | 53 | 21 |

1)各試料について

A．No.11(0 cm)

この層準では，酸性湿地に多い*Eunotia*属と*Pinnularia*属が，全体の約80%を占め，当時，本地点は，酸性の湿沼であったと考えられる。

B．No.6(20cm)

この層準では，前述の*Eunotia*属が激減し，代わって，好アルカリ性の湿沼に多い*Gomphonema*属が出現してくる。また，好酸性種が減り，好アルカリ性種が増えている。流水棲種は，

第7表　出現珪藻表

| Taxa of diatoms | Sampling points | | | | 備考 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | No.11 | No.6 | No.7 | No.9 | 塩性 | *pH* | 止水・流水 |
| *Achnanthes lanceolata Bréb.** | | | 2 | | F | Al | R |
| *Bacillaria paradoxa var. tumidula Grun.* | | | | 1 | E | I | |
| *Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cl.* | | 1 | 4 | 7 | F | Al | I～R |
| *Cyclotella Meneghiniana Kütz.* | | 1 | | | F | Al | I |
| *Diploneis ovalis (Hilse) Cl.* | | 1 | | | F | I～Al | R～I |
| *Eunotia diodon Ehr.* | | 3 | | | F | Ac | L |
| *Eu. lunaris (Ehr.) Grun.* | 1 | | | | F | Ac | L |
| *Eu. pectinalis var. ventralis (Ehr.) Hust.* | 4 | | | | F | Ac | I |
| *Eu. praerupta var. bidens Grun.* | 4 | | | | F | Ac | I |
| *Eu. sp. 1.* | 12 | 3 | | | F | Ac | |
| *Gomphonema angustatum (Kütz.) Rabh.* | | | 5 | 4 | F | Al | I |
| *G. angustatum var. undulata Grun.* | | 3 | | | F | Al | I |
| *G. sp. 1.* | | | | 3 | F | | |
| *Hantzschia amphioxys fo. capitata O. Müll.* | 3 | 9 | 14 | 4 | F | Al | I |
| *Navicula dicephala (Ehr.) W. Sm.* | | 4 | 6 | 2 | F | | |
| *Na. radiosa var. tenella (Bréb.) Grun.* | | 1 | | | F | I～Al | I |
| *Na. viridula kütz.* | | | 1 | | F | Al | R～I |
| *Pinnularia Balfouriana Grun.*** | 1 | | | | F | | R～I |
| *P. borealis Ehr.* | 4 | 7 | 13 | 7 | F | I～Ac | I |
| *P. leptosoma Grun.* | | 4 | | | F | Al～I | |
| *P. mesolepta (Ehr.) W. Sm.* | | | | 3 | F | I | I |
| *P. microstauron (Ehr.) Cl.* | 2 | 2 | 3 | 3 | F | I～Ac | |
| *P. microstauron fo. diminuta Grun.* | 1 | | 1 | | F | I～Ac | |
| *P. viridis var. minor Cl.* | 1 | 4 | 1 | 2 | F | I | I |
| *P. sp. 1.* | 3 | | | | | | |
| *P. sp. 2.* | 5 | | | | | | |
| *P. sp. 3.* | | | | 3 | | | |
| *Stauroneis phoenicenteron Ehr.* | 4 | 2 | 3 | 5 | F | I | I |
| *Surirella linearis W. Sm.**** | 1 | 1 | | | F | | L |
| *Synedra ulna (Nitzsch.) Ehr.* | 4 | 4 | | 6 | F | Al | I |
| total | 50 | 50 | 53 | 50 | | | |

* 直流水棲，　** 水の流れるこけや岩に付着，　*** 高山の湖に多い．

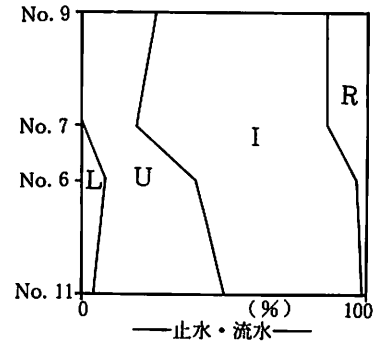
塩性：F＝淡水棲，B＝汽水棲，M＝海水棲，E＝広塩棲

*pH*：Al＝好アルカリ性，Ac＝好酸性，I＝不定性

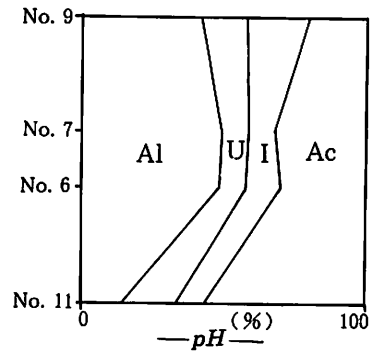
止水・流水：L＝止水性，R＝流水性，I＝不定性

## 第8表　珪藻分析表

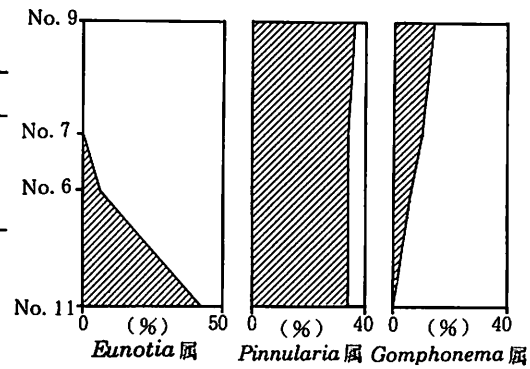
| current \ sample No. | 11 | 6 | 7 | 9 |
|---|---|---|---|---|
| L | 2 | 4 | 0 | 0 |
| R | 1 | 2 | 7 | 7 |
| I | 24 | 28 | 36 | 30 |
| U | 23 | 16 | 10 | 13 |
| total | 50 | 50 | 53 | 50 |

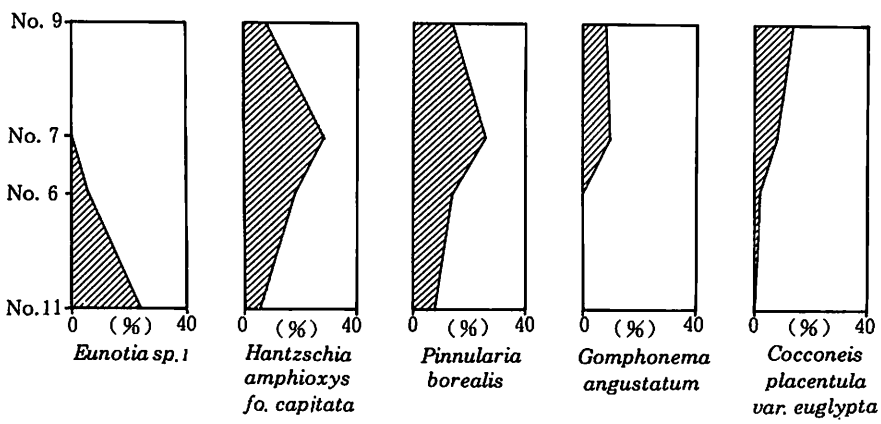



| pH \ sample No. | 11 | 6 | 7 | 9 |
|---|---|---|---|---|
| Al | 7 | 24 | 26 | 21 |
| Ac | 28 | 15 | 17 | 10 |
| I | 5 | 6 | 4 | 11 |
| U | 10 | 5 | 6 | 8 |
| total | 50 | 50 | 53 | 50 |




| Genus \ sample No. | 11 | 6 | 7 | 9 |
|---|---|---|---|---|
| *Eunotia* | 21 | 3 | 0 | 0 |
| *Pinnularia* | 17 | 17 | 18 | 18 |
| *Gomphonema* | 0 | 3 | 5 | 7 |



やや増加しているものの，止水棲種も多い。これらのことから，当時，本地点は，流水の影響をうけ始め，アルカリ性の沼沢化したと考えられる。

C．No.7（30cm）

この層準以後，*Eunotia* 属をはじめとする止水棲種は，全く姿を消す。流水棲種は，14〜15％とやや増加するものの，大半は，好アルカリ・流水不定棲種である。

この層準の優占種は，好アルカリ・流水不定棲ではあるが，aerophilous な *Hantzschia amphioxys fo. capitata* と *pH* 不定〜好酸性・流水不定棲の *Pinnularia borealis* であることなどを考えあわせると，当時，本地点は，No.6 より流水の影響は強くなってはいるが，沼沢のような状態であったと考えられる。

D．No.9（50cm）

前述のように，止水棲種は全く出現せず，好アルカリ・流水不定棲種が，大半を占める。

優占種は，好アルカリ・流水棲〜流水不定棲の *Cocconeis placentula var euglypta* と好アルカリ・流水不定棲ではあるが，小川に多い *Synedra ulna* であり，前述の *Hantzschia amphioxys fo. capitata* は激減し，*Pinnularia borealis* も，優占してはいるものの激減している。

以上のことから，当時，本地点は，さらに強く流水の影響をうけるようになったと考えられる。しかし，一般的な直流水棲種である *Achnanthes lanceolata* などが出現していないことから，完全な流水域になったとはいえない。

**2）ま　と　め**

以上のことから，本地点は，

①No.11の頃，酸性湿地であった。

②No.6の頃，流水の影響をうけ始め，アルカリ性の沼沢地化し始めた。

③No.7，No.9と流水の影響が強くなった。

④しかし，No.9でも，まだ完全な流水域ではない。

ということになる（第8表）。

しかし，珪藻の出現数が，きわめて少ないことや，生態のわかっていない種がいることなど疑問の余地は多い。

## むすびにかえて

最後に，今までの調査結果を見ながら本山遺跡のいくつかの問題点を示すことによってむすびとしたい。

本山遺跡は，弥生時代前〜中期の自然流路と位置づけることができる。そして，出土した土器がコンテナ約200箱以上にものぼっており，その特徴の一つとしてあげられる。これらの時

期，出土状況，埋土状況などから，当遺跡を下記のように大きく3時期に区分できる。

Ⅰ期……流路底部の小溝の時期で，比較的水が流れていたと思われる。縄文時代晩期から弥生時代前期にあたる。

Ⅱ期……流路内に黒色粘質土が堆積する時期で，水が停滞し湿地になっていたのであろう。ただし下層では弥生時代前期の土器が主体となっており，最下層(Ⅰ期)との間に明確な一線を引くことはできない。また，土層では畿内第Ⅲ～Ⅳ様式が主体となっており，かなりの時間幅があるものと思われる。

Ⅲ期……流路最上部の黒色砂質土が堆積する時期で，この時には流路の機能は果していない。

ただし，たとえば黒色粘質土の生成過程など流路の諸変化が，どのような自然環境のもとで行ったかについては不明な点が多く，周辺の調査や自然科学的調査の結果を細かく検討するなどの今後の課題としたい。

さて，ここでまず問題となるのはⅠ期における縄文時代晩期と弥生時代前期の資料である。弥生前期でも謂ゆる古段階の資料が無く，縄文晩期の資料も少ないことや，流路内埋土から一括出土しており層位的に択えることができないことなど，不十分な点が多いが，当地方における縄文～弥生に至る時期の様相を今後調査していく上で重要であろう。

次に，当遺跡を単なる流れ込みとしては択えられないことである。土器の出土状態をみると，黒色粘質土や最下層の砂層の土器は，ローリングを受けているものも少なく，一個体がまとまって出土する例も多かった。これはすぐ近くに集落が存在したことをうかがわせる。また，石包丁が多く出土していることも水田址が近いとも充分考えられるのである[40)]。

従来，海抜10m以下の遺跡の発見が少なかった当地域において，本遺跡の存在が明らかになったことは，今後に多くの問題を残すであろうが，周辺の調査に充分な配慮がなされることを期待するとともに，注意深く調査研究を続けて行きたい。

本報告をまとめるにあたっては，調査終了後4ケ月ほどの短期間にもかかわらず，一応の成果を呈示することができたのも，ひとえに下記の調査補助員，整理員の方々の協力のたまものである。心より謝意を表する。

緒方　泉，岩元雅毅，原　真一，長谷川久洋，村山一弥，藤友陽子，森はる美，船戸裕子，飯田美佐子，正木京子，森　尚江　　（敬称略）

また，神戸市立教育研究所の前田保夫先生，神戸大学熊野茂先生，同大学院生の居平昌士氏には，御多忙中にもかかわらず多くの御協力を頂き，短期間に原稿まで頂載した。心より御礼申し上げる次第である。さらに，$^{14}$C年代測定については，金沢大学理学部附属低レベル放射能実験施設の阪上正信先生に格別の御配慮を頂いたことも明記したい。

最後になったが，調査から報告に至るまでには多くの先生方，諸先輩，調査地近隣の方々，また平安博物館調査部，事務局の諸氏から多大の助言を得た。記して謝意を表する。

渡辺　誠，江谷　寛，泉　拓良，家根祥多，森岡秀人，神戸佳文，長谷川真，左古一郎，尾上稔治，石野照代，大西勝子　　（敬称略）

**註**

1）前田保夫先生の御教示による。

2）石野博信「桜ケ丘周辺の弥生遺跡」(『桜ケ丘銅鐸，銅戈調査報告書(本編)』(京都，昭和44年)。

3）阿久津久『荒神山遺跡発掘調査概要』(神戸，昭和45年)。

4）松下胤信「丘庫県岡本梅林遺跡に就て」(『史前学雑誌』第6巻6号所収，東京，昭和10年)。

5）1983年秋に発掘調査が行われ，第Ⅱ様式単純の溝が検出されたようだが，詳細は報告書の刊行をまちたい。

6）註2前掲書。

7）同上。

8）神戸市教育委員会立会調査による。

9）註2前掲書。

10）森岡秀人『三条岡山遺跡』(『芦屋市文化財調査報告』第10集，芦屋，昭和54年)。

11）註2前掲書。

12）石野博信「神戸市金鳥山遺跡」(『古代学研究』第48号所収，京都，昭和42年)。

13）樋口清之「摂津保久良神社遺跡の研究」(『史前学雑誌』第11巻2，3号所収，東京，昭和17年)。

14）村川行弘「神戸市東灘区本山町中野字生駒出土の銅鐸」(『考古学雑誌』第51巻2号所収，東京，昭和40年)。

15）註2前掲書。

16）註2，14前掲書。

17）註2前掲書。

18）同上。

19）註10前掲書。

20）村川行弘他「神戸市東灘区本山町森字坂下町出土銅鐸」(註2前掲書所収)。

21）註19前掲書。

22）紅野芳雄『考古小録』(西宮，昭和15年)。

23）村川行弘『芦屋廃寺址』(『芦屋市文化財調査報告』第7集，芦屋，昭和45年)。

24）村川行弘他『新修芦屋市史』資料篇(芦屋，昭和51年)。

25）村川行弘他『会下山遺跡』(『芦屋市文化財調査報告』第3集，芦屋，昭和39年)。

26）註10前掲書。

27）同上。

28）村川行弘『芦屋城山遺跡調査概報』(『芦屋市文化財調査報告』第1集，芦屋，昭和34年)。

29）吉岡昭「摂津国芦屋郷土石器時代文化研究」(『新修芦屋市史』資料篇〔前掲〕所収)，註10前掲書。

30）註10前掲書，『城山古墳群緊急発掘調査概報』(芦屋，昭和56年)。

31）註10，24前掲書。

32）同上。

33）註24前掲書，従来西摂地方において，縄文時代早期から前期にかけての遺跡は，朝日ケ丘，山芦屋遺跡のように，六甲山麓南方の沖積地に傾斜する標高50～100mの山麓部に立地するが，後，晩期に入り東へ漸移し，猪名川旧沼口の沖積世に集中する傾向を弥生時代の移行と考えるという説もあるが，近年の調査により，灘区篠原A遺跡では，中，後，晩期の包含層が確認され，本山遺跡においても自然流路内より縄文晩期の土器が出土している。

34）註24前掲書。

35）同上。

36）同上。

37）謂ゆる曲物埋設遺構でもないようである。南博史「謂ゆる『曲物埋設遺構』について」(『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』所収，京都，昭和58年)。

38）渡辺誠「長岡京跡の曲物井戸」(『古代文化』第30巻8号所収，京都，昭和53年)。

39）調査以前調査地南側の国道2号線中央分離帯において電話線埋設工事が行われていた時，黒色粘質土と思われる廃土が見られたという。

40）平安博物館によって昭和59年２月～３月に行われた東灘区本庄遺跡発掘調査において，弥生時代に入る可能性の高い水田址が検出されており注目される。

なお，弥生時代土器に関しては，註２）～36）の文献の他に下記の文献を参考にした。

・小林行雄，末永雅雄，藤岡謙次郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第16冊，京都，昭和18年)。

・小林行雄，佐原真『紫雲出』(京都，昭和39年)。

・佐原真「畿内地方」(『弥生式土器集成』本編２所収，東京，昭和43年)。

・森浩一他「南近畿における前，中期弥生式土器の一様相」(『考古学ジャーナル』№33所収，東京，昭和29年)。

・今里幾次「播磨弥生式土器の動態」(『考古学研究』第15巻４号，岡山，昭和34年)。

・佐原真他『池上，四ツ池』(大阪，昭和35年)。

・橋爪康至他『上ノ島遺跡』(『尼崎文化財調査報告』第８集，尼崎，昭和48年)。

・萩田昭次他『勝部遺跡』(豊中，昭和47年)。

・井藤暁子『池上遺跡』第２分冊土器編(大阪，昭和54年)。

・丸山潔他『楠，荒田町遺跡発掘調査報告書』(神戸，昭和55年)。

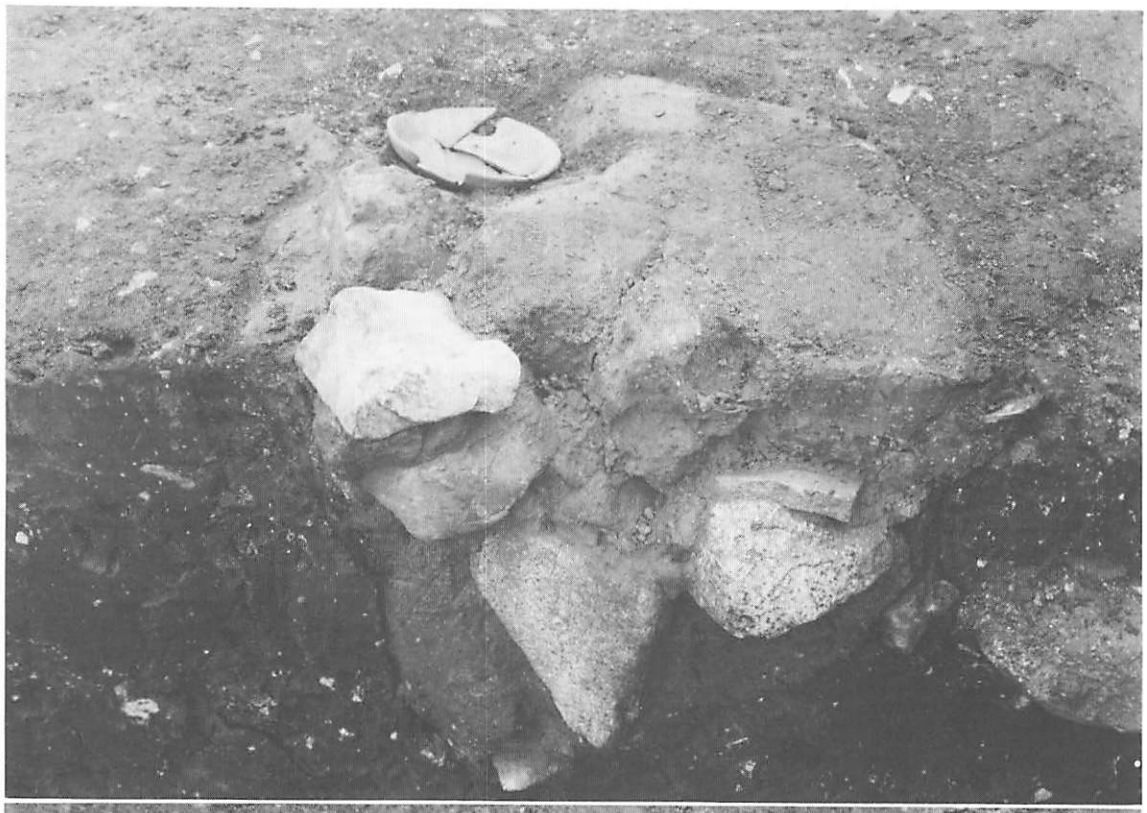
・森岡秀人「土器からみた高地性集落会下山の生活様式」(『考古学論叢』所収，吹田，昭和55年)。

・福井英治他『田能遺跡発掘調査報告書』(『尼崎文化財調査報告』第15集，尼崎，昭和57年)。

上：遺跡遠景（○印，保久良山より）　下：遺跡全景（南より）

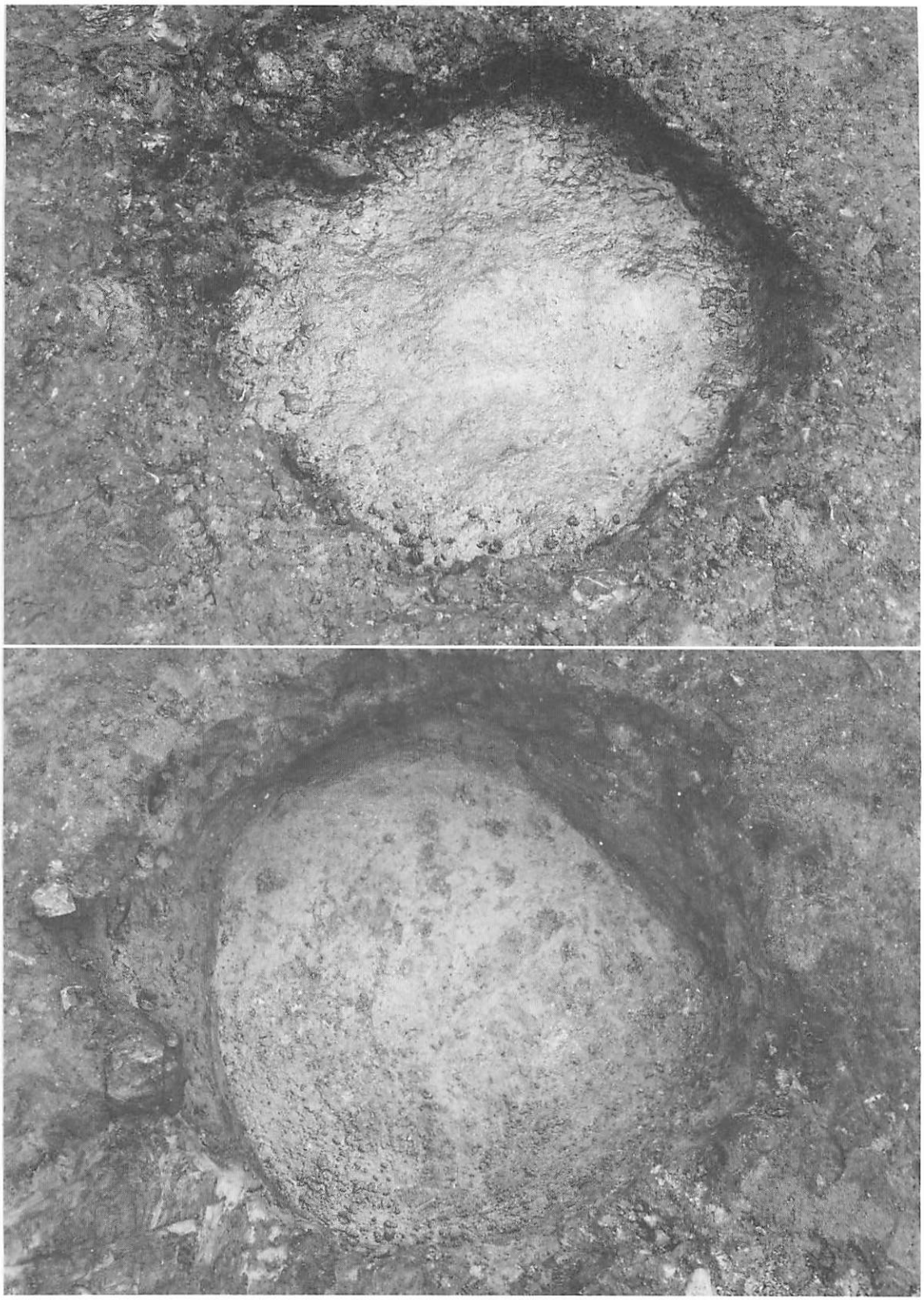
図版第 2

中世井戸全景（上：南より　下：東より）

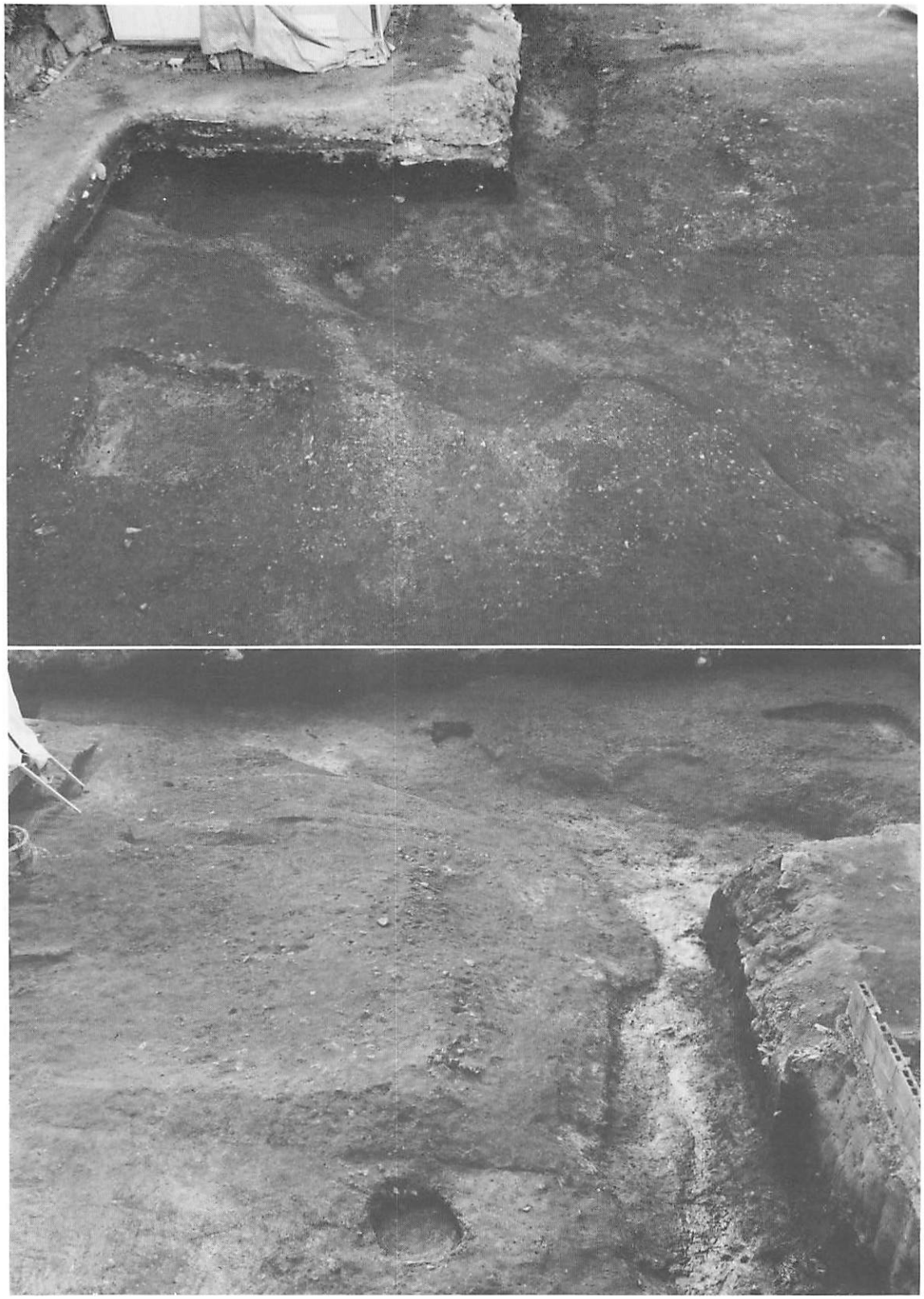


上：土壙 1 全景（北より） 下：土壙 2 全景（西より）

図版第４



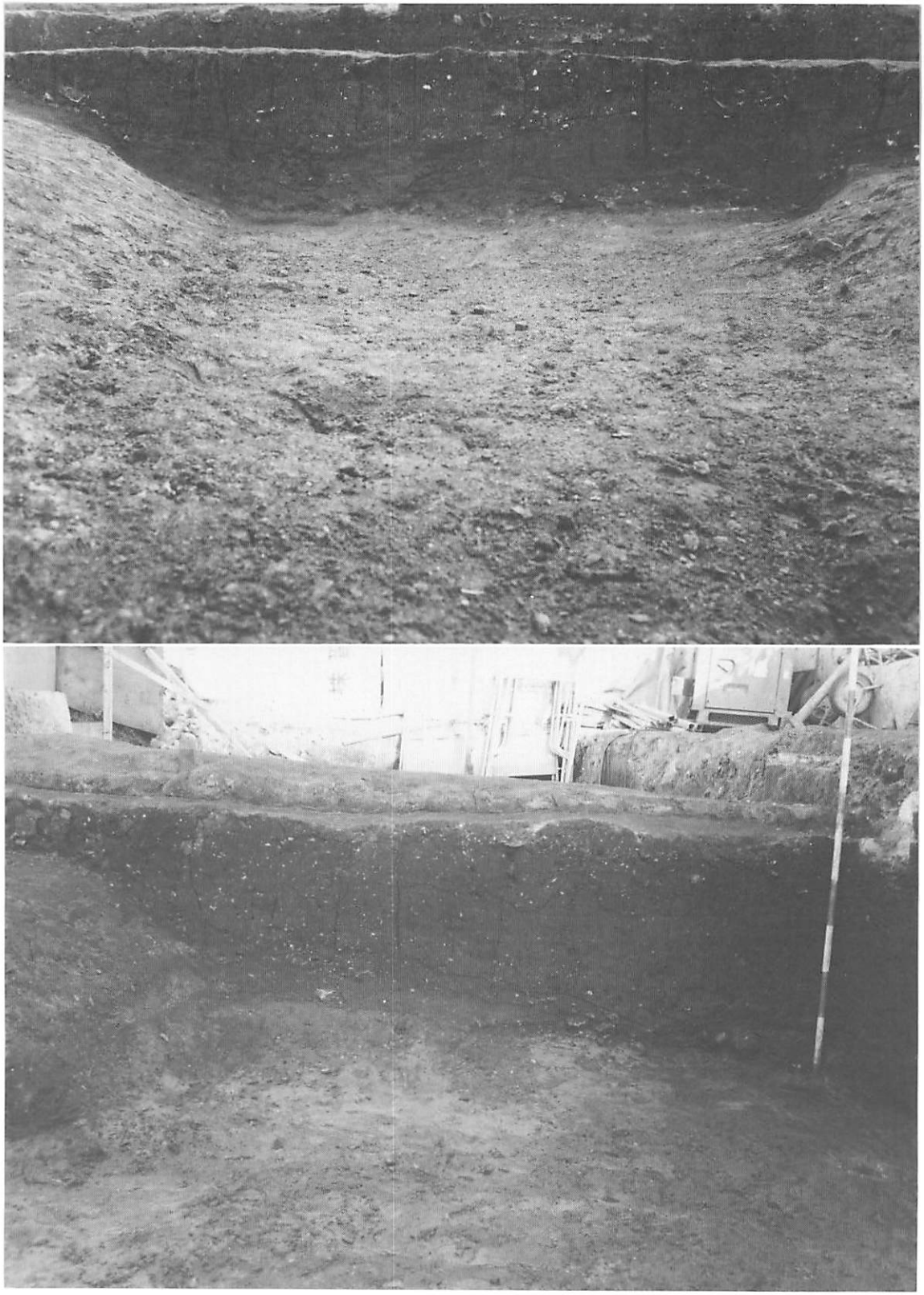
上：土壙３全景（西より）　下：土壙４全景（東より）



自然流路全景（上：南より　下：北より）

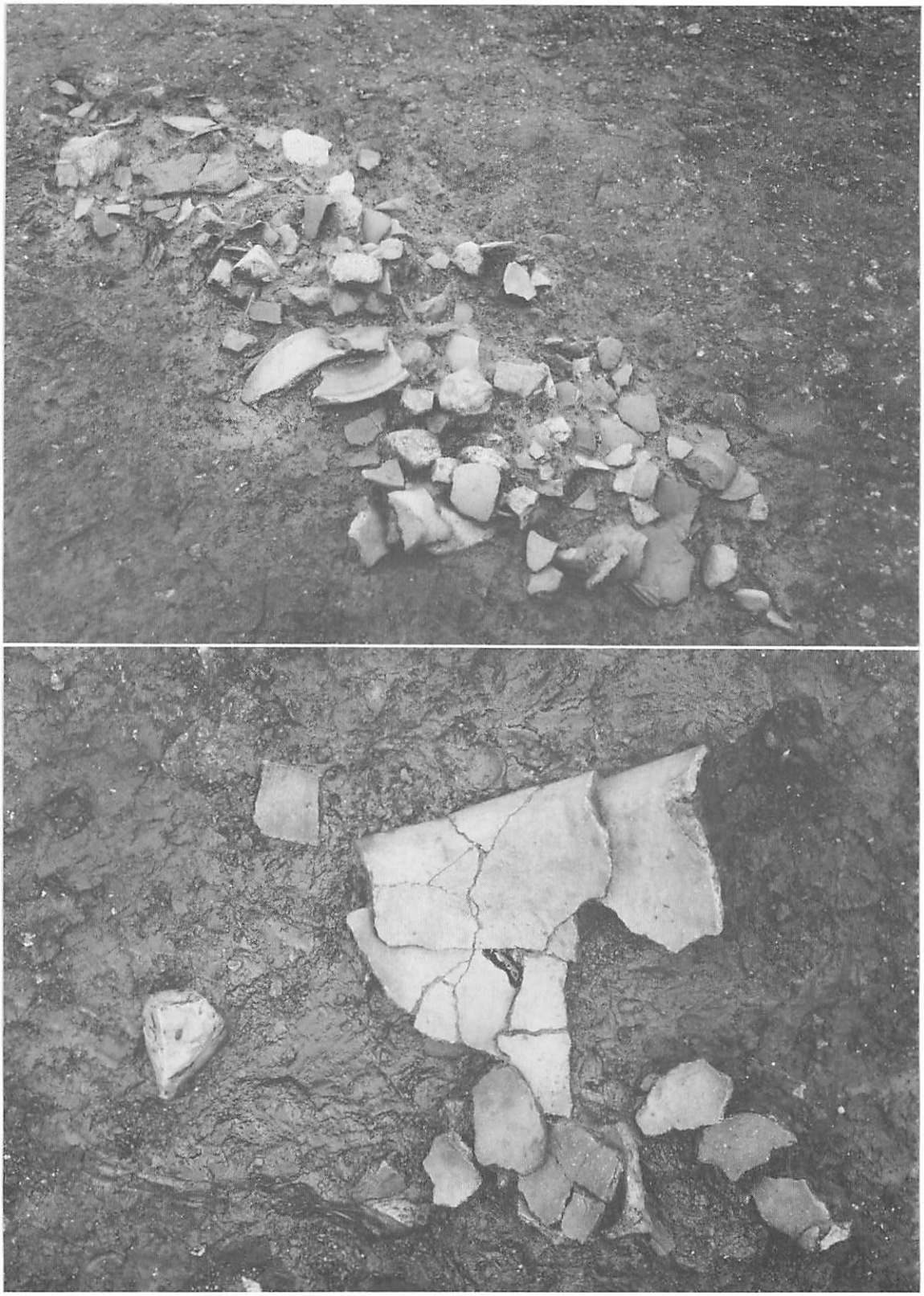
図版第 6

自然流路埋土断面・1（上：第1セクション　下：第2セクション）



自然流路埋土断面・2（上：第3セクション　下：第4セクション）

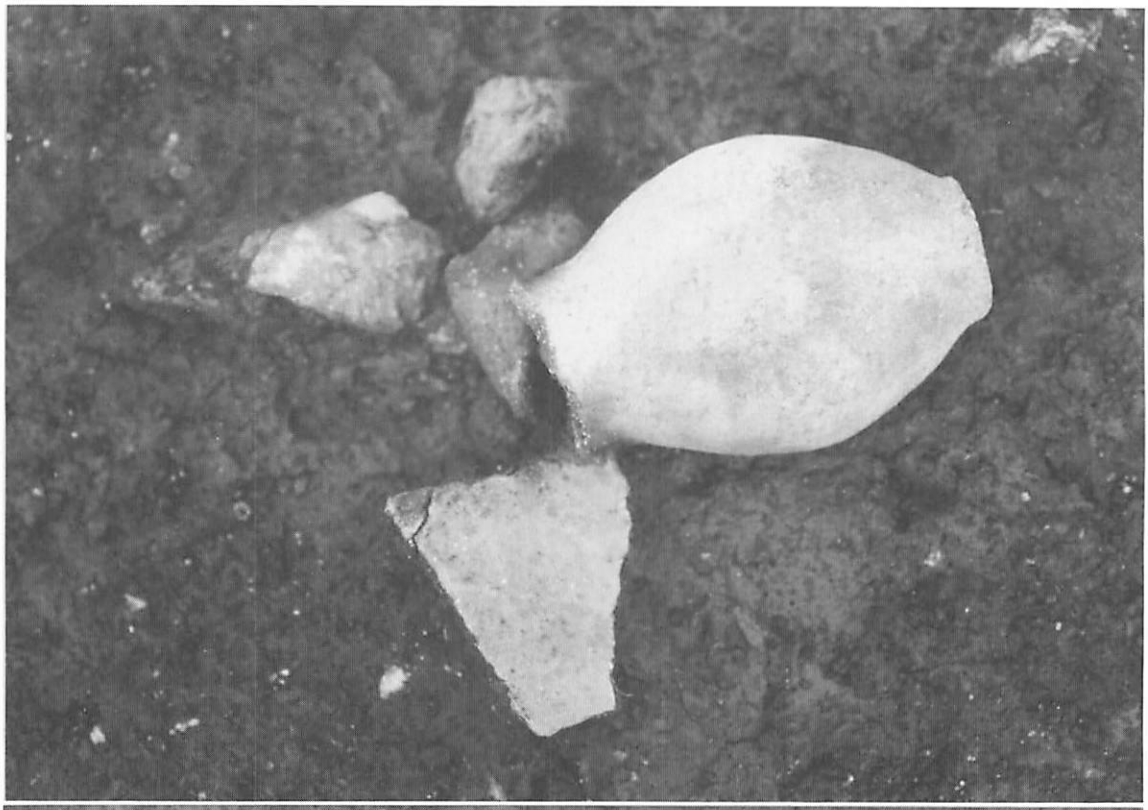
図版第 8



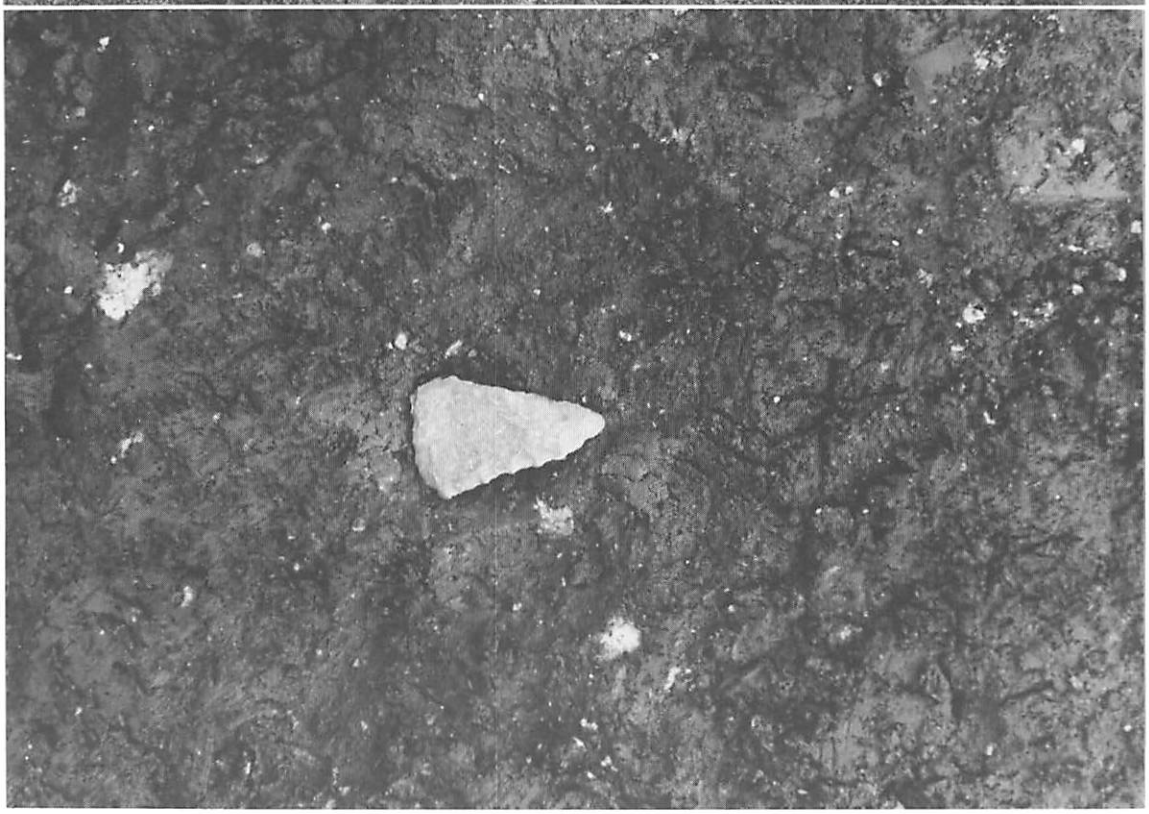
土器出土状態・1（上：黒色砂質土内土器だまり　下：黒色粘質土内甕形土器）

土器出土状態・2（上：黒色粘質土内甕形土器　下：最下層内ミニチュア土器）

図版第10



上：壷出土状態　下：砥石・壷出土状態



石器出土状態（上：磨石　下：石鏃）

図版第12

上：石斧の柄未製品？出土状態　下：板状木製品出土状態

神戸市東灘区

本山遺跡発掘調査報告書

発行日　昭和59年3月31日

編　集　平安博物館考古学第2研究室
南　博史

発　行　財團法人　古代學協會
604 京都市中京区三条高倉
TEL.075(222)0888
振替京都8−850番

制　作　ビクトリー社
604 京都市中京区油小路通錦上ル
TEL.075(221)1420